

平成30(2018)年度 文化庁委託事業報告書

方言と方言の昔話による生活文化の保存・継承

平成31（2019）年3月

茨城大学人文社会科学部 杉本妙子研究室

まえがき

本報告は、平成 30 年度文化庁委託事業・被災地における方言の活性化支援事業に応募・採択されて行った調査研究事業「方言と方言の昔話による生活文化の保存・継承」の報告書である。平成 24 年度文化庁委託研究事業「東日本大震災による危機的な状況が危惧される方言の実態に関する調査研究（茨城県）」から始まり、本年度で 7 年間、継続して取り組んできた事業の報告である。今年度もまた、東日本大震災の被災地である茨城県および福島県浜通り地域における方言の継承や、方言をとおした地域活性化活動に活かし得るものとして、特に地域の昔話（民話）に注目して取り組んだ。その一つが、平成 28 年度から続けている方言による昔話の会である。この方言昔話の会は、今年度で 3 回目の開催である。茨城県内各地の語り手の方々をはじめ、福島方言、山形方言の語り手、そして、西の徳島方言、広島方言の語り手の方にも加わっていただいた。様々な地域の方言を聞くことにより、方言の多様性を感じながら、地元や他地域の方言の良さやおもしろさ、また、地元の方言だからこそ感じられるものというものを、多くの方に感じていただけたものと思っている。この方言昔話の会については、会の詳細、来場者アンケートの結果等、本報告書の第二章に記した。方言昔話の会で語っていた昔話等については、DVD にまとめて本報告書に添付したので、第二章の記述といっしょにご視聴いただければ、方言の魅力、方言だから表せることなどを、感じていただけるのではないかとと思っている。昔話の会を行うようになって、会を継続して行うことの意味を改めて考え、語り手の方々自身が、語ることをどのように捉えておられるかを知りたい、知るべきではないかと思うようになった。そして、折に触れて、語ることにについての思いを聞くようにしてきたが、本報告書には、民話の伝承者でもある庄司アイ様よりお聞かせいただいたお話しの一部を、「聞き書き」として第三章に収めることができた。庄司様と民話・わらべ歌との関わり、民話やわらべ歌は暮らしそのものだということを、庄司様のお話しをとおしてご理解いただけるものと思う。また、私共では、地域を方言で知るための取り組みとして、委託事業初年度の平成 24 年度から方言談話の収集や文字化・公表を継続してきている。本報告書でも、わずかではあるが、茨城県大子町とかすみがうら市の方言談話を本報告書の第四章に収めることができた。茨城北部地域の暮らしや方言に対する意識の一端を見ることができる方言談話である。

東日本大震災と原発事故から 8 年が経とうとしているが、他地域に目をやると、この 1 年間だけでも、大地震や豪雨による被災があちこちであった。繰り返される日常の崩壊に、その都度、胸が痛んだ。また、その度に、8 年前のことが思い出されたり、その後のままならない状況に気持ちが沈んだりであった。そして、このようなときに、方言や民話がこれからに向かって、どんな役に立つのか、立たないのか、いや立つに違いないなどということ、改めて考えながらの 1 年だった。暮らしとともにある方言や民話、

暮らしそのものでもある方言や民話は、人を支え、人と人をつなげてくれるものである。そう思いつつ、これまでに会った皆さまとの関係を大切にし、これから出会う皆さまともつながっていききたいと思う。

今年度の事業でも、多くの方々のご支援、ご協力をいただきました。関係自治体等の皆さま、個人の皆さま、特に名前を挙げることをご承諾くださった個人の皆さまには、ほんとうにお世話になりました。その皆さまのお力添えに感謝し、ここにお名前を挙げさせていただきます。

《自治体等団体》

茨城県教育委員会様、茨城県内への避難者・支援者ネットワーク・ふうあいねっと様、茨城大学図書館様、大子町教育委員会様

《個人のご協力者の皆様》（五十音順）

青木いづみ様、雨貝恵子様、五十嵐敬子様、海老原佳美様、川澄敬子様、河野昭夫様、小林久雄様、古村いさ子様、近藤たみ様、齋藤千二様、佐藤貞子様、佐藤富子様、佐藤留三郎様、白川ケイ子様、鈴木澄男様、五月女五美枝様、東ヶ崎秋雄様、東ヶ崎婦美子様、平島則子様、深谷哉子様、藤枝豊子様、藤枝安子様、三浦京子様、吉成智枝子様

最後になってしまったが、昔話の会のサポート、映像編集、アンケート調査データの入力や集計、談話資料文字化補助等を誠実に手伝ってくれた学生の穴田祐介さん、今井菜月さん、大谷咲喜さん、角田咲桜さん、菊地七海さん、菊地唯人さん、桜井駿さん、中島啓太さん、羽石桃花さん、濱崎陸さんに対しても、ここに記して感謝いたします。

平成 31(2019)年 3 月

茨城大学人文社会科学部 杉本妙子

目 次

第一章 概要	1
I 業務の概要	2
II 談話収集等の調査の概要	6
第二章 方言による昔話の会	9
I 「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話3」の実施概要	10
II 方言昔話等	13
【DVD 収録の昔話、他】	
弁当が仕事（共通語・茨城方言）／後久保の狐／堂坂の白蛇／	
沢又三太のはなし／蛇女房／だいだらぼう／笠地藏／貧乏の神／	
瞽女の坊／茨城方言ミニ講座／蛙ぼたもち／ぼた餅は長持の中	
III 来場者アンケート結果	41
IV 関連資料	51
第三章 民話についての聞き書き	55
：庄司アイさんと民話・わらべ歌	
第四章 各地の方言談話	69
I 文字化の基準・記号の見方	70
II 茨城県久慈郡大子町の方言談話	73
【1】お茶栽培の話／【2】蒟蒻の話／【3】節分の行事の話	
III 茨城県茨城県かすみがうら市（旧千代田村）の方言談話	90
【1】方言の話	

参考文献

第一章 概要

I 業務の概要

1 業務題目

方言と方言の昔話による生活文化の保存・継承

2 目的

本業務の目的は、東日本大震災の被災地である茨城県及び福島県浜通り地域で受け継がれてきた方言による昔話（民話）を、それぞれの地域の生活文化を継承するものとして捉え、主に方言の昔話によって当該地域の文化を学ぶとともに、方言の魅力の発信を行うことである。また、各地の方言資料としての民話の記録や民話の語り手への聞き取り調査から、方言・民話の保存・継承に資するための基礎資料作りを行うことである。

3 業務の期間

平成30年11月6日～平成31年3月20日

4 当該年度における課題項目とその業務実施状況の概略

本業務は、平成24年度から平成29年度の6年間、被災地方言の保存・継承を目的とする文化庁委託事業を茨城大学が受託し、6年間の事業において行ってきた取り組みを継続するものである。当該年度は、本業務の目的に沿って、地域の文化としての方言・方言の昔話（民話）を中心に記録保存及び公表するとともに、地域の生活文化としての方言・民話を用いて、地域社会に還元する取り組みを行った。具体的には、以下の5項目（当初計画の4項目及び追加1項目）の取り組みである。

(1) 被災地の方言談話を収録・保存する取り組み

平成28・29年度に行った調査において、未公表の各地域の暮らし・民俗等に関わる談話について文字化を行い、茨城地域の談話資料を充実させた。また、下記(3)における聞き取り調査の一部についても、被災地方言の談話資料に準じる聞き書として文字化した。調査や談話内容等については、次節「Ⅱ 談話収集等の調査の概要」と重複するので、ここでは省略する。

(2) 方言による昔話の語りの会を実施し、地域への愛着や自信を深める取り組み

茨城方言及び福島浜通り方言を中心に、昔話の語りの会を実施し、方言をとおして地域への愛着や自信を深める取り組みとして、平成28・29年度に続いて「語ってみっ

ぺ・聞いてみっぺ・方言昔話3」を行った。

過去2回の昔話の会の実施と同様に、茨城大学図書館と連携するとともに、地域で活動している再話グループや民話の会等の協力を得て、平成30年12月8日（土）に茨城大学図書館ライブラリーホールにおいて開催した。この開催に際しては、これまでと同様に茨城県教育委員会の後援を得て実施した。この昔話の会では、茨城方言を中心に福島浜通り方言等による昔話の語り、茨城方言ミニ講座、昔話に関連する布絵の展示等を行った。さらに、会の実施時に、自記式調査を実施して成果を検証した。また、この昔話の会の実施内容については、昔話・方言ミニ講座・自記式調査の結果等を本報告書第二章において述べた。本報告書には、会の映像記録（昔話の語りと方言ミニ講座を編集したDVD）を添えて、茨城県内を中心に公共図書館等に送付した。これによって、広く活用を図ることができるものと考えられる。あわせて、昔話の会の実施報告書（文化庁に提出）において、詳細に報告した。

また、青森県八戸市と岩手県釜石市で継続的に開催されている南部弁の日のイベント（方言の昔話の語りの会）を視察し、本業務で実施した昔話の会を相対的に捉えることができた。視察は、以下の2件である。

①平成30年12月1日（土）14:00～19:00

「第6回南部弁の日 はっちがずっぱど南部弁～うん、これアよごあんすナ～」

青森県八戸市・八戸ポータルミュージアム「はっち」

②平成31年1月27日（日）14:00～16:30

「南部弁サミット in 釜石 おらは弁で語っぺし」

岩手県釜石市・釜石市民ホール TETTO ホール

3 地域で行われている方言昔話の会は、それぞれの地域性を反映している。茨城県における会では、茨城方言への関心や評価を高めることにつなげることが重要な点であり、その点を考慮して、これまでの会の内容や他県での取り組み内容を参考に、第3回の昔話の会の構成を検討して実施した。第二章で述べるように、第1・2回目の昔話の会の良かったところを取り入れ、さらに、新たな工夫を行うことによって、会の目的を達成することができた。それには、会の協力者の力によるところも大であった。今回の成果（自記式調査の結果も含めて）は、今後の茨城における昔話の会の活動等に生かし得るものである。（「第二章」参照）

(3) 民話の語り手への聞き取り調査と聞き書きの作成

東日本大震災の被災地域である茨城県と宮城県において、方言昔話の語り手に対する聞き取り調査を行った。昔話（＝民話）は、地域の文化であり、その語り手は地域の文化の継承者、担い手である。民話が、どのような存在であるのか、どのような役に立つのか等を、語り手側（内側）からの声を聞くことにより、今後の昔話に関わる活動の参考とするためである。本業務においては、宮城県山元町と茨城県東海村にお

いて聞き取り調査を行った。そのうち、本報告書には、宮城県山元町における聞き取り調査のうちの一部（民話やわらべ歌はどのような存在か、どんな役に立つのか、といったことに関連した部分）を聞き書きとしてまとめ、第三章に報告した。聞き書きの形での報告であるが、方言談話資料としても活用し得るものとすべく、ほぼ聞いたとおりに、発音や俚言等にも注意した聞き書きとして文字化した。この聞き取り調査によって、民話はそれぞれの家庭の暮らしそのものであること、わらべ歌もその性格が強いこと、民話やわらべ歌が持つ力が困難な時の我々の支えになり得ることなどが分かった。このことは、昔話の会を継続していく意義にも通じることであろう。なお、聞き取り調査時期は、本業務への準備的取り組みと位置づけて行ったため、本業務期間以前であった。（次節「Ⅱ」の「3」参照）

(4) Web ページや地域のメディアを介した情報発信の取り組み等

上記（2）の昔話の会を中心に、平成 29 年度改修の web ページ及び茨城大学の web ページにおいて、本業務の情報を発信した。また、新聞を始めとする地域のメディアに対しても情報提供した。（昔話の会を取り上げた 2018 年 12 月 25 日の茨城新聞の記事（→次ページ）参照）

平成 29 年度改修の web ページについては、本業務期間内には十分に充実させることはできなかった。この点は今後の課題である。

(5) その他の取り組み

本業務の成果を地域社会に還元するために、過去も含めた本業務の成果を活用した学びの機会として模擬授業を行った。

平成 29 年度までに作成した方言教材、昔話集、方言談話資料等を活用し、方言を学ぶ講座を実施した。本委託事業期間外に実施したものも含めて、2 講座を担当実施した。

①茨城大学オープンキャンパスにおける模擬授業として、「日本語は一つじゃない!?

ー日本語方言学・社会言語学のすすめー」を担当。平成 30 年 7 月 28 日実施

②茨城県立大子清流高校模擬授業（茨城大学人文社会科学部と大子町との連携協定に基づく大子清流高校の大学訪問）として、「茨城方言ミニ講座：大子町方言談話をもとに」を担当。平成 31 年 1 月 23 日実施

以上を総括すると、本業務の実施内容は当初の計画と若干異なるところはあるものの、概ね実施することができ、業務の目的を達成できたと判断する。

5 業務実施体制

業務実施体制は次のとおりである。

・代表責任者：

杉本妙子（茨城大学人文社会科学部教授）

担当内容：業務全体の統括、方言（談話を含む）に関する現地調査、茨城方言をテーマとした講座の実施、方言昔話の会の開催（責任者）、方言談話集作成、報告書等の作成、等

・実施補助：

・穴田祐介（茨城大学人文学部学生）

担当内容：昔話の会の映像編集

・大谷咲喜・角田咲桜・菊地七海（茨城大学人文社会科学部学生）

担当内容：昔話の会当日業務補助、昔話の会のアンケート調査データの入力・集計

・今井菜月・角田咲桜・菊地唯人・桜井駿・中島啓太・羽石桃花・濱崎陸（茨城大学人文社会科学部学生）

担当内容：談話資料作成補助

2018年12月25日（火）、茨城新聞、朝刊14面掲載記事

方言の面白さ体感
水戸 昔話を聴き比べ



方言の面白さを体感した「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話3」=水戸市文京

茨城、福島、山形、徳島などの方言で昔話を聴き比べるイベント「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話3」が、水戸市文京の茨城大図書館で開かれた。常

陸みんの会、七絃の会などのメンバーが、方言で演じる昔話の面白さを伝えた。

文化庁委託事業「方言と方言の昔話による生活文化

の保存・継承」を受けた茨城大が主催した。東日本大震災の被災地域で方言の保存継承により地域コミュニティの再生に寄与することが目的。

人文社会科学部の杉本妙子教授が「方言と民話を通して、地域への愛着や自信を深めて」と趣旨を説明した。昔話の「弁当が仕事」を巡り、来場者は共通語、茨城弁、広島弁、徳島弁の四つを聴き比べた。

東日本大震災で福島県南相馬市で被災し現在は東京都町田市に住む白川ケイ子さんは、同県浜通りの方言で「笠地蔵」を披露した。

（清水英彦）

Ⅱ 談話収集等の調査の概要

「Ⅰ 業務の概要」の「4 当該年度における課題項目とその業務実施状況の概略」の「(1) 被災地の方言を収録・保存する取り組み」として行った方言談話収集調査、ならびに「(3) 民話の語り手への聞き取り調査と聞き書きの作成」について、調査を行った地点（地域）、調査者、文字化等担当者等は下記の「1」のとおりである。地点（地域）別の談話一覧は「2」のとおりである。また、本報告で聞き書きとしたものを含むその他の調査については「3」に示す。

1 文字化対象の談話収集調査地域

(1) 茨城県久慈郡大子町

調査地点：久慈郡大子町左貫（調査協力者宅）

調査年月日：2017年2月1日

話者：男性2名

調査員：杉本妙子

文字化等担当者：杉本妙子

文字化補助：学生5名（「5 業務実施体制」参照）

(2) 茨城県かすみがうら市（旧千代田村）

談話収録地点：かすみがうら市中志筑（調査協力者宅）

調査年月日：2016年9月27日

話者：女性1名

調査員：杉本妙子

文字化等担当者：杉本妙子

文字化補助：学生2名（「5 業務実施体制」参照）

2 方言談話一覧

(1) 茨城県久慈郡大子町の方言談話

①お茶栽培の話

②蒟蒻の話

③節分の行事の話

(2) 茨城県茨城県かすみがうら市（旧千代田村）の方言談話

①方言の話

3 その他の調査

談話収集等の方言調査のほかに、民話の語り手の方々に対する聞き取り調査（本事業期間外における調査を含む）を行った。

（１）宮城県亶理郡山元町

調査場所：山元町坂元 防災地域交流センター ふるさと・おもだか館

調査年月日：2018年8月6日（月）

調査目的：民話伝承者にとって、民話の語りとはどのようなものかを知るため

協力者：女性2名

調査員：杉本妙子

同席者：川澄敬子、藤枝安子（再話グループ「七絃の会」メンバー）

（２）茨城県那珂郡東海村

調査場所：東海村立図書館 研修室3

調査年月日：2018年9月4日（火）

調査目的：民話の語り手にとって、語ることはどのようなものかを知るため

協力者：女性3名、男性1名

調査員：杉本妙子

第二章 方言による昔話の会

平成 30（2018）年 12 月 8 日（土）に、茨城大学図書館と連携して「茨城大学図書館土曜アカデミー」として開催した、被災地方言による昔話の会「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話 3」（茨城県教育委員会後援）の実施概要、方言昔話、来場者アンケート結果について述べる。

I 「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話 3」の実施概要

(1) 名称 「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話 3」

(2) 主催者等

主催…平成 30 年度文化庁委託事業・被災地における方言の活性化支援事業「方言と方言の昔話による生活文化の保存・継承」（茨城大学・代表責任者 杉本妙子）
ならびに茨城大学図書館
後援…茨城県教育委員会

(3) 実施の目的

茨城方言を中心に被災地方言による昔話の語りの会を開催し、方言をとおして地域への愛着や自信を深める。

(4) 実施日時 平成 30 年 12 月 8 日（土） 14：00～16：20

(5) 実施場所 茨城大学図書館本館 3 階ライブラリーホール（水戸キャンパス）

(6) 来場者数 約 100 人

(7) プログラム

①開会のあいさつ・会の趣旨説明

②方言・共通語の違いを楽しむ語り・聞き比べ

・「弁当が仕事」…共通語／広島方言／徳島方言／茨城方言（県央）

③茨城弁の昔話を楽しむ（その 1）

- ・茨城方言（県北）「^{うしろくぼ}後久保の狐」
- ・茨城方言（県北）「^{どうさかい}堂坂の白蛇」
- ・茨城方言（県北）「^{さわまた}沢又三太のはなし」
- ・茨城方言（県央）「蛇女房」

④カーテンシアター：茨城方言（県央）「だいだらぼう」

※「カーテンシアター」は、紙芝居の絵を横長のカーテン状につなげたものを、昔話の語りの進行に合わせて開いていくもの。

（ 休 憩 ）

⑤他地域方言の昔話

- ・福島浜通り方言「笠地藏」
- ・山形左沢方言「貧乏^{こぜ}の神」
- ・福島中通り方言「瞽女^{こぜ}の坊」

⑥（茨城方言（県央）「茨城方言ミニ講座」

⑦茨城弁の昔話を楽しむ（その 2）

- ・茨城方言（県央）「蛙ぼたもち」
- ・茨城方言（県央）「ぼた餅は長持の中」

⑧わらべ唄をごいっしょに：お正月のわらべ唄 2 曲

⑨おわりのあいさつ

(8) その他

- ・当日、開催前の配布資料として、B5 版 9 ページ（表紙・裏表紙を除く）の冊子状の資料と「お正月のわらべ唄」の歌詞、アンケート調査用紙、チラシを配布。資料内の昔話については、話のあらすじ、あるいは導入としての昔話の紹介文を載せることで、直に聞いて楽しんでもらうことを目指した。
- ・会終了後の参考資料として、B5 版 13 ページ（表紙を除く）の冊子状の資料を配布。会で語られた昔話の一部をまとめたもので、会の後に改めて昔話を楽しんでもらうためのもの。
- ・布絵の展示。会場（ライブラリーホール）外には、昔話（花咲か爺、浦島太郎、笠地蔵、カップレ餅、他）に関連した布絵 8 点の展示。布絵は、茨城町の個人の製作によるもので、1.5 メートル四方大から 1.5×4 メートル大程度の作品。また、会場のステージを飾るものとして、1 メートル四方大の花（牡丹、椿）の布絵 2 点を展示。休憩後には 40 センチ四方大の鏡餅の布絵を追加展示。

《参考》会の趣旨説明（会当日に示して説明したパワーポイントの内容に同じ）

平成 30 年度文化庁委託事業・被災地における方言の活性化支援事業

「方言と方言の昔話による生活文化の保存・継承」・

茨城大学図書館土曜アカデミー

「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話 3」

日時：平成 30（2018）年 12 月 8 日（土） 14:00-16:00（予定）

場所：茨城大学図書館ライブラリーホール

文化庁「被災地における方言の活性化支援事業」とは？

事業の目的

本事業は、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災において、被災や避難に伴い消滅の危機にあると考えられる被災地域の方言について、「東日本大震災からの復興の基本方針」（平成 23 年 7 月 29 日）において「『地域のたから』である文化財や歴史資料の修理・修復を進めるとともに、伝統行事や方言の再興等を支援する。」と明記されていることを受けて、被災地域の方言の保存・継承の取組や方言の力を活用した復興の取組を支援することにより、被災地域の方言の再興及び地域コミュニティの再生に寄与することを目的とします。

（同事業募集案内より）

方言を取り巻く環境はどうなっているのか？

今、方言はどのような状況にあるのか？

◎ユネスコの世界の危機言語の指摘

ユネスコは、日本国内の言語（方言）の中で、アイヌ語と八丈語、奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、与那国語となどの方言群を消滅危機言語として指摘。文化庁も「消滅の危機にある方言・言語」に関する事業を展開している。

→ ユネスコが指摘した言語だけが危機的状況なのか？

→ 日本各地の方言が、今、危機に瀕しているのではないか？

…震災、共通語化、地域の共同体や家族の形態の変化、地域によっては方言へのマイナスイメージ、…

◎平成 29 年改訂の学習指導要領

中学校学習指導要領国語編中学校 1 学年〔知識及び技能〕(3)我が国の言語文化に関する事項ウ「共通語と方言の果たす役割について理解すること。」

《解説》

共通語は地域を越えて通じる言葉であり、方言はある地域に限って使用される言葉である。共通語を適切に使うことで、異なる地域の人々が互いの伝えたいことを理解することができる。一方、方言は、生まれ育った地域の風土や文化とともに歴史的、社会的な伝統に根ざした言葉であり、その価値を見直し、保存・継承に取り組んでいる地域もある。

例えば、東日本大震災による被災地域においても、方言を使うことで被災者の心が癒やされるなどした事例が報告されるとともに、方言の保存・継承の取組そのものが地域コミュニティの再生に寄与するなど、地域の復興に方言の力を活用する取組も進められている。

こうした方言が担っている役割を、その表現の豊かさなど地域による言葉の多様性の面から十分理解し、方言を尊重する気持ちをもちながら、共通語と方言とを時と場合などに応じて適切に使い分けられるようにすることが大切である。

本日の会の趣旨

地域の文化としての方言・民話をとおして、地域への愛着や自信を深める目的で、方言による昔話の語りの会を開催します。

具体的には、茨城方言の昔話を中心に、福島方言や山形方言による昔話、さらに、方言の多様な姿や各地の方言のおもしろさを体感するために、方言による聞き比べ、カーテンシアター、方言ミニ講座なども加えた構成で、本日の会を開催します。様々な方言の語りなどを聞くことにより、地域の方言への関心が高まり、そのことが地域への愛着や地域の文化である方言・民話の価値の再発見、そして地域への自信を深めることにつながると考えています。

Ⅱ 方言昔話等

本節では、「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話 3」（2018 年 12 月 8 日開催）において語られた方言昔話、茨城方言ミニ講座、わらべ歌の内容を示す。方言昔話については、茨城方言によるものを中心に示し、一部の西日本の方言による昔話については、共通語版の昔話を示し、方言版は省略した。なお、本節で省略した方言版昔話についても、会当日の映像を編集した DVD には省略していない昔話等とあわせた全てを収め、本報告書に添付した。

昔話は、同じ語り手による同じ話であっても、語る度に全く同じということではなく、多少は変わるものである。そこで、本節では再話した昔話で、再話者である語り手から再話文を提供していただいたものについては、その再話文を示した。そのため、実際の語り（DVD 映像）とは、若干異なるところがある。再話文のない昔話等については、当日の語りの音声・映像によって、文字化した。

文字化の示し方は、おおむね以下のとおりであるが、昔話によって示し方が違う場合がある。また、適宜、方言の語句に注を付したが、注の付け方・多寡についても、昔話によって異なる。

〔方言昔話等の文字化の示し方〕

- ・昔話等は、「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話 3」のプログラム順に示した。
- ・昔話の題目の脇に、〔再話〕とあるのは、再話者による再話文である。なお、文節間の 1 字空けや漢字のルビなど、読みやすさや発音を表すために、一部、元の再話に手を加えたところがある。再話の原話については、各昔話のはじめに記した。
- ・各昔話の参考になっている文献がある場合は、昔話の後に参考文献を示した。
- ・昔話等の題目のみを示した演目は、「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話 3」において語られたものを文字化したものである。
- ・原則として、語りの発音どおりの平仮名・漢字交じり文で表した。複数の読み方ができる漢字には、適宜、振り仮名を付した。
- ・言いよどみ、言い直し等は、適宜、省略した。
- ・語と語、あるいはまとまった意味の文節・句と文節・句の間を一字あけにするとともに、適宜、句読点を付けた。
- ・助詞「ハ・ヘ・ヲ」（発音は「ワ・エ・オ」）は「は・へ・を」で、長音（伸ばす音）は主にカタカナ「ー」または小さい「あ、え」などで表した。なお、ガ行鼻濁音については、ガ行濁音と表記の区別はしていない。
- ・標準語と異なる方言の発音や語形は、かな漢字表記にルビを付して表した。
- ・適宜、発話には出てこない助詞や語の一部等を〔 〕で補った。
- ・わかりにくい表現や発音については、その直後に（ ）中で意味を示した。
- ・一部、聞き取れなかった箇所や発音が判別できないところには、下波線を付した。
- ・わかりにくいと思われる方言の語（俚言）や地名等については、適宜、注を付けた。注の解説は、各昔話等の後に示した。

1-1 共通語版「弁当が仕事」〔再話〕

※高萩市教育委員会編（1980）『高萩の昔話と伝説』（高萩市、153～154 ページ）の原話「弁当が仕事」をもとに七絃の会が共通語で再話。

むかし、あるところに、たいへんな大飯食らいの奉公人の男がいました。野良仕事に行くのに、いつも、お櫃にいっぱいご飯を詰めて持っていくのです。それでもこの男は、ひとりで一日に田んぼを全部耕してしまうような働き者で、このあたりでは「まんにんのう」とよばれていました。

ある日のこと、近所人のたちは、男があまりにも仕事はかどるのでうらやましがって、おかみさんに言いました。

「しかしまあ、お宅の奉公人は、よく働くねえ」

すると、おかみさんは言いました。

「なあに、奉公人が仕事をしているんじゃないんですよ。弁当が仕事をしてるんですよ。なにしろお櫃を担いで田んぼに行くんだから」

奉公人は、おかみさんがそう言うのを聞いてしまって、

「なあんだ、おれが仕事をしているんじゃないのか。弁当が仕事をするって言うんだから、今日は万能の先にお櫃を縛り付けて、それで昼寝でもしていよう。弁当が仕事をするんだ。かまうもんか」と思いながら田んぼへ出かけて行きました。

男は、万能を田んぼにぷつんと突き立てると、その先へ弁当のお櫃を結び付けました。それから、田んぼの縁に寝転んで昼寝を始めました。日が暮れてくると、万能もお櫃もそのままにして帰りました。

おかみさんは、男が帰ってきたのを見て、

「今日はあそこの田んぼは、全部終わったんだろう」と言いました。男はとぼけて言いました。

「なあに、おかみさん、おれが仕事をしてるんじゃない、弁当が仕事をしてるって言うから、万能の先に弁当を縛り付けて、おれは田んぼの縁で昼寝をしてた。弁当が田んぼを耕したかどうか、おれは知らないから、おかみさん、ちょっと行って見てきたらいいよ」

こういうことになるから、軽はずみなことは言わないことですな。

1-2 茨城方言版「弁当が仕事」〔再話〕

※高萩市教育委員会編（1980）『高萩の昔話と伝説』（高萩市、153～154 ページ）の原話「弁当が仕事」をもとに七絃の会が茨城方言（県央・茨城町方言）で再話。

むがあし、たいそう おおめしぐ 大飯食らいで、野良仕事さ 行ぐのに、お鉢^{はち}⁽¹⁾さ いっぺえ
めし 飯 詰めて 持ってぐ 奉公人の おどご 男 が いたんだと。

そんでも この男、ここいらでは 一日で 田あ 掘っちまう 「まんにんのう⁽²⁾」 っ
て言われてる 力持ちだったんだ。

んで、周りのていら⁽³⁾ 男が あんまし 野良仕事が うまいもんで、うらやましが
って、そのうちのおかみさんに 言ったと。

「いやあ お宅^{たく}んとこの 奉公人ちゃ、よおぐ 稼ぐごどよお」

ずっと、おかみさん 言ったって。

「なあに 奉公人が 仕事しんじゃねえんですわ。弁当が 仕事しんですわ。何しろお鉢^{はち} しょって 田あ うなり⁽⁴⁾さ 行ぐつつうんだがら」

男 おかみさんが そう言っ^ゆてんの 聞いちまって、

「なあんだあ おれが 仕事しんじゃねえのかあ。弁当^{べんと}が 仕事しんだっちから、きょうは 万能の先っぺさ お鉢^{はち} 結^むつつけて、んで ひんねこいでっぺ⁽⁵⁾。弁当^{べんと}が 仕事しんだ。かあまねえ かまね」 って 田んぼさ 行^いったと。

んで、万能 田んぼさ ぷつんと おっ立てて、その先っぺ⁽⁶⁾さ 弁当のお鉢^{はち} 結^むつつけて⁽⁷⁾、田んぼの縁^{へり}っこで ひんねこいでたと。日が 暮^きれて来^きっと、お鉢^{はち} 万能さ 結^むつつけたまんま、ほ^{けえ}ったらかして 帰^{かえ}って^きったと。

男^{おとこ}が 帰^{かえ}って来^きっと、おかみさん、

「きょうは あの割^けり⁽⁸⁾ 終わ^おち^ちまったっぺ」 っ^ゆて言うので、男 す^すと^とぼ^ぼけて⁽⁹⁾、

「なあに おかみさん、おれが 仕事しんじゃねえ、弁当^{べんと}が 仕事しんだって 言^ゆったっぺ。んだがら、弁当^{べんと} 万能の先っぺさ 結^むつつけて、田んぼの縁^{へり}っこで ひんねこいてた。弁当^{べんと}が 田あ うな^なち^ちまったか、おれ 知^しん^んね^ねけ^けんど。んだあ、おがみさん、ちょ^ちっ^っくら 行^いって 見^みで^でき^きら^らっ^っしょ⁽¹⁰⁾」 っ^ゆて おかみさんに 言^ゆった^たって。

んだからなあ、へ^へだ^だげ^げな^なこと⁽¹¹⁾ 言^ゆわ^わね^ねえ^えっ^っこ^こった^たなあ。

おしまい

《注》

(1)お鉢 飯櫃。

(2)まんにんのう 農作業の達人。「万人農」か。

(3)ていら 人たち。人。

(4)うなり うなる（耕す）こと。「うなりさ」は、「耕しに」（「さ」は目的を表す助詞）。

(5)ひんねこいでっぺ 昼寝していよう。「ひんね」は「昼寝」。

(6)先っぺ 先っぽ。先のほう。

(7)結^むつつけて 縛^むり^りつ^つけて。

(8)割^けり 区画。

(9)す^すと^とぼ^ぼけて とぼけて。

(10)見^みで^でき^きら^らっ^っしょ 見^みて^てき^きな^なさい。「～らっしょ」は「～なさい」。

(11)へ^へだ^だげ^げな^なこと いい加減な^なこと。下手な^なこと。

2 「後久保の狐」

むがあしな、むがしつっても そんなに 昔のことじゃねんだ。昭和の始め^{はじ}っ^っころの 話^わし^しだ^だつ^つう^うから 今^{いま}っ^っから 百^{ひゃく}年^{ねん}くれ^れえ^えの 前^{まえ}の話^わかな。ほんとに あ^あつ^つた 話^わだ^だつ^つう^うよ、これ。

小木津のなあ、あんまり むかしやあ 今^{いま}でも さ^さび^びしい と^とこ^こだ^だけ^けど、さ^さみ^みしい と^とこ^こで^でな、家^{うち}な^なん^んか そんなに ね^ねくて、ま^まあ そ^そつ^つち^ちこ^こつ^つち^ちに 田^でん^んぼ^ぼだ^だの 畑^はだ^だの 藪^{やぶ}す^すこ^こ⁽¹⁾ い^いっ^っぺ あ^あつ^つた^たん^んだ^だと。その 後^{うしろ}久^く保^ぼの 藪^{やぶ}す^すこ^こにな、一^{いっ}匹^{びつ}の 女^め狐^{ぎつね}

住んでたんだと。この女狐なあ、昼間は^{ひがしはら}東原のな、田んぼに 出かけてって、たにしだの どのようだの 獲ってな、食ってたんだけども、この狐^{しと}人ごと⁽²⁾人間こと 化かすんだと。それも 大馬鹿と 大利口はな 化かさねえんだつつうんだな。中馬鹿と 中利口だけ 化かすんだつんだ。

あつ時のことな、お稲荷さんの そばに 住む ^{かつ}勝つあんつう 男がな、もう ^{あき}秋のおわりのころの 話した。夜わり仕事⁽³⁾すんのに 藁 ねえもんだがら、^{ぶんごつばら}(4)豊後原の 田んぼさ 行って、藁 もらってくっぺともった。だげども、これ 人げ⁽⁵⁾の 田んぼの 藁をな だまーって もらってくんだがら、^{あが}明るいうちに 行くわけいかんめ。そんなもんだがら、すこーし 暗くなってから 出かけてったと。

そんで、田んぼ 行ったらば あっちこっちに この ぼっち⁽⁶⁾んなってる 稲わら^{あづ}集めて、^{しよいこ}背負子さ つけて、さあ 帰っかなあと 思ったらば、^{みち}道 ねえんだと。

「あれっ おれ どっちから 来たのがなあ」と 思ってたんだ。

「あれあれえ、^{みち}道 わがなくなっちったあ」って 思ってたら、そのうちに ^{みち}道が 白ーく こう 浮き上がってきたんだと。

「ああ、こっちから 来たんだ」って 思って、その^{みち}道 どんどん 行くとな、川が あったんだと。

「あれ、おれ 来たとき、川なんか あったかなあ」と 思ったけど、^{みち}道 そっちさ つづいてっから、いやあ 秋の 終わりのころだもの、冷てえべ。そんだけど ^{ももしき}股引 たくしあげてな、川ん中 入って、「おお ひやっけ ひやっけ ひやっけえ」って 言いながら 渡ってた。

川 ドンドンドンドン 深くなんだと。だから、「おお ^{あけ}深い、おお ひやっけえ」って 渡ってたれば、向こうの 岸で ^{あね}姉さんかぶりした 人が 手招きしてんだつつうもの。

^{かつ}勝つあん 急ーいで 渡ってったら、「あーれま、こーんなに 濡れちまって ひやっこかつぺえ。おれの^{うち}家で 休んでったら いがっぺえ」って 言うもんだがら、^{かつ}勝つあんも その気んなってなあ ^{あね}姉さんの^{うち}家で 休むことにしたと。

お茶っこ 出たり、おまんじゅう 出たりしたがら、そのうちに 酒まで 出てきたつつう。^{かつ}勝つあんな 嫌いなほうでねえもんだがら、酒 飲んで いい気持ちんなっちゃった。そのうちにな、酔っぱらっちゃったし、夜も 遅くなっちゃったもんだがら、その晩げは その ^{あね}姉さまの^{うち}家さ 泊まることにしたんだと。布団 ^{しとつぐみ}一組しか ねがったがら、^{しと}一つ布団に 入ったんだと。なんか 足元のほうさ もさもさもさーって すんだとは 思ったけども、^{かつ}勝つあん 酔っぱらってっから そのまま 眠っちゃった。

どのんげ たったのかなあ、「ああ ^{さむ}寒 寒 寒 寒い」。^{かつ}勝つあん 目 覚ました。寒いはずだっぺ。^{かつ}勝つあんなあ、藁わら かぶって 田んぼのあぜ道さ 寝てたつつうもの。^{まあ}周りにはな 木の葉だの 馬の糞だの いっぺ 散らばってたと。^{かつ}勝つあんなあ、これ だまされてたんだっぺなあ、狐に。

つづきが あんだ。^{かつ}勝つあん 夜中に 目 覚めたって ゆったっぺ、さっき。ん けども、^{かつ}勝つあんの おつかさん、三日三晩 お稲荷さんに お参りしてたつつんだがら、だからなあ ^{かつ}勝つあん 三日間も だまされてたんだっぺなあ。

《注》

- (1)藪すこ 藪。「やぶすこ」とも。
- (2)人ごと 人を。「ごと」は、人対象を表す助詞。「こと」とも。
- (3)夜わり仕事 夜なべ仕事。
- (4)豊後原 日上市小木津町（旧日高村大字小木津）内の旧地名。
- (5)人げ 人の家。「げ」は「～の家」の意。「おれげ」「おめえげ」「○○ちゃんげ」のように使う。
- (6)ぼっち 稲積。にお。米を収穫したあとの稲藁を、田んぼに積み重ねたもの。

【参考文献】伊藤正夫執筆・ひたか民話の会編（2000）『ふるさとのむかしばなし』（日高地区に伝わる民話）（ひたか民話の会発行）、13 ページ

3 「^{どうざか}堂坂の^{しろへび}白蛇」

むがしなあ、^{おぎづ}荻津⁽¹⁾のどころによ、堂坂っちゅうとこが、あったんだ。そごにな古ぐーがらなあ^{まつ}松の木が一本植えられてたんだ。何百年も^{めえ}前からだがらなあ、かなりの老木んなっててよ、大風が吹くたんびに枝がバキバキ折れで吹っ飛んでくるもんだがら、危なくてしゃあねえ。そごでな、^{きこり}樵にその^{まつ}松の木伐ってもらあことにしたんだ。

〔樵の〕^じ爺さまなあ、ある春の日によ、でっかいノコギリ^し背負ってな、^{まつ}松の木のそばにやって来て、どっかと腰をすえて、ズーコーザーコーズーコーザーコーって切りはじめた。うまいもんだ。すぐさまな、真ん中まできた。ところがよ、そんなときな、ズーコーザーコーって手前に引いたれば、なんとまんずそごにな、真っ赤な血がベツトリとくつついてきた。

「何だっぺこりゃあ」^じ爺さまびっくりした。

だとも、も少しでほれ、伐り終えるんだもの「こごで^や止めるわけにいがねえな。最後まで伐っぺえ」。んで、ズーコーザーコーズーコーザーコー、メリメリメリドッシーン。^{まつ}松の木も伐られた。

^じ爺さま、切り株覗いたればなあ、なんとそごによ、白蛇が真っ二づに切られて死んでおったど。

「何だあ蛇だったがあ」って、^じ爺さまそれをポイツとがさ藪⁽²⁾にうっちゃって⁽³⁾なあ、ほんで、^{うち}家さ^{けえ}帰って来た。

ほれがらしばらくたったなあ。^{あづ}暑い^{なづ}夏が来だよ。

^じ爺さまんだけど元気だがら、今まで^{しよぎ}暑気うげだ⁽⁴⁾ことなんかねんだよ。とごろが、この年はなあ、何だがわけのわかんない病いに患っちまってよお、はあなんだかかったるくてかったるくてどうにもなんね。ゴロゴロゴロゴロして食も進まねえし、そのうち寝込んじまった。

てて その 大いびきで 山が 真っ二つに 割れちまったんだと。 いや その音に たまげで 起きた 三太がよ、 手 ついで 起きあがったとごの そこに 手の跡に^{あと} 穴が 開いで、 水が たまって、 右手 ついだところが 鰐ヶ淵^{わにがふち}⁽³⁾。 左手 ついだところが さがり淵^{ふち}⁽⁴⁾、 右足 ついだところが 亀ヶ淵^{かめがふち}⁽⁵⁾、 左足 ついだところが 大釜の淵⁽⁶⁾に なったんだと。 ある日、 みんなら 三太が 沢又の 高台で 寝てるっちんで、 ちょっくら 見に行ってくっぺえつって 見に行ったんだと。 したっけが ちょうど 三太は 昼寝から 目が 覚めたところだったんだと。 見たっけ 三太は まぎめ⁽⁷⁾が ぶっとくて、 目ん玉 ギラギラ 光ってで、 鼻 ワシのように でかくて、 口も^{くち} でかくて、 頭^{あたま} ざんばら髪だったんだと。 みんならは なんだっぺなあって 思っ、 そうと 三太の そばに 行っ、 聞いてみたんだと。

「三太さん、 お前さま^{めえ} どのような お方^{がた}なんですか」

したっけ 三太、 ぬーっと 横だ^{よこ}⁽⁸⁾んなってたの 起きて、 で、 みんなに 言^いったんだと。

「おれは 神様の お告^つげで 南のほうから やってきたんだけんども、 ああ 図体^{ずうて}が でけえがら どこにも 住むところは ねえ。 おまげに 大飯食らいだもんだがら、 だれも 雇^よってくんねえ。 はあ こうして 暗ーい暗ーい ござまで 来たけど、 いや あ お前^めたちが いっしょうけんめえ 田畑 ひろげてんの 見っと、 なあ 気の毒でよ。 おれならば 朝飯前^{あさめしめえ}なのによ」ちゅんだと。

ほんで みんなら 「ほんならば どうが おれらが 三年も かかって、 ひとつも はが いがなかった⁽⁹⁾ この仕事を ひとつ 手伝^{てつだ}ってくんねえけ。 お前^{めえ}さまが 言^いうごだあ なんでも 言^いうごと きくから」って 言^いうんだと。

したら 三太は、

「おーし わがった。 だけんども おれに ひとつ 約束してもれえてえ ことがある。 おれに 三日の ひまを くれろ。 それがら、 おれは よぐよぐ 腹が 減ってっから、 あしたの 朝までに こわ飯^{めし}⁽¹⁰⁾ 三十人前、 みそ汁と おこうこ⁽¹¹⁾ 一斗樽^{いっぺえ}に 一杯ずつ、 酒 三樽、 高膳に そえて 持ッて来ておくんなせ」

いや こら、 みんならは 米どごろが 粟だって ろくすっぽ 口^{くち}に入れられねえのに、 ほんでも 一晚 かかって あっちこっち 工面して、 やつとの思いで 用意したんだと。 ほんで こわ飯 三十人前、 みそ汁と おこうこ 一斗樽に 一杯ずつ、 酒 三樽、 高膳に そえて、 三太の とごろに 持ッてったんだと。

したっけ 三太、 ニーゴニゴ 笑ッて、 それ ペロッて 食ッちまッて、 あとは グーグー 寝でんだと。

「これ だまされたんでねえが」って 思ッたんだけんども、 ほんでも 次も日も また 次の日も こわ飯 三十人前、 みそ汁と おこうこ 一斗樽に 一杯ずつ、 酒 三樽、 高膳に そえて、 三太の とごろに 持ッてったんだと。

そすと また、 三太は ニーコニコして、 それ ペロッと 食ッちまッて、 あどは グーグー 寝でんだと。

三日目の 夜、 みんな 「こりゃ よーぐよぐ これ、 三太に だまされちまッた

んでねえが。三太は よぐよぐの でれすけ⁽¹²⁾なんだねえが。ひとづ 見に行っ
てんべ」って 言^ゆって、みんなで 三太の とごろに 様子を 見に行っ
たんだと。

したっけ やっぱり 三太は ガーグー 高いびきで 寝でんだと。ほんだげども、
四日目の 朝んなったら、いや たまげだごど たまげだごど、約束どおり きのう
まで 荒れ果てだ 土地は きれえに 耕されでいで、いやあ みんなら 手ばたき⁽¹³⁾
して 手 取りあって 喜んだんだと。

「これは 三太さんに お礼を 言^ゆわなきゃなんめえ」ちって みんなして 三太のど
ごろに、沢又^{さわまた}の 高台まで 見に行っ
たんだと。したっけ、はあ もう そごに 三
太は いねえのよ。よーぐ 見っと、高膳の 上に 紙っきれが 一枚 乗っかっ
てんだわ。

読んでみたらば、「みなさん お世話になりました。おれは 今がら 鰐ヶ淵のほ
うさ 行って、それがら 南の国に 帰ります。近くの 川の そばに 大きい た
め池 作っ
といたがら、水に 困ったときには、それを 使っ
ておぐんなさい。あ
りがとございました」って 書いてあつたんだと。

みんな そんで 三太の あど 追って 鰐ヶ淵のほうに 行っ
てみたんだけど、は
あ そごにも 三太は いねがったんだと。そごで、そっから 先^{さき}、その 大男^{おおおとこ}を
沢又三太って 呼ぶようになって、今でも 大釜の淵近くに 石碑が 立っ
てで、そ
ご 三太を お祀りして
るっちゃ 話した。

沢又三太の お話でした。

《注》

- (1)諸沢 地名。現在の常陸大宮市諸沢。
- (2)住みついたんだちけ 住みついたのだそうだ。「～だちけ」は、「～だそうだ」の意。
- (3)鰐ヶ淵 久慈郡大子町頃藤にある久慈川の淵。
- (4)さがり淵 常陸大宮市山方新道にある久慈川の淵。
- (5)亀ヶ淵 常陸大宮市諸沢上山にある久慈川の淵。
- (6)大釜の淵 常陸大宮市諸沢沢又にある久慈川の淵。
- (7)まぎめ 眉。
- (8)横だ 横。
- (9)はが いがなかった (仕事が) はかが行かなかった。はかどらなかった。
- (10)こわ飯 おこわ。赤飯。
- (11)おこうこ 漬物。
- (12)でれすけ 馬鹿者。
- (13)手ばたき 拍手。

5 「蛇女房」[再話]

※高萩市教育委員会編(1980)『高萩の昔話と伝説』(高萩市、63～66 ページ)の原話「蛇女房」をもとに七絃の会が再話。

むがし、ある沼の近くに 男が一人で住んでたんだと。あるどぎ、女が男のとこさ や

ってきつと、

「おれごど、嫁さんにしてくろ。嫁さんにしてくろ」って ゆうんだって。

そんで 男、

「こおた ^{うち}家でいがったら、嫁になったらいがっぺ」って、女を嫁さんにした。

んで、いいかん⁽¹⁾すぎたころ、嫁さんの腹いがぐなって、

「子ども 生まれっから、小屋建ででくろ」って、男にゆった。

男、

「なあにも、小屋建でなくたっていがっぺ。ここで産^なしたらがっぺ」ってゆった。ずっと嫁さん、

「いいや、ここじゃやだ。いしけえ⁽²⁾小屋でいいがら うらさ建ででくろ」って、たのむんだって。

「そおたにゆうんだら、こせえてやっぺ」

男、いしけえ板 あづべつと、ちっけえ小屋 うらさこせえてやったど。

嫁さん、子ども産しに小屋さへえつとぎに、

「どんなことがあっても、小屋 のぞかねえでくんなんしょ。用があつときは、おれがきつから」って、男さゆった。男、嫁さんに、

「のぞかねえでくろ」ってゆわれつと、お産すんのが見だくて見だくてしょおがねえんだど。

んで、そろそろって、ちっけえすきまから小屋ん中のぞいたんだど。したら、小屋いっぺえにいがあい蛇がとぐろまいて、そのまんなかで子どもが玉っころ、なめなめしてんだど。いがあい蛇も玉っころなめてんだって。

男、たまげだけんど、蛇に気づかれねえように、家さへえった。

いぐ日かたつたころ、嫁さんが子どもうぶって⁽³⁾きつと、男に、

「いや、お世話になりやんした」ってゆってから、

「『お産する小屋 決して のぞかねえでくろ』って、たのんだのに、おめえにのぞかっちゃったから、もう、ここにいらんねえ。おれの家さける」ってゆったど。ずっと男、

「いがねえで、いでくろ」って。

「いや、おれ正体見られっちゃったから、ここにいらんねえ」そんで、

「子ども置いてぐから、もし泣ぐどぎは、この玉なめらすつと 泣ぎやむ。この玉さげ⁽⁴⁾なめらしておけば、ひとりでいがあぐなっからよ」ってゆって、嫁さん、沼さけえって行っちゃったど。

そんで、その子ども、玉なめなめしいしい、だんだんいがあぐなって、三つくらいになつと、おもてさ玉持ちあるって、なめるようになった。

「やあ、あすこの子ども、おかしな玉なめで、いがあぐなったな。とでもんまそうになめってっぺ」って、村のていらがしゃっべってんだ。

それが、殿さまの耳さへえつたと。んで、

「その玉、取っけえして来」って、殿さま 子どもの玉とっけえしにきたど。

「これ、子どもの乳がわりなんだから、やれねえ」ってゆうのに、なんでもかんでも む

りやり取ってっちゃったと。

その晩げから、子ども泣いで泣いでしゃあねがった。

そんで、男、沼のへりさいって、

「子ども、泣ぎやまねえくてしまつにおえねえ、いまひとつ玉くんねえか」ってゆった。
ずっと、へびが沼からあがってきて、嫁さんの姿になっとゆった。

「あれは、おれの目ん玉を取ってなめらしたんだ。いまひとつ取ってやっと、おれ、夜が明けんのも、暮れんのもわがんなぐなっちまう」そんても嫁さん、

「おれの子どものためだ。目ん玉取ってやっから、朝になつとぎ、夜になつとぎ、鐘ついでしらせてくろ」って、男にたのんで、目ん玉取って渡したと。

んでも男、夜が明けても忙しくて、鐘つくの、わすれちちまうとぎがあんだ。そおす
っと、蛇の嫁さん、

「いづいろや、いづいろや^⑤」って、泣ぐんだって。男、

「ああ、鐘 つぐのわすれちちった」って、沼さいぐんだど。
嫁さん、鐘の音聞くど、

「ああ、夜が明けたな」ってゆったって。

むがし、蛇が自分の目ん玉取って、子ども育てたなんってこど、あったんだっぺかね。

《注》

(1)いいかん しばらく。

(2)いしけえ 粗末な。

(3)うぶって おぶって。基本形は「うぶう」

(4)玉さげ 玉さえ。「さげ」は「さえ」の意味の助詞。

(5)いづいろや なんどきだ。

6 カーテンシアター「だいだらぼう」[再話]（茨城弁県央バージョン）

※『紙芝居「だいだらぼう」』（文・画 おはなしの会「どんぐり」、内原町企画課、平成 4
（1992）年発行）をもとに七絃の会が再話。

※数字は、紙芝居の絵に対応した順番を表す。

- 1 むがし むがし ずーと むがし
大足つう 村のめえに
いがあい いがあい 山 あったんだど。
んで 大足村 ちょうど その山の
かげに なっちやって おでんと様
あだんのが よその村よが うーんと
おそがったど。

- 2 「まだ 朝ねぼう しちまったぺよ」
「ああ、おれげもだ。んでもよ。
はええぐ おでんと様 あだってくんなきや
畑も 田んぼも まっくらだっぺ。

どっちみっち 仕事にや なんめえ」
村の男ていら よりあづばつで こんなごと
しゃべぐってだ。
んで この山 いつのまにが
「あさねぼう山」って呼ばれる ようになったど。

- 3 おつかさまらも ふたり 三人 あづばつと
「あの山のせえで せんたくもん
さっぱし かわかねえなあ」とが
「おれげの じっじやんも ばっぱやんもよお
この寒さで あんべえ よぐねえんだあ」
って、ぐち こぼすごとが おおがったど。
- 4 ある日のこど、ふたりの男ていが 肩並べで
野良仕事さ 出ていった。
「こどしも 米のでぎ よぐねえなあ」
「んだな。んでもしやあんめえ。あの山のせえで
おれげの 畑や田んぼさ 半分しか陽あだんねえ。
んだもの、いいもん とれっこねえべ」
「んだ。あの山さえ ねえがったらなあ」
そんとき 「グオー、ゴゴゴゴ・・・」って
地鳴りのような音が 畑のほうから聞こえてきた。
ふたりとも ぶったまげて 畑さいぐと

「あつりゃ！
山 もうひとつ でぎでっどお」
- 5 ふたりして その山 よーぐ 見てみっど
山 なんかじゃ ながったど。
でっけえ 大男が 畑のまん中で
いがあい イビキ かいで
ひんね こいでたんだ。
- 6 「ひえー！」
ふたりの ひめえで 目さました 大男
のっそり 立ち上がった。
その大男の でがいのなんの ふたりとも
たまげて 腰 抜けそうだったと。
「おらあ、だいだら坊って ゆうんだ。
びくくらさせて 悪がったぺえ。ついつい
ねむっちまったよ。
おら こおだに でっけえべ。力だけは
だれにも まけねえ。困ったごとがあつたら
なんでも おらさ ゆってくろ。
村のていらの 役に 立ちてえんだ」

- 7 んで ふたりはすつとんで 村さ けえって
みんな あつべて 相談ぶった。
「あさねぼう山さ どがして もらあべよ」
ところが みんなは
「あの山 どがすごと でぎっこねえべ」
「大男っちゃ いるわけあんめえ。ちぐぬぐな」
んでも 村のていら あさねぼう山にはよ
ほどほど 困ちゃってたんで だいだら坊に
山 どがして もらえねえか たのんで
みっごとにしだと。
- 8 村のていらの 話聞いた だいだら坊
じーっと 山ごと見っと
「よーし、やってみっぺ」ってゆった。
sonでも ほかの村のていらの めえわぐに
なっと しゃあねえから 四方みまわして
北と西の 山つづきさ どがすごとに
したと。
そごには だれも 住んで ながったんだと。
- 9 つぎの朝 だいだら坊 くれえうちに
おぎだして あさねぼう山さ 向がった。
あさねぼう山の ふもとに 立つと
がばっと 山 かかえた。sonで
「ムツムツムムム・・・」って
顔 まっかにして がんばったが
山 ビクとも しねえがった。
んで こんだ 山のまわり ほっちゃぐって
指 つっこんで 足ふんばっと
「エーイツ」って、持ち上げた。
- 10 あがった！

なんと あさねぼう山 土っころ
ごろごろ おっこどして たが一ぐ
あがった。

だいだら坊、山 背中さ しょって
ノッシ、ノッシ、ノッシって
いがあい 足あど つげながら
北のほうさ 歩いで いった。
- 11 いがあい 山が なぐなった とだん
大足村によ おでんと様 よーぐあだって
朝ねぼう するもんが いねえぐなったど。
村のていら 大喜びで 畑や 田んぼの

仕事に せえだしてえ よーぐ かせいだんで
米も野菜も うーんと とれるようになったど。

- 12 あさねぼう山 いづのまにか 「ね」が
とれちゃって 「あ さ ぼ う 山」って
よばれるようになった。 今はよ 笠間市の
はしっこに あっと。
有賀の北西みっと こんもりと 山の姿めえる。
少し めえまでは 大足に だいだら坊の
足あども 残ってたんだど。
ずーど内原に 住んでる じっじやんや
ばっばやんに 聞いてみっど よがっぺ。

まずは、こんでおしめえ

7 「笠地藏」(福島県浜通り方言(小高方言)の語り)

むがーし むがし、入山のほうの 村さ 笠 拵^{こせ}てる じっちと ばっばと いだと。
山がら 菅^{すげ}てゆう 草 刈^{かり}ってきて、ほいづ 天日さ 干^ひして、二人^{ふたにじ}⁽¹⁾ 笠 拵^{こせ}て、
暮らし たででたあと。二人^{ふたにじ} いだどき、若^わえときに おど⁽²⁾ 六人 生^なしだ⁽³⁾ けん
ちょ、ちんちええ わらしんとぎ⁽⁴⁾に みーんな あの世さ 逝^いっちまってなあ 二人^{ふたにじ}
暮らしてたあど。

ある 年取りの 朝、 じっちは

「きょうは 年取りだもの 正月^{しょうがつ}の 餅^{もち}だの 米^{こめ}だの 酒、 一^しとおりに 買^かってくつか
あ」

って 言^いって、残^{のこ}ってた 笠、背^せ中^なさ しょってなあ 山 落^おちで⁽⁵⁾、町^{まち}へ 行^い
たど。

♪笠や～ 笠 笠 いらねべがあ 雨雪 しのぐ 笠だげんちょも いらねべがあ
って、どっこ⁽⁶⁾ 回^まって 歩^あったあと。んだげんちょも 正月の 支^し度^どで 忙^いしい 家
の 人^{ひと}たちは 戸^とも 開^あけてくん^にえがったと。

町^{まち} 歩^あってる 人^{ひと}たちも 正月^{しょうがつ}のもん 買^かあのに 忙^いしくて、振^ふり向^むぎも してくん
にえかったと。笠は 一^しつつも 売^うん^にかった。

ほのうち、雪^{ゆき}も 降^ふってきたと。「あ～、笠 一^しつつも 売^うん^にえかったけんち
よも しょうねなあ。晩^{ばん}方^{かた}ん なんにえうち 家^いさ 帰^{かえ}っか」

ほの雪^{ゆき}なあ ほだほだ ほだほだ 降^ふるわ 降^ふるわ。 たった たちまち ぐるりもっ
け⁽⁷⁾ 真^まっ白^{しろ}に なっちまったと。「あ～あ こいけんちょも⁽⁸⁾ 家^いさ 晩^{ばん}方^{かた}になっか
ら 帰^{かえ}っぺ」

とんぼり とんぼり 雪^{ゆき}んなか ほのうち 風^{かぜ}も 吹^ふいてくっぺし。まなぐ⁽⁹⁾さ 雪^{ゆき}
は 入^いっぺし。まなぐ くつぐり⁽¹⁰⁾ながら、「ああ こえー(疲^{つか}れた) こえ」って
歩^あって、ちゃがまって⁽¹¹⁾ 休^{やす}むかなあって 思^{おも}って、ひょっと 前^{めえ} 見^みたら、ほこ

は 六地藏さまの 前^{めえ}だったど。

「あい～や こだに 雪^{ゆぎ} かんぶって なんぼ 寒がっぺえ。 あいや 寒がっぺえ、ひゃっこいべえ」

って、 じっちは 一^{しと}つ一^{しと}つつ たあんと かぶってる 雪^{ゆぎ} 一^{しと}つつずつ 払ってくっちゃあど。

「ああ なんだあ、 ほごさ 残^{のご}った 売^{のご}れ残^{のご}ってる 笠^{わり}で 悪いげんちょも かまねがあ。 さすけね⁽¹²⁾なあ」

って 言^ゆって、 一^{しと}つつずつ 笠^{わり} かぶせでったあど。 ほしたら ほれ

「あい～やあ、 いっとう 後ろ^{うっしよ}さ いる 地藏^{じぞう}さまの分^{しと} 一^{しと}つ 足んにえが。 あいや なじょしっぺ⁽¹³⁾。 はあ なんだあ、 我^わ⁽¹⁴⁾の かぶってる 手拭いで かまねな。 すまねげんちょ ほいつ かぶってくいろ」

って、 我^わの 手拭い 取^わって、 ほっかぶりさせでやったど。 ほおしたら ほれ なんだか はあ 気分も いいぐなって、 足も 軽^{うだ}っこくなくて 唄^{うた}なんか 出てきたと。

♪相馬流れ山 な～え～ な～え～ せ～っせっと

なんて ずんねえ⁽¹⁵⁾ 声^{うだ}して はあ 唄^{うた}って 家^{いん}の 前^{めえ}まで 来たど。 ほおしたら ばあさま 家^{ええ}から 出^できて、

「あいや 今^{けえ} 帰^{かえ}たのが。 あいや、 てぶ からてんぼ⁽¹⁶⁾で 帰^{かえ}ってきたのが。」

「あーよー 笠^{しと}なあ、 一^{しと}つつも 売^うんにえがったあ。 んだげんちょもな、 地藏^{じぞう}さまさ みーんな くっちきた⁽¹⁷⁾だけんちょも」

ばあさま、

「あいーや いがったなあ。 ほれは いがった いがった」

って 一^{しと}つつも 怒^{おど}るねでなあ ほの夜^{しと}は いるし⁽¹⁸⁾ さ 火^{しと}ー く^{しと}んべて、 お湯^{しと} 飲^{しと}んで おごご⁽¹⁹⁾ し^{しと}がんで⁽²⁰⁾ 年^{しと}取りしたと。

♪あーした あしたは お正月^{しょうがつ} お正月^{しょうがつ}っちゃあ いいもんだあ
雪^{ゆぎ}より 白^{しろ}い 餅^{もち} 食^くって あぶらみでえな 酒^{さけ} 飲^のんで

って、 二人^{ふたに} 年^{しと}取りした。

「は一てー ちんと 早^{はえ}けんちょも はあ、 寝^ねっぺが」

って 床^{とこ}さ 入^{はい}ったど。 二人^{ふたに} 枕^{まくら} ならべで 寝^ねだーど。

「じっち 我^わ一^{しと}らの わらしらも じっちさ 笠^{わり} かぶせてもらって なんぼが うれしがったべなあ」

って ばっば 言^ゆって 見たら、 なんぼ 昼^{しと}間^ま こえかったもんだか、 じっちは 寝^ねでだど はあ。

なんぼ とぎ 過ぎたころだか、

「あんれー、 じっち。 なんじゃか 唄^{うた} 唄^{うた}ってんの 聞^きこえっど」[て 言^ゆった。]

「なーに こだ 夜^よ中^{なかつ}、 そり 曳^ひいでんだなあ。 達^{した}者^{ちや}な人^{ひと}達^{たち}も いるもんだあ」

って 言^ゆったあと。

「んめど なんだが、地蔵^{じぞう}さまさ 笠 くっちゃなんて 唄^{うた}ってるみてだけんちょ」
「なに、地蔵^{じぞう}さまさ 笠 くっちゃだどー？」

♪地蔵^{じぞう}さ 笠 くっちゃあ じいが 家^{ええ}は どごだべなあ ばあ^{ええ}の家^{ええ}は どごだべなあ
よ〜いこらしよ〜のしよ〜

向^もおの ほうがら ちんち 唄^{うた}声 聞こえてきたど。 だんだん だんだん 声は お
つきぐなって、

♪じっちに かじんぞう⁽²¹⁾さ 笠 くっちゃあ じっちの 家^{ええ}は どごだべなあ ばっ
ぱの 家^{ええ}は どごだべなあ よ〜いこらしよ〜のしよ〜

家^{ええ}の 前^めまで 来たら、 バタッと 唄^{うた} 止^やまったど。 ほうして、
ドスッ ドシドシ ドスン ガラガラ
って ずんねえ 音^{おと} したど。

「あいや たまげだごどー」

おっかなびっくり はだしのまんま 庭さ 落ちて、 戸を そこーっと 開けてみたら、
ほこさは 米俵^{だあら}だーの 酒^{さけ}だーの ずねえ 塩^{しよ}引き^{おび}⁽²²⁾だの じゃんと⁽²³⁾ 置いて
あったあど。 ほいづさ びがびがと 光ってる 大判小判も じゃーんと 積んであつ
ただど。「なんちことだべえ。 たまげだなあ」って 二人^{ふたに} 向^もおの 雪^{ゆき}ん中^{なが} 見^みたら、
笠 かぶった 地蔵^{じぞう}さまど ほっかぶりした 地蔵^{じぞう}さまど 空^けっぽの そり 曳^ひいで 帰^{かえ}
って行^いぐの 見^めえたど。

「あいやー ありがでえ ありがでえ」
って。 見^みでたら

「じっちー、 ばっぱー、 まめで 達^{たつ}者^{しや}で 暮^くらすだどー」
って、 ほれは ほれは やさーしい 声^{こゑ}したあと。

「はあ ありがて ありがてえ」
って 二人^{ふたに} 手^てえ あわせで 拝^{はい}んだあど。 ほの 正月^{しょうがつ}はな、 塩^{しよ}引き 食^くって、 真^ま
っ白^{しろ}い 餅^{もち} 搗^ういで あぶらみでな 酒^{さけ} 飲^のんで、 今^{いま}までに ねえ 正月 過^くごしたあ
と。

ほれからもなあ、「じっちー」「ばっぱー」って 二人^{ふたに} 呼^よばって いつまでも 仲^な良^い
ぐ 暮^くらしたあど。

めでたし めでたし、 こんじ おわり。

《注》

- (1) 二人^{ふたに} 二人。二人で。
(2) おど 赤^{あか}ん坊^{ぼう}。
(3) 生^なした 産^うんだ。

- (4) わらしんとぎ 子どもの時。「わらし」は子ども。
- (5) 落ちで (山を) おりて。くだって。乗り物などから降りる場合も、「落ちる」という。
- (6) どっこ どこ。ところどころ。
- (7) ぐるりもつけ 周囲。辺り一面。
- (8) こいけんちょも 疲れたけれども。「こい」は「こわい」(疲れた状態)の音変化。
- (9) まなぐ 目。まなこ。
- (10) くつぐり つぶる。『相馬方言考』には、「クツツグル(動) つぶる。 目クツツグル。」とある。
- (11) ちゃがまって しゃがんで。
- (12) さすけね 差支えない。大丈夫だ。
- (13) なじょしっぺ どうしよう。どうしたいだろう。
- (14) 我 自称の代名詞。わたし。
- (15) ずんねえ 大きい。
- (16) てぶ からてんぼ 「からてんぼ」は、手ぶら、土産物などを持たないこと。「てぶ」は意味不明。「手ぶらで」の言いさしか。
- (17) くっちきた あげてきた。くれてきた。
- (18) いるし 囲炉裏。
- (19) おごご 漬物。
- (20) しがんで 噛んで。噛みしめて。
- (21) かじんぞう 直前の会話や歌から、「地藏」と言おうとしたものと考えられる。
- (22) 塩引き 塩引き鮭。塩鮭。
- (23) じゃんと 「とてもたくさん、いっぱい」の意か。

＊語りの後で、次のような一言があった。

私は福島県の浜通りの南相馬から、原発事故のために避難している。こういうところで、こういう昔話を語ることができて、本当にうれしく思っている。今日は、私の方言の先生も福島から来てくれている。あがりっぱなしでした。ありがとうございました。

8 「貧乏の神」(山形県左沢^{あてらさわ}方言の語り)

むが一し、むがし、 あるところに、それこそ 貧乏な じんちゃ(お爺さん)と ばんちゃ(お婆さん)が 住んでたけど。

年の暮だってゆうのに、正月の 準備する 品物が なんーにも ないんだけど。 そうして ばんちゃは 言ったんだと。

「じんちゃ じんちゃ、 おらえのし(家の中)さ なんか あんべや。 なんか 持って、 町い 行って、 売ってきてきらっしやい。 そのお金で 正月^{しょうがつ}のもの なんか 買ってきてきらっしやいっす」

って 言った^ゆたら、 じんちゃは、

「おれの家さ ほだな 売るものなど あっかやー」

て 言った^ゆたら、 ばんちゃは 家^{うち}中^{なが} 捜し歩いで ずんちゃ(お爺さん)が 作^{つく}ってお

いだ わら草履^{ぞうり} 草鞋^{わらぢ} 脚絆などを 出してきたんだと。 だけんと、 ほだなもんで なんにも 買えないな一って、 ばんちゃが 大事にしていた 真綿と 織物を やる 糸を 出してきて、

「こんたきや（これだけ）ありやあ なんか 買えんべえ。 じんちゃー 町^{まち}さ 行って、 売ってきてきらっしええ」

て。 じんちゃは 「あいよー」 って 返事して、 背中^{せなか}に 背負^{しよ}って 町^{まち} 行ったんだと。

町^{まち}い 着いだ じんちゃは、 でがい 声で

「わら草履一、 わら草履 いらねがー。 草鞋^{わらぢ}も あるよー。 真綿も あっから、 買ってきらっしやーい」

って、 町^{まち}ん中^{なが} あっちがらこっちへ こっちがらあっちと 歩き疲^{つか}れるほど 売り歩いたんだけんども、 なんにも 売れながったんだと。 ほうしたら、 向^{むこ}うの 通りのほうでも

「炭 炭一。 炭 買ってけらっしえー」

って 言^いう ほかの じんちゃが 炭 [売り] 歩ぐ 声が 聞こえたんだと。 そうしたら 四つ角 行ったら、 ばったり 炭売りの じんちゃと 会ったんだと。

「おー 炭売りの じんちゃー、 どうした 売れてっかー。 景気 いいがー」 って 言^いったら、 炭売りの じんちゃも、

「んーん、 おれんとごも なんにも 売れなくって 困ったもんだー。 背負^{しよ}ってきた 炭、 まだ 背負^{しよ}って 家さ 帰んなきゃなんないと 思うと、 うんざりしでたとこだ」

って 言^いったら、 草鞋売りの じんちゃが、

「んーだら おれの 草鞋だの 草履だのと その炭 交換こしっぺー」 って 言^いったら、

「あー しょがった しょがった。 交換してきらっしやいす」 って 言^いって、 じんちゃ同士は 交換こして それを 背負^{しよ}って 家^{うち}い 帰る 道 行ったんだと。

その頃、 家^{うち}で 待ってた ばんちゃは 「きょうは じんちゃ、 なに 買ってきてけっかなー。 赤^{あか}い 酒でも 買ってきてくれっかなー。 餅^{もち}でも 買ってきてくれっかなー」 って 楽一しみに 待ってたんだけんど なかなか 帰ってこねえのだと。

やんだぐなるほど 待ってたら、 土間のほうで ドサッと 音^{おと}がしたがら、 ばんちゃ 急いで 行ったら、 土間に じんちゃが 帰ってきてで、 じんちゃは ばんちゃの 顔を 見ると、

「ばんちゃ ばんちゃ、 一生懸命 売り歩いたんだけんとな一、 なんにも 売れながった。 んだけんと、 炭屋も 売れなくって いたもんだがら、 物々^{ぶちぶち}交換して 炭 もらってきた一」

「しゃあね しゃあね一、 じんちゃ 一所懸命 歩いたんだから、 それでも 売れないんなら しょうないっす一。 今晚は お湯でも 飲んで、 寝っぺや一」

って じんちゃんに 言^ゆったら、 じんちゃは、

「なにになに そんなに 早く 寝なくっても、 体だけでも あったまっぺよ」
って、 炭俵 一俵 いろいろの 脇に 持ってきて、 囲炉裏の 中で どんどん どん
どん、 火 熾^{おこ}したんだと。

火ー ボーボーなったら、 腹^{はら}のほうは ぽかぽかして、 じんちゃんの 顔も にこに
こ、 くるっと 回^せって 背中^{せなか}のほうも あっためで、 部屋中 あったかぐなったんだ
と。

ふだんなら すきま風 ビュービュー 入ってきて 寒い 家^{うち}なのに、 あったかぐな
ったもんで、 部屋の 隅っこのほうがら 子どもみだいな 黒ーい 三人が 出てきた
んだと。 その黒い 三人は、 「あっちい あっちい」「あっちい あっちい」「あっち
い あっちい」って 言^ゆいながら、 座敷^{ざしき}がら 出ようとしてるのを 見つけた じんち
ゃは、

「おー、 お前ら なんだー」
って 言^ゆったら、 三人のうちの 一人が、

「おらー この家^{とこ}さ 長いーごど お世話になってだ 貧乏^{へんぱ}の神さまだ。 今まで 暮
だ 正月だって 言^ゆったのに、 なんにも 焚^やぐものも ねえ 貧乏^{へんぱ}家で、 おれ等^らー な
んだて 住みよい 住みよいって ついつい 長居 してしまったけんとな、 今夜は
暑^{あつ}い 暑^{あつ}いって、 着物 脱^ぬぐほど 暑^{あつ}いがら、 家^{やうつ}移りするとこだ」

て 言^ゆったら、 ずんちゃは、

「あー、 お前等^らが いたさげて、 おれと ばんちゃ、 一所懸命^{かしこめ} 稼^{かせ}えでも 貧乏
ばっかで どうしようもながったー。 お前等^らが いなくなったら 少^ちーしは 楽^{らく}になっ
ぺなー。 なー、 ばんちゃ」

って 言^ゆってがら、 三人のうちの 一人が、

「長いごと お世話になりゃんした」

って、 頭^{あたま} ペコッと 下げだんだと。 そうしたら、 もう一人が

「長いごと お世話んなったんだがら、 なんか お礼 しなげやなんめねえ」
って 語りかけたら、 三人は ボソボソ ボソボソ 相談 しはじまったんだと。

その頃、 じんちゃと ばんちゃは あったまって 「いやいや 食うものなど なん
にも なくったって、 この あったがいのが 何よりの ごちそうだ」、 ばんちゃ 言^ゆ
ってやって、 ばんちゃの 手ー 取って、 あったかく あったまった 布団に 入っ
て、 ぐっすり 眠ったんだと。

次の日の 正月、 じんちゃと ばんちゃは 早ーぐ 目が 覚めたら、 土間のほう
で ピカピカ 光るものが あったんだと。 なんだと 思って 行ってみたら、 小判
に 餅^{もち}に 米が、 臼の中に 山盛り 積んであったんだけど。 じんちゃと ばんちゃ
は 「これは ゆうべの 貧乏^{へんぱ}の神さまが 置いてってくれだやつだなー。 あー よが
った よがった」って にこにこ にこにこ してたんだと。

それがらってゆうもの、 じんちゃと ばんちゃは 幸せに 暮らしたんだと。

とっぴんさんすけさるまなぐ おーしーまい。

※参考文献：日本民話の会編（2014）『新しい日本の語り 9 渡部豊子の語り』（悠書館）、
156～160 ページ

9 「瞽女の坊」（福島県中通り方言の語り）〔再話〕

※田代孝之氏の語りをもとに、五十嵐敬子氏が再話。原則として、再話文のままを引用した。ただし、再話文が手書きであったため、ここでは、適宜、文節間を1字空けにした。

昔々しであったどォー。小やっこい村があつて 瞽女様 毎年 この村に 世話になっている。小やっこい村であつたので あまり上がりはないが 村の人達に 良くして貰っている。

さてさて 峠超えて 一山先の村さ 向うべさと思ったが 辺りは 薄ら暗くなりはじめている。峠越えは無理だべと思った瞽女様 麓の石に腰掛けて 今夜はここで三味でも引いて 夜明かしすんべとなつて、三味線引き うたうにうたつたどォ。その声は なんともいえぬ心に沁る音であつたそう。どっぷら暗くなつたァー、三味線の唄も 遠く 遠く ひびいだァー なにくれ、引き込まっちゃうんだベェ。大かい大蛇が出て来てなァ、ポロポロと 涙流しながら聞いて居たんだと。瞽女様 ^{まなご} 目 不自由なもんだがら、大蛇とは分らず ウンダゲンチョ ケハイで 手を休めた。聞いていた大蛇 言うど、「何とも言えぬいい唄であるのー。心のそこまでしみ込むわー。もし よかつたなら 一晚 俺に お前様のうた 聞かせてくれねェべがー？」となあ。瞽女様、なんと こんな夜深にと 不思議に思ったが 心根の優しい人であつたから、「ああ、俺のうたでよかつたなら…。どうせ、明けても暗れても 分かんねェこの身体だ。聞いてくれる人が居れば 尚 励みとなることよ」そう言うと、三味を引き、語りに語り、うたをうたつた。そりゃ なんとも言えぬ 良い唄であつたどなァ。

やがて辺りが しらじらと明るくなつてきた。

瞽女様 手 休めた。

するつうど、今迄、涙流しながら聞いていた大蛇、「いやいや なんとも良いうたであつたなァー。お前には 俺の姿 分んねェべがな、俺は この山奥の沼に住む 大蛇なんだ。聞かせて貰った礼と言つてはなんだが、これから大事なこと 教えるからな。俺はなァ死ぬのも忘れてしまつて 今では この山 7回り半も回る程になつてしまつたのよ。小ちゃこい沼に 体 沈めるつうどなァ、虫けらや、腐った木の葉っぱが 鱗さ入り込んで 痛くって痛くって 切ねェ。 苦しいのや、そんじェなァ、まなしに この山 追つめで、沼 大っかくして、体 伸び伸びして ^{くらす} 生活ベェと思つていんのよ。うんだがらな、お前早くに逃げて行けよな。うんだども この事は 誰にも しゃべつてはなんねェぞ。もし しゃべつたら 命はねェがんな。 ありがとな、気つけて 行げよ」

瞽女様 たまげつちェまつたー。ころげるようにして 峠越えした。するつうど 鍛冶屋さんの トンテンカン トンテンカンという 音がした。

瞽女様 引くもならず、 逃げるもならず なんとしたらよかんべえ。 どの村の人

達にも 今迄の 恩がある…。 とうとう 瞽女様、 鍛冶屋さんに とび込んだ。「回りの村 全滅しちエまあ、早く逃げてくなんしょ!!」訳 語った。 語り終るつうど ポーと 姿 消えてしまった。 たまげた鍛冶屋さん、 村人達に 語るつうど、「何語る。 先祖様の墓 ぶんなげで 逃げられつうが!!」 皆 ここは離れらんにエ…。

するつうど、「蛇つうのは 金気が毒と聞く。 皆して 百本の杭 こさえで、 山さ 打ち込むベエ」となった。 村人 皆して 鍋釜等々 金気の物 集めて溶かして 杭 こさえだど。

夜深になるのを待って、皆して 杭 打った。 ガッーン、ガッーンとな。 ギャー!! その声は なんともせつねエがったわ。 するつうど 七日七晩 大荒れに荒れだ。 やがて村は 助かった。 瞽女様のおかげと 村の人達は 今の今も 語りついでいるつうごとだどー。

10 茨城方言による「ミニ方言講座」

みなさん こんにちは。 Mと申します。 よろしくお願ひいたします。

わたくしはですねえ、 あの このとおり ことばが とても きれえなものですから、【会場 笑】 茨城弁を しゃべるのが とっても 苦手なんですね。 ですが 昔 聞いた 茨城弁を みなさんと いっしょに 楽しんでいきたいなあと思つて やってまいりました。

さっきですね、 いろいろ お話ね、 語っていただいたのを 聞いていたんですけれども、 昔 懐かしいなあと思つたの、 「マギメ」。

わかります？

あつ、 わかります、 よかった。

「マギメ」 わかりますか、 「マギメ」。

まあ そう、 眉毛のことですよ。

「マギメ」 そう。 ちょっと 聞いただけではねえ、 マギメって 言つても なんだか かわらないですよ。 眉毛のことです。 そうなんです。

それからねえ、 懐かしかったんがね、 「オコゴ」。

もう あたしも 何十年 聞いてないですよ、 「オコゴ」。 んー お漬物のことですよ。 「オコゴ」、 んーん。 おみそ汁とね ご飯と オコゴ、 んーん。 や、 懐かしかったですね。 死んだ ひいばあちゃんが しゃべってたなあってゆう 感じがします。

それから、 「テバダギ」って 知ってます？ 「テバダギ」、 そう 【身振りをしながら】 これですよ。 拍手のこと。 手を たたくこと、 「テバダギ」って 言います。 ええ、 でも これねえ、 「マギメ」「オコゴ」「テバダギ」は 使ってる人 いるのかなあってゆう 感じですね。 今 使う人 いるのかなあってゆう 感じがしますけど。 懐かしかったですよ。

あと、「子ども ナス」。ねっ、「ナス」。子ども 産むこと、ナスとか 言いますよねえ。

なんか それが すごく 懐かしくて、 ちょっと みなさんと いっしょに あのう 研修してみたいなんて 思いました。

さて、その前に「弁当が仕事」ってゆうの ありましたけども、「弁当が仕事」の中で、あのう ねっ、働いてる 男の人がですね、「なんだ おれが 仕事やんだねえんだ。弁当が やんだ」ってゆう 話ししてました。

「ヤル」という ことばですね、「ヤル」。これ「ヤン」に 変わってるの、みなさん お気づきでしょうかね、「ヤン」。「ヤル」という「ル」ということばが、「ヤン」になって、「オラ ヤンネ」(俺はやらない)。ね、「ヤンネ」。

「ソレ ヤンダッペ」(それ やるんだろう)とかね。「やるんでしょ」「やるよね」じゃなくって、「ヤンネ」「ヤル」「ヤッペ」。「ヤン」てゆう ことばに 変わってる んですね。

ちょっと わたしも 原稿 書きながらね、 ちょっと そんなこと 考えてましたけれども、きょうは その中で あのう 「弁当が仕事」の中で 三つですね、みなさんと ちょっと 練習してみたいなあというものがあましてですね、^{いばらぎ}茨城弁練習講座でございますのでね、ここはね、はい。

まず、「弁当を [万能の柄の] 先に ユツツケル」って ありましたよね、「ユツツケル」。これ「結わえる」という ことば。ねっ。そこに 結びつけるという ことばでしたね、はい。

「タテル」、それから「タテル」「オッタテル」「ツッタテル」。ねえ、ぼうっとしていると、「そごに ツッタッテンダネエ」って ゆうような 感じで 言われますね、「ツッタテル」。「オッタテル」、「そこんところ 早ぐ オッタテロ」とかね、[そう]ゆうことばでね「オッタテル」「ツッタテル」って 言いますけども、きょうは「オッタテル」で いってみようと思う んですね。はい、「オッタテル」。

えー わたしが「タテルと 言うのは？」って 言うと、みなさんは「オッタテル」と ^ゆ言っていたきたいと 思います。「オッタテル」は、「おったてる」と きれえに 発音しちゃいけませんね、^{いばらぎ}茨城弁は。「オッタデル」んですよ、みなさん いいですか、「オッタデル」んですよ。

「たてる」とゆうのは？【会場：オッタテル】「オッタデル」そう、ああ もう なんか すごい 発音が クリーンでございますね。^{いばらぎ}茨城弁が とても クリーンに 出てきてますね。

では、えー「結わえつける」は？【会場：ユツツケル】「ユツツケル」、そうですね。じゃ、いってみます。「結わえつける」は、【会場：ユツツケル】「ユツツケル」。そう。それも、「ユツツケル」なんて ^ゆ言っちゃだめですよ。「ユツツケル」んですよ、みなさん ねえ。「～ゲル」んですよからね、そのところを きちっと 押さえてください、^{いばらぎ}茨城弁はね。

それからですねえ、あのう その、「ヤル」という ことば、さっき 言いまし

たけれども、「ヤル」ということばの三段活用ってゆうのを ちょっと 考えてきました。【会場 笑】 三段活用。

で、「それ ヤンナクチャ だめじゃない」って、「おれ ヤンネ」。

だいたい あの 子どもなんか そうですね。「やれ」って 言われると、「ヤンネ」って 言いますよね。「ヤンネ」。

では、「ヤンネ」。言った 言いました、「ヤンネ」。「でも それ ヤンネキ ャナンメ」って 言いますよね。で それで、あのう 「ヤンダド」、「それ ヤン ナキェナンネ」つつの、「ヤンダドー」「やるんだぞ」って、「ヤンダド」って 言いますね。

「おれ ヤンネ」「お前 ヤンダド」。ね、それから 最後にですね、「ヤンネ ダネエガ」ってゆうのが ありますね。これ ちょっと 長いんですけどね、みなさん 覚えてください。

「ヤンネンダネエガ」【会場 ヤンネンダネエガ】「ヤンネンダネエガ」 ちょっと 長いんですね。

で、「ヤンネ!」「ヤンダド!」「ヤンネンダネエガー!」ってゆうような ニュアンスですね。要するに「やらない」「やらないよ」、「でも やるんだよ」「や らなくちゃなんないんじゃないの」。ね、「やらずにやなんないんじゃないの!」、「ヤンネンダネエガー!」ってゆう 感じに 言いますね。これ 三つ みなさん、三 段活用 覚えてください。

「ヤンネ」【会場 ヤンネ】「ヤンネ」。それから、「ヤンダド」【会場 ヤ ンダド】。「ヤンネキェナンネド」【会場 ヤンネキェナンネド】。はい、これ 三 段活用 覚えてくださいね。

「～ナンネド」、「ヤンナキェナンネド」。ま 「ヤンナキェナンネド」ってのは、「ヤンナキヤナンネー」とかね、ニュアンス的には 若干 きますけれども。

じゃあ 三つ、いいですか、覚えました? じゃ もう一回 いきますよ。

せーの、[来場者といっしょに]「ヤンネ」「ヤンダド」「ヤンネキェナンネ ド」。

そう、みなさん とっても お上手ですねえ。

あたくし、とんでも そうゆう ことば、なかなかね 発音できないんですよ、実 を 言うと、はい。

それからですねえ、あのう 一つね 例文を ちょっと 持って来たんですね。

あの 昔 あの、お嬢さんのことを、ね、昔ってか「モコサマ」って よく 言 いますでしょ。「おむこさん」「もこさま」「モゴサマ」。ねっ。「モゴサマ」 ってゆうのも、みなさん、クリーンに「モコサマ」と 言っではいけません。「モ」 にも 濁点を つけるつもりで 言ってください。「モゴサマ」でございますよ、「モ ゴサマ」でございますよ。そう。

ねえ、昔ねえ やっぱり あのう お嬢さんなんか いらっしゃるとねえ、回りの方 興味津々でございますからね。良くも悪くもね、噂は たくさん 立つんじゃないか

ってゆう 感じがしますけれどもねっ。 みんなが 集まると、

「イヤヨオ、 アソコノ モゴサマツチャヨオ、 カデエナアト 思ッテタンダケンドモ、 イカデカ ナメコインダネエノ」って。 【会場 笑】

なんか あたくし ちょっと 苦手なんですけれどもね。 そういうことを 聞きませんか？ なんかねえ。

「イヤヨオ」ってゆうのは、 「ねえねえ ちょっとちょっと 聞いて、 ねえねえ」、 「あの ちょっとさあ」みたいな 感じで。

「イヤヨオ アノ アスゴノ モゴサマツチャヨオ」 「アスゴ」、 「アスゴ」ってのは 「あそこ」、 「あそこ」ですね。 「アソゴノ モゴサマツチャヨオ」 「婿さまってー」、 「イヤ カデエト オモッタケンドモ」、 「カダイ」ってゆうのは、 結局ですね、 見た目 ちょっと すごく 堅物。 あの 堅い、 性格がねえ、 とても まじめであるとか、 あるいは 金銭的に 堅いつてゆうような イメージですかね。

「カデエト オモッタケンドモヨオ イカデガ ナメコインダネエノ」 「イカデカ」、 この 「イカデガ」ってゆうのも、 なかなか この 説明しにくいんですけれども、「イガデガ」ってゆうのは、 まあ 「思いのほか」とかですね 「思った以上に」。

「イヤア 牛久ノ ^{でえぶつ}大仏ダッチャ、 イガデガ イガイ (大きい) カンナア」ってゆう 感じで 言いますよねえ。 あたくし ちょっと そうゆの 苦手なんですけどもねえ、 ほんとに、 ええ。 あと そうゆこと 言いますよねえ。

「イーヤ イヤア アソゴノ オジンツァマ イガデガ 腰 ^{わり}悪イカンナア」なんて、 ねえ。 だから、 いやあ そうゆう 「イガデガ」ってゆう ことばも けっこう 聞くんじゃないかなって 思うんですよ。

そいでね、 あのう 「イガデガ」 「イガデガ ナメコイ」。「ナメコイ」ってゆう ことば、 聞いたこと ない 人、 いますか？

[会場を確認して] ない、 あっ、 そうですか。 じゃあ、 だいたいの方^{かた}は、 9 割方の方^{かた}は、 「ナメコイ」つつう ことばは 知ってるわけですね。

「ナメコイ」ってゆうのは、 結局 なんてゆうんでしょうね 「なめらか」というところから 発祥した ことばのようで、 要するに ええ なんてゆうんでしょうねえ、 こう 「なつこい」とかですねえ、 ま ^{じょうきい}「如才ない」とか 「人当りいい」とか、 なんか そうゆう イメージを 持っていただけると いいかなと 思うんです。 ただですね、 これ 「ナメコイ」ってゆう ことばは、 逆も あるんですねえ。 あんまり ナメコ過ぎちゃうと あの うん、 「調子がいい」とかですね、 うん、 「調子がいい」とか あの 「世渡り上手」ってゆうような イメージを 持たれるので、 こう ちょっと 聞いてみて、 [軽い言い方で]「やあ ナメコクテ いいよねえ、 うん」って ゆうんだったならば まだ ちょっと 付き合い、 ねっ 付き合いは いいかなって ゆう 感じで。 [強い言い方で]「いや ナメゴイガンナア」って ^ゆ言われたときは 要注意でございますね、 はい。 これは もう 「調子がいいんじゃない」って ^ゆ言われてるように、 あまり いいと 思わないほうが いいかもしれないですねえ、 はい。

みなさん さっきの 三段活用 覚えましたか？ だいじょぶですか？ はい。

でね こないだ 実はですねえ、 あたくし あの ちょっと 研修が あって、 あの う あるとこ 行ったんですが、 ええ 岐阜へ 行ったんですね。 岐阜 愛知 茨城 九州。 だいたい そんな感じで こう 並んで、「愛知って どんな ことば、 あるの？」つつたら、「ジャンダラリン」て 言われたんです。

「ジャンダラリン」。

それ、 どうやって 使うのって 言ったら、「なんとかジャンよお」って、 向こうはね ちょっと はっ こう ことばが ちょっと 入ってくるので、 あの 「なんとかジャン」「なんとかジャンヨ それ」ってゆうような 言い方を するそうです。

で、「ジャンダラ」の「ダラ」。「そうダラア」とか、 ねっ 「なんダラア」とかって 言う。 ま そこまでは なんか どっかで 聞いたような 気がする。

「リン」は わからない、「リン」。「ジャンダラリン」、「リン」て なんですか かつたら 「こうゆこと してみたらあ」ってゆうような ニュアンスだそうですね。 だから 「あれ 見リン」て 言うと、「あれ 見てごらんなさい」。「あれ 見リン」「あっ それ やって ミリン」って ゆうふう「リン」を 付けるそうなんですよ。「ジャンダラリン」。

で、 わたくしも 考えました。 じゃ、 茨城弁で 「ジャンダラリン」の 中に、 こう なにか 当てはめるつつたら なんだろうなあって。 なんか ネットで それ ねえ、 見せてくれたんですよ。 ネットに 「ジャンダラリン」が 出てましてねえ。 あと 「ツル」とかね。 「ツリ」も あたしは びっくりしました。「ツリって なんですか」つつたら 「運ぶ」ってゆう 意味なんです。 で、「机 ツルヨ」って 言えば、 机 吊るんですかあって。「机 運ぶよ」って。「あっ ツットイタ ツットイタ」って 言うと 「運んだ 運んだ」ってゆう 意味。 これも 愛知。 茨城弁 じゃないですよ、 愛知なんですけどね。 まあ そういう 話を 聞いて。

わたしはですねえ、 茨城弁で よく 使う、「ンダ」ってゆう ことばって けっこう 使うんじゃないかと 思うんですよ、「ンダ」。 返事 しますよね、 ねえ。「おかあさん、 元気で… 元気は[でなくて] きょうは いい天気ですよねえ」「ンダネエ」、「ンダンダ」みたいな 感じでね、「ンダ」。 それから 「ダッペ」。「ダッペ」「タッペ」「ヤッペ」 いろいろ ありますが、 まあ 今回 ちょっと 「ダッペ」。「ダッペヨー」「ソウダッペヨー」の 「ダッペ」ですね。 え、「ダ」「ダッペ」。 えー 最後にですねえ わたしは、 えー 「ラッショ」を ちょっと 入れてみたんです、「ラッショ」。「アガラッショ」。 昔ね んー 「どうぞ 上がってください」って、「アガラッショ アガラッショ」、 ね。「それ 食べてください どうぞ」って感じ、「タベラッショヨー」って。 ちょっと 懐かしいね、 ほんわかする ことばですね、「ラッショ」。

なので、「ンダ」「ダッペ」「ラッショ」。 これを ちょっと 三つ 入れてみたんですが。 たぶん みなさんの 中には、 こうゆう ことばも あるんじゃないとか、 いろんな ことばを お持ちなのじゃないか と思います。 そうゆう ことば遊びみたいなものね、 ええ こう なんか 書きながら やってるね、 すごく おもしろい

です。

えーと、この会も きっと これから どんどん 全国区になってくんじゃないかな
みたいな 気がしますのでね、ここへ 来れば、 いろんな ところの ことばが 聞
けるとゆうことで、 また お楽しみに 来ていただければと 思います。

きょうは どうも ご静聴 ありがとうございます。

1 1 「蛙ぼたもち」

むがあし あったど。 あるとごろに とでも 根性の悪い 姑婆様^{しゅうとばあさま}が いだんだと。
どのぐれ 根性がわるいがつつうど うめえ物は みんな ひとつじ 食っちまって つ
らい仕事^{しごと}は みんな 嫁様に やらせんだと。 ある日のごど 姑婆様^{しゅうと}が 用足しに
出がけっぺえと 思ってえと 隣がら 重箱^{じゅうばこ}いっぺえの ぼだもち もらったんだと。

「いやあ いがった いがったあ。 こうたに いっぺえの ぼだもち もらって。 だ
げんど おら 今っから 用足しに 行がねばなんね。このまま ここさ 置いどぐど
留守のあいだに 嫁様に 食われちまあかもしんねえ。 どうしたもんだっぺ」
と しばらくのあいだ 考^{かんげ}えてっと、

「あああ そうだ。 ぼだもちに ゆってきかせっぺえ」となって 風呂敷 ほどいで
重箱^{じゅうばこ}の中の ぼだもちに 言^ゆって聞かせてたんだと。 悪いことは できねえもんで、
ちょうどそん時^{とき} 障子のむごうに 嫁様 通りがかってな 部屋^なの中がら 姑婆様^{しゅうと} 独
り言 ごもごもごもごも しゃべってんだと。

嫁様

「なんだっぺえ？」

ど思って 聞いてみっと、 ぼだもちに向がって こう 言^ゆってんだと。

「こらこら ぼだもち よおぐ聞け。 おら 今っから 用足しに行がねばなんね。 も
し 留守のあいだに 嫁さまが ふたを開げたら、 蛙^{けえる}めになれ。 いいな わがったな。
嫁様が ふたを開げたら 蛙^{けえる}め。 おらが 帰^{けえ}ってきて ふたを開げたら ぼだもちだど。
いいな わがったな」

と まあ よおく言^ゆって 聞がせてんだと。 そんで ふたをして 風呂敷で 包んで
仏様^{ほとけ}さ あげで 鐘を チーンと 鳴らすと、 姑婆様^{しゅうと}

「では 行^ゆってくっかんな」

嫁様、

「行^ゆってらっしょ」

と 送^{おく}りだしてはみだものの だんだん だんだん 腹がたってきてなあ、

「まーず 根性の悪い 婆様^{ばあ}だどは 思^{おも}ってはいだげんども、 これほど 根性悪いと
は 思^{おも}わねがった。 あのぼだもち 蛙^{けえる}めにしてんだったら おらが 蛙^{けえる}めにしてやっ
ぺ」

て言^ゆうど、 仏様^{ほとけ}がら 重箱^{じゅうばこ} おろすと 中^{なか}のぼだもち ぺろっと きれ一えに 食^く

ちまったんだと。　そこで　田んぼさ　行くと　前掛けさ　蛙^{けえる}め　しこたま　つかまえて
きて、　からっぽになった　重箱^{じゅうばこ}ん中^{なが}さ　ぎゅうぎゅう　おっちめで入れて　まだ　仏^{ぼどげ}
様さあげで　知らーんぷりしてたんだと。

しばらくして　姑^{しゅうと}婆様^{けえ}　帰^{かえ}ってきて、

「いま　帰^{かえ}ったよ」

って言う^{いう}と　まっすぐ　仏間^{ぶつま}さ　行くと　重箱^{じゅうばこ}おろしで。

「はあ　重^{おも}て重^{おも}て。　嫁様に　食われながったようだな。　いがった　いがった」
って言う^{いう}て　風呂敷　ほどいで　重箱^{じゅうばこ}のふた　ちいんと開けっとなにやら　ぬるっと
した顔　つんだすんだと。

「ありやりや　何だっぺ。　あーあ　そうだ　おらあ　ぼだもちに　蛙^{けえる}めになってろっ
て言^いったんだ。　あーあ　そうがそうが　おめら　蛙^{けえる}めになってたのが。　えらいえらい。
だげんど　今　ふた開けたのは　嫁でねえぞ　婆^{ばあ}だぞ、　ぼだもちに戻れ。　嫁でねえぞ
婆^{ばあ}だぞ　ぼだもちに戻れ」

はああ　戻^{かえ}ったっぺえ。

「嫁でねえぞ　婆^{ばあ}だぞ　ぼだもちに戻れ。　嫁でねえぞ　婆^{ばあ}だぞ　ぼだもちに戻れ」

はああ　戻^{かえ}ったっぺえ。

「嫁でねえぞ　婆^{ばあ}だぞ　ぼだもちに戻れ。　嫁でねえぞ　婆^{ばあ}だぞ」
と　まあ、　いぐ度^どもいぐ度^ども　重箱^{じゅうばこ}のふた　開けたり閉めたりしながら　言^いってんだげ
んども　ぼだもちには　戻^{かえ}んねえ。　そのうち　蛙^{けえる}めら　ぎゅうぎゅう　押^おっちめられて
たもんだがら、　一匹の　ちんちええ蛙^{けえる}め　ぴよんと　跳^はび出した。

「こらこら　ぼだもち　逃^にげるでねえ」

そっちから入れれば　こっちに　ぴよん、　こっちから入れれば　あっちに　ぴよん。

「こらこら　ぼだもち　逃^にげるでねえ」

あっちから入れれば　こっちに　ぴよん。　ぴよんつらぴよんつら　みんな　逃^にげ出し
ちゃったんだと。　そこで　姑^{しゅうと}婆様

「こらこら　ぼだもち　逃^にげるでねえ。　そおだに跳^はねだら　あんこがこぼれる」

と　言いながら　せっせど　追^おいかけたんだげんども　ひとつ残らず　ぼだもちに逃^にげら
れちまったんだと。　おしめえ

※参考文献：藤田浩子の語りを聞く会編（1996）『かたれやまんば　―藤田浩子の語り―
第一集』（藤田浩子の語りを聞く会発行）、92～94 ページ

1 2 「ぼた餅は長持ちの中」〔再話〕

※高萩市教育委員会編（1980）『高萩の昔話と伝説』（高萩市、151～152 ページ）の原話
「ぼた餅は長持ちの中」をもとに七絃の会が再話。

むがし、旦那が仕事さ行^いっていねえまに、うめえもんこっしえで食^くっちまう、おかみさ
んがいたんだと。

それ世間のでえら見でで、旦那さ聞かせんだど。

「おれら、おめえが かわえそうだから、ゆうんだど。今日 ちょうどお昼ごろ、うちさ忘れもんしたふりして、けえってきてみろ」って。

旦那、そうゆわれて（なに、あんだっぺ）って、もどってきた。

したらおかみさんが、土間で一生懸命、ぼだ餅 こっしえでたんだど。旦那、
「ああ、なるほど。 世間のでえらが『お昼にけえってきてみろ』つうわけだ。嬢^{かみあ} ちゃ、
ひとりでああだ うめえもん こっしえで、年中 食ってんのが」

そんで、おかみさんが ぼだ餅 こっしえちまうまで、おもてさ かくれで見でだど。

んで、いいあんばいに おかみさんが ぼだ餅 食うべとなったとき、

「いやあ、おれ 忘れもんしちまって、けえってきた」って、旦那 へえってった。

おかみさん、ばあだばだ、ぼだ餅 かくしたど。

旦那ちゃ、それ しんねえふりして、

「嬢よ、なんだが おれが耳、さっきから むすぐったくてしゃねんだ。なんか へえつてねえか、ちょっくら、耳 かつぽじって 見でくんねえが」ってゆったど。

おかみさん、いそいで 耳がき 持ってきたど、

「どおれ、見せてみろ」って、耳めど 開けて見はじまった。

ずっと 旦那、

「ありゃ、なんだか 今日の嬢の尻^{けつ}、 口利^きくんだねえげ」ってゆった。したら おかみさん、

「なんだっぺ、おめえちゃ。 尻が 口利くわけ あんめえ」って。

「いいや 嬢の尻、『長持ん中でえ ぼだ餅、長持ん中でえ ぼだ餅』って、こおた 口利いでっぺ」って、旦那 ゆったど。

おかみさん、旦那に 見られちゃったの わがんねえで、尻が口利くんでは、こりゃあしゃあねえって。長持ん中から ごそごそ ぼだ餅 へん出してきて、しがたねえぐ 旦那さ食わしたと。

そんで、おかみさん、

「この尻め。おめえさけ 黙ってれば、あのぼだ餅 旦那に食われねがったのに。おめえさけ、黙ってれば」って、自分の尻、ペッタンペッタン ひっぱだいだど。

いやあ、こおだ人も、ねえべよね。

おしめえ

1 3 「お正月のわらべ歌」

(1) お正月を待って唄った唄

〴〵お正月どこまで来た

くりくり山の陰まで来た

銭こ あげたはんた

〴〵お正月 山から来い

山のうらじろ 持って来い

お正月 里から来い
お餅つきつき とんで来い

お正月 海から来い
宝のお舟に のって来い

(2) お正月になって唄った唄

〽お正月あ いいもんだ
雪のような 飯(ま)食(く)って
油のような 酒のんで
木っ端のような 餅食って
お正月あ いいもんだ

コラム “キムラの時計”

突然、止まっていた柱時計の振り子が小刻みに動いたのを見て、
「キムラの時計だから」と、Fさん。

「えっ？“キムラの時計”って、キムラっていう時計屋の時計？」
内心、そんな不思議な時計があるのか、でも、時計屋のキムラ
って、聞いたことないなあ、と思いました。

そこで、聞いてみると、「キムラ」は「気まぐれ、むらがある様子」
といった意味だと分かりました。納得です。

「あの人は、キムラだから…」

「どうも今年のキュウリは、成りがキムラなんだよ」

「麦、蒔いたのが芽が出てきたけど、キムラんなっちゃって…」
のように使うのだそうです。

2019年2月、茨城町のFさん宅で

Ⅲ 来場者アンケート結果

本節では、「聞いてみっぺ、語ってみっぺ、方言昔話3」来場者のうち、アンケートにご協力くださった74名の方々の回答結果について、アンケートの質問項目に沿って報告する。(アンケート調査票は、次節「Ⅳ 関連資料」)

アンケート結果の詳細を以下に示していくが、全体としては、かなり好評だったと言える。アンケートから、次のようなことが指摘できる。

- ・プログラム内容は概ね好評だったと言える。特に好評だったのは、それぞれ複数の昔話で構成されていた「方言・共通語の違いを楽しむ語り・聞き比べ」「茨城方言の昔話」「福島と山形の方言の昔話」である。また、単独のプログラムである「カーテンシアター」「茨城方言ミニ講座」も好評であった。
- ・茨城方言の昔話について、質問4.で「方言(茨城方言)の良さを感じた」と回答した人が74.3%と非常に高く、また、自由記述でも、方言の良さ、おもしろさを感じてもらえたことが確認できる。例えば、自由記述では、「茨城弁はたのしいしおもしろいと思いました。やさしさもあります。」「茨城弁の語りはなじみがあるのか皆すんなり入ってきました。」など。
- ・方言そのものの良さ、おもしろさ、方言の違いについて、質問3.で「方言の良さを感じられた」を選択回答した人は80%以上もあった。また、質問1.の自由記述でも方言へのプラス評価の意見も多かった。例えば、「方言はあたたかく、お話し頂いた皆様の心のこもったお話が標準語できくよりもずっと良かったです。」「方言での昔話を聞くとより一層、お話が味わい深くなります。」「各地の方言によって同じ話でも感じ方が違うのが分かり、よかったです。」など。
- ・質問3.で選択された回答を見ると、「いろいろな地域の方言が聞けてよかった」が62.2%、「もっと多くの方言で昔話が聞きたかった」が24.3%であるのに対して、方言を限定したほうがいいとする選択肢を回答した人はわずか1名であった。一地域の方言だけでなく、いろいろな方言を聞くことが、おもしろさ、楽しさや方言の良さを感じることに繋がっていると言える。
- ・質問3.の回答からは、また、「方言がわからないところがあっても楽しめた」が41.9%、一方、「昔話は方言だとわかりにくい」の回答はなく、「全体的に方言が難しかった」も1名と、方言が理解の妨げとなっていないことがわかる。
- ・質問4.の「(2) 方言の使用」については、「方言を使ってみたいと思った」「少し方言を使ってみたいと思った」を合わせると7割を超えており、昔話を方言で聞くことによって、方言使用が促される可能性が認められる。
- ・質問4.の「(3) 方言を聞く機会」についても、「もっとあったほうがいい」が8割近いのに対して、「あまりなくてもいい」と回答したのはわずか2名であり、本企画が方言に触れる機会として機能していると言える。
- ・質問5.「昔話などの地域の文化の保存・継承」、質問6.「地域の方言の保存・継承」については、無回答者を除いた回答を見ると、いずれも必要性を認める回答が90%を優に超えるものであった。このことから、本企画(方言昔話の会)や本事業そのものの取り組みの継続の必要性が確認できる。
- ・100名を超える来場者があったが、74名の方がアンケートに回答してくださったことをもってしても、本企画が好評であり、成功であったと考えていいだろう。

以下、アンケート結果を個々の質問項目に沿って示していく。本アンケートでは多くの自由記述の意見を得ることができた。その自由記述については、かなづかいや漢字や文体等の一部を修正して示す一方で、回答者個人に関わる情報（年代や性別等）は除いて示していく。具体的な示し方は、以下のとおりである。

《示し方》

- ・アンケートの質問項目順。
- ・選択肢を回答する質問結果は、表として示した。
- ・具体的な感想や意見の回答（自由記述）は、内容によっていくつかに区分した上で、概ね年齢の高い順に示した。ただし、回答者の「お住まい・年代・性別」については、ここでは示さない。
- ・自由記述は原則として回答どおりに示したが、仮名の誤りと思われるところなどは、適宜、修正した。また、読みやすさを考えて、句読点も、適宜、加えた。
- ・自由記述は、大雑把な内容によって区分して示した。したがって、お一人からの回答でも、いくつかの内容の場合は、分けて扱った。

アンケート結果

1. 本日のプログラムで、よかったと思ったものはどのプログラムですか。よかったと思ったプログラムについて、いくつでも○を付けてください。また、どんなところがよかったか、具体的に教えてください。（複数回答可）

①方言・共通語の違いを楽しむ語り・聞き比べ	42(56.8%)
②茨城方言の昔話(その1)*	38(51.4%)
③カーテンシアター「だいだらぼう」	29(39.2%)
④福島と山形の方言の昔話	37(50.0%)
⑤茨城弁によるミニ講座	32(43.2%)
⑥茨城方言の昔話(その2)*	33(44.6%)
⑦お正月のわらべ唄	14(18.9%)

*（その1）はプログラム前半の4話、（その2）はプログラム後半の2話

◆具体的な意見・感想

<方言の良さ、おもしろさについての意見・感想>

- ・方言のおもしろさがわかった。
- ・全部。
- ・方言を聞くと、何か心の中迄、ほんわかとあたたかい気持ちになってきますね。（私は都会の生まれですので、）日本人でよかったと思います。

- ・あらためて、方言での昔話を聞くとより一層、お話が味わい深くなります。
- ・共通語と違い、高く低くリズム感があり心持よく、ひきこまれてゆく。もっと他の地方の語りを聞いてみたいです。祖母を思い出しました。
- ・場所によって同じ話でも、感じ方がちがうのはとてもおもしろかった。参考にしたいです。
- ・発表の方の暖かい心が感じられました。方言っていいですねえ！！
- ・違う方言によって、感じ方（受け取り方）も異なってくる。語り手の気持ちの入った口調。
- ・表現がとても良く、声の出し方がじょうず。すんなり聞き取れる。
- ・方言はやはり雰囲気がいいですね。
- ・茨城弁と福島弁比べると、茨城の方が青森・秋田に近い様な気がした。演者の違いかな？
- ・地元の人が地元の言葉（方言）で語るという「土着性」（風土から生まれた言葉）がよかった。
- ・茨城弁はたのしいしおもしろいと思いました。やさしさもあります。昔を思い出しました。
- ・語り手のあたたかい語り口に魅了されました。
- ・男・女の違いで、又違った聞こえ方でした。
- ・茨城県・他の県の方言の語り、とてもよかったです。勉強になりました。
- ・浮かんで来ました、話の情景が。心がほっこりして来、心がゆったりと、ふくよかになるお話。大切なことですね。子ども達に、伝えてゆく場が広がることを願います。
- ・自分たちのサークルの会の時にもひとことふたこと取り入れて、茨城の方言を子どもたちに知らせたいと思います。
- ・民話を語るのは、とても良かったです。全部良かったです。
- ・方言はあたたかく、お話し頂いた皆様の心のこもったお話が標準語できくよりもずっと良かったです。
- ・方言は良いですね。なんか心が「ホッコリ」します。
- ・茨城弁の語りはなじみがあるのか皆すんなり入ってきました。皆様ありがとうございました。又、聞きに来たいです。
- ・水戸市出身だが方言を話すことはほとんどない。方言で聞く昔話は味があってなかなかいいなあと思った。
- ・各地の方言のあたたかさ、良さが伝わった。なかなか一度に聞けないのでよかった。共通語とは違う伝わり方がよかった。
- ・色んな話、色んな方言がきけたのが良かったです。
- ・県内外のお話、方言がきけたところ。
- ・語る活動をしている者としては、いろいろな方の語り口を聞かせていただけて本当に勉強になりました。聞きやすい語り方（語り口）についてさらに考えていきたいです。

<個々の演目についての意見・感想>

①「方言・共通語の違いを楽しむ語り・聞き比べ」について

- ・徳島弁と茨城弁が似ていることが分かった。

- ・「弁当が仕事」を聞いて方言はその地の風景であると思った。
- ・内容が同じなのに、イメージのちがいがあり、面白かった。
- ・同じ話でも、言葉がちがうとまたちがった話のようです。
- ・各地の方言によって同じ話でも感じ方が違うのが分かり、よかったです。
- ・各地の方言の聞き比べ、おもしろい。こんな語りの会もあるんですね。興味深かったです。
- ・はじめに共通語を聞き、次に方言で聞く、という順序がよかったと思います。最後が茨城(地元)で、なじみがあるためか、笑い声が聞かれ、反応がよく、方言のも持つ力(よさ)を感じました。
- ・同じ内容でも雰囲気まったく違くなるのが面白かった。
- ・聞きくらべができてとても参考になりました。
- ・①の同じ再話(話型)のものを各方言で語り比べると、各々違ったトーンで感じ取れて面白かったです。

②「茨城方言の昔話(その1)」について

- ・方言は同じ県北でも違いが分った。「後久保の狐」と「沢又三太のはなし」
- ・「蛇女房」は後方に全く声が届かなくイライラ、他の方のは、よく声が通っていた。
- ・(②について) 方言の違いを聞き取れず残念でしたが、楽しめました。

③「カーテンシアター」について

- ・だいだら坊の語り、すばらしかったです。男性のお声はよく通り、拍手。
- ・カーテンシアター・語りも、制作物(カーテン?)も素晴らしかったです。耳の遠い者にはよく通る声がよかったそうです。
- ・絵巻を使つての表現が工夫されよかった。
- ・カーテンシアターは工夫したおもしろさがあつた。
- ・カーテンシアターはじめて見ました。大作に感心しました。
- ・カーテンシアターの発想がすばらしい。今後も活動をしていただければと思います。語り部の人もすばらしい。
- ・はじめてカーテンシアターでしたので楽しかったです。方言を楽しみました。

④「福島と山形の方言の昔話」について

- ・福島と山形の方言が良かった。
- ・福島・山形、難しかったです。
- ・福島「ごぜの坊」、しみじみとよかった。
- ・「貧乏の神」、山形弁の方も、良かった。
- ・「ごぜの坊」の間、勉強になった。
- ・「笠じぞう」、味があつた。歌もよかった。
- ・「笠地蔵」とても良かった。(いろり端)で聞いたら最高!
- ・「かさ地蔵」を聞いてグッときました。
- ・白川さんの語りに歌(相馬流れ山)が入っていたのが、とてもよかったと思います。
- ・白川ケイ子さん歌まじりでとっても聞きやすくゆったりと聞けました。思いも深いです

よね！ふるさとは良いものですね。方言もぜひ残していきたいです。

- ・白川ケイ子さんの語りがとても良かったです。

⑤「茨城弁によるミニ講座」について

- ・ミニ方言講座が良かった。
- ・茨城弁によるミニ講座、とてもよかった。
- ・茨城弁によるミニ講座、楽しかったです。
- ・ミニ講座、聞いたことあるようなないような。

⑥「茨城方言の昔話（その2）」について

- ・茨城方言の昔話の「ぼた餅は長持の中」は高萩の民話の会でもとりあげて、演じています。同じ内容で親近感を持てましたし、参考になって良かったです。
- ・「ぼたもち」の話題2題は、当時の人間性をとてもよく示している。やはり、方言のほうに味がある。
- ・(⑥について) 茨城の方言おもしろいです。

<その他、要望等>

- ・方言の話しのある場所（地域）を言った方がよい。

2. 配布資料は、昔話などを聞く上で、役に立ちましたか？

a.役に立った	52 (70.3%)
b.まあ役に立った	13 (17.6%)
c.あまり役に立たなかった	0 (0.0%)
d.役に立たなかった	0 (0.0%)
e.その他	0 (0.0%)
無回答	9 (12.2%)

3. プログラム全体についてお聞きします。「そうだ」と思うもの、いくつでも○を付けてください。(複数回答可)

方言の良さが感じられた	60 (81.1%)	2 地域くらいの方言にした方がいい	1 (1.4%)
方言の良さは感じられなかった	1 (1.4%)	茨城の方言の昔話に限定したほうがういい	0 (0.0%)
昔ばなしを方言で聞くとおもしろい	40 (54.0%)	共通語（標準語）の昔話をもっとあったほうがいい	2 (2.7%)
昔話は方言だとわかりにくい	0 (0.0%)	昔話の方言の説明があったほうがいい	3 (4.1%)
全体的に方言はよく分かった	23 (31.1%)	方言がわからないところがあっても楽しめた	31(41.9%)

全体的に方言はまあ分かった	7 (9.5%)	方言がわからなくて楽しめなかった	1 (1.4%)
いろいろな地域の方言昔話が聞けてよかった	46 (62.2%)	全体的に方言が難しかった	1 (1.4%)
もっと多くの方言で昔話が聞きたかった	18 (24.3%)	布絵の展示が良かった	20 (27.0%)
その他 (※)	3 (4.1%)		

※「その他」の意見

- ・もう少し学術的になると良い。民俗学的な分析とか、何か勉強になる事を入れて欲しい。
- ・各地域の前に説明があった方が良いと思う。
- ・何であれ絶滅の危機となると貴重になるものだと感じた。
- ・茨城方言が身近かに感じられ楽しかったです。

4. 昔話を聞いて、方言、特に茨城方言についてどのように感じましたか？それぞれについて、1つ選んでください。

(1) 方言の良さについて

a. 方言（茨城方言）の良さを感じた	55 (74.3%)
b. ある程度、方言の良さを感じた	11 (14.9%)
c. あまり方言の良さを感じなかった	0 (0.0%)
d. 方言の良さを感じなかった	0 (0.0%)
無回答	8 (10.8%)

(2) 方言の使用

a. 方言を使ってみたいと思った	25 (33.8%)
b. 少し方言を使ってみたいと思った	28 (37.8%)
c. 方言を使ってみたいと思わなかった	6 (8.1%)
無回答	14 (18.9%)

※「その他」の意見

- ・でも方言で育っていないと、かえって違和感を感じるかな。
- ・方言はいつも使っている。(日常)

(3) 方言を聞く機会

a. もっとあったほうがいい	58 (78.4%)
b. あまりなくてもいい	2 (2.7%)
c. どちらともいえない	5 (6.8%)
無回答	9 (12.2%)

※「その他」の意見

- ・今回のような機会がもっとあるとよいと思う。

5. 昔話などの地域の文化について、保存・継承していく必要があるとお考えですか？

a. 大いにある	57 (77.0%)
b. ある程度ある	13 (17.6%)
c. あまり必要ない	1 (1.4%)
d. 全く必要ない	0 (0.0%)
e. わからない	0 (0.0%)
無回答	3 (4.1%)

6. 地域の方言について、保存・継承していく必要があるとお考えですか？

a. 大いにある	53 (71.6%)
b. ある程度ある	13 (17.6%)
c. あまり必要ない	2 (2.7%)
d. 全く必要ない	1 (1.4%)
e. わからない	0 (0.0%)
無回答	5 (6.8%)

7. 本日の会の全体について、ご意見やご感想をお聞かせください。

◆具体的な意見・感想

- ・大変面白く拝聴いたしました。子供の頃、普通に話していた言葉ですので、懐かしかったです。男性の方も活躍されており、感服致しました。
- ・いろいろと工夫してあり楽しかった。
- ・大変、勉強になりました。
- ・久しぶりに、ゆったりとした語りに会えました。
- ・楽しい時間を過ごすことができました。良かった。良かった。
- ・大変おもしろかったです。
- ・新鮮でした。ありがとうございます。
- ・この会に参加出来、良かったです。お話し会など関係のある方が、ほとんどだと思いますが、周りに少しずつ伝えていきたい！と思いました。ありがとうございました。
- ・語って下さった方々の話しに、それぞれの情景が思い浮かべられ、豊かな日本の風土が育てたお話しを楽しめました。ありがとうございました。
- ・ミニ講座、漫才みたいで楽しかった。
- ・とても懐かしく聞くことができた。
- ・参加できてとても良かったです。じっくり聞くことができました。
- ・たのしい講座でした。
- ・方言の民話のよさ、味わい深さを十分に味わった。
- ・面白かった。ありがとう！

- ・昔話を聞くことが、無くなったなあ。(方言に限らず)
- ・あたたかい雰囲気とても暖かい気持ちになりました。感謝いたします。
- ・人の語りはあたたかみがあってよいですね。大人向け、子ども向け、ずっと続けていた
だきたいと思います。楽しませていただきました。ありがとうございました。
- ・楽しい会をありがとうございました。とても良かったです。やさしい気持ちになれました。
- ・心がホッとしました。素敵なアカデミーでした。
- ・会場の皆様全員、静かに集中し、ときどき、笑い声。昔話の語りの力、方言の力を感じ
ました。とてもよい雰囲気でした。
- ・とても楽しく聴講しました。特に若い頃は方言が恥ずかしいものと思ってましたが、東
日本大震災や「あまちゃん」で東北地方の言葉が全国に流れるようになってから、方言
に対する劣等感がほとんどなくなり、むしろ、好きなものになりました。テレビの力を
借りなければそう思えなかったのが情けないところですが、大きな転換点でした。本日、
久しぶりに方言をたくさん聞いて、祖父母とすごした子供時代を思い出したりして、気
持ちがなごみました。
- ・とても、楽しく聞かせていただきました。ありがとうございました。ぜひ、子どもたち
に聞かせてあげたいと思いました。茨城弁の良さも民話の良さも子どもたちに伝えてい
きたいと思いました。
- ・方言の内容は、まずしい中に生きるのぞみや将来への希望をつなぐ話しであった。私は
目が悪いので大きな声がよく聴きとれる。特に休憩後（県外の方）。
- ・なつかしいというより、私自身九州なので、方言は昔、子供時代を思い出します。

◆方言に対するマイナス意見

- ・方言はある程度（お互いわかるくらい）ならおもしろいが、通じない人とは話しがあわ
なくて困ります。方言の効用→「仲間うち」には心地よいが「仲間はずれ」にもできる。
方言の良い面を残していけたらいいと思います。
- ・方言で…。他の地域で通じない言葉で育てられる子供の事を考えると、方言など教えず
育てた方がよい。学術目的の研究なら分るが、交通、通信の発達で自然に消えていく地
域言語を無理やり実生活で保存する意義があるとは思えない。

◆方言の良さや方言の継承についての意見・感想

- ・お国ことば、方言は独特のぬくもりがあっていいですね。皆さんすっかりお話の中にと
けこんで熱演して下さいました。感謝！！
- ・民話や昔話には方言がかかせないので、今勉強中です。今回参加できて良かったです。
方言がなくなると言う事はふるさとが遠くなるようなもの 若い人に継承して方言の良
さをかみしてもらいたい。
- ・なつかしかったり、方言ってとてもよいものだと思います。
- ・方言のよさを再認識することができ、できる範囲ではあるが、自信をもって、伝えてい
きたい。

- ・方言をなくさない努力の大切さも感じる事ができた。またよろしくお願いします。
- ・方言は絶対なくなってしまうのはほしくないです。方言は心のふるさとです。一言、聞いただけであたたかい心になります。
- ・昔ばなしはあたたかいものですね。方言は土地のことは、地域への愛着とほこりを持っていきたいと思います。
- ・方言のお話しのし方が大変良かったです。茨城弁の方言が自分と照らし合せてみたら、日常に使いすぎているみたいな自分が反省させられましたが、小さい時から使っている方言はぬけません。
- ・方言のよさについて実感できたすばらしい講座でした。
- ・本当は生で耳にするのが一番だと思います。ただ消えていってしまうのはしのびないので、記録されたものを保存・再利用できる仕組みを作っていけたらと思います。

◆次回への期待や継続への要望

- ・次回を楽しみにしております。茨城弁を大事に伝えていきたいと思いました。
- ・来年もこの機会があれば願ってます。
- ・これから先も、続けて欲しい。全国の方言を順次聞いてみたい。
- ・とても楽しい時間を過ごす事が出来て良かった 又、次回を期待！
- ・初めての参加ですが、とても楽しめました。次回も是非参加したいです。
- ・これからもつづけてほしいです。
- ・各地の方言…とても味があり良かったです。一人一人の声でとても良かったです。笠地蔵で涙が止まらなくなりました。方言で民話を語る…語らなくてはならない時代だと、私は思います。次回楽しみにしております。

◆会の構成や内容などに関する感想や要望

- ・三浦先生の講義の時間をもっとたくさんとっていただきたく思います。13:30 開始にするとか。
- ・茨城弁の辞書的なものが有ったらいと思います。冊子にして配っていただけたらと思います。次回に期待しております。
- ・ディスカッションがあるといいと思う。
- ・「昔話等の語り」の最初に、万能やお櫃の説明が（絵で）あり、わかりやすく、とても親切でよかったと思います。
- ・茨城方言を主としながら、他県の方言を語る（紹介する）というこの形式がとてもよいと思います。

8. 今日の催しのことを、何で知りましたか？

a. 新聞	3 (4.1%)
b. ラジオ	0 (0.0%)
c. ポスター・チラシ	15 (20.3%)
d. 土曜アカデミーのパンフレット	17 (23.0%)

e. 知人・友人から聞いた	37 (50.0%)
f. その他※	6 (8.1%)

※杉本教授からの紹介（2人）/ホームページ/妻からの紹介/サークルからの紹介/ネット
◎最後に、あなた自身についてお尋ねします。

性別

男性	17 (23.0%)	女性	52 (70.3%)	無回答	5 (6.8%)	合計	74 (100%)
----	------------	----	------------	-----	----------	----	-----------

年代

年代	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上	無回答	それ以外	合計
人数	1	0	0	9	13	24	21	3	2	1	74
%	1.4	0.0	0.0	12.2	17.6	32.4	28.4	4.1	2.7	1.4	100

お住まい

県内 70 (94.6%)	水戸市	27	ひたちなか市	2	笠間市	13
	日立市	3	那珂市	4	小美玉市	1
	東海村	3	高萩市	8	県内	4
	茨城町	1				
県外 4 (5.4%)	東京都	1	千葉県	1	無回答	4
	長野県	1	福島県	1	合計	74

IV 関連資料

- ・ 来場者アンケート調査票…A4・表裏 2 ページ
- ・ 方言昔話の会のチラシ・ポスター…（チラシ）A4・カラー、（ポスター）・A2・カラー、デザインは同一

平成 30 年度文化庁委託事業「方言と方言の昔話による生活文化の保存・継承」・茨城大学図書館土曜アカデミー「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話 3」アンケート

文化庁では、被災地の方言の保存・継承の取り組みや、方言の力を活用した復興の取り組みを支援することにより、被災地域の方言の再興および地域コミュニティの再生に寄与する支援事業を行っています。この趣旨のもと、本企画は、茨城大学図書館と連携して、図書館土曜アカデミーとして「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話 3」を開催いたしました。この企画につきまして、皆さまのお声をお聞かせください。なお、本アンケートへのご回答は、個人の特定できない形で集計等を行い、後日、文化庁委託事業の報告書等において報告させていただくとともに、来年度以降の取り組みに活かしてまいりたいと存じます。

ご協力くださいますようお願い申し上げます。

茨城大学人文社会科学部 杉本 妙子

1. 本日のプログラムで、よかったと思ったものはどのプログラムですか。よかったと思ったプログラムについて、いくつでも ○ を付けてください。また、どんなところがよかったか、具体的に教えてください。

- | | | |
|-----------------------|----------------|-----------|
| ①方言・共通語の違いを楽しむ語り・聞き比べ | ②茨城方言の昔話（その 1） | |
| ③カーテンシアター「だいだらぼう」 | ④福島と山形の方言の昔話 | |
| ⑤茨城弁によるミニ講座 | ⑥茨城方言の昔話（その 2） | ⑦お正月のわらべ唄 |

具体的によかったところ

2. 配布資料は、昔話を聞く上で、役に立ちましたか？

a 役に立った b まあ役に立った c あまり役に立たなかった d 役に立たなかった e その他

3. プログラム全体について伺います。「そうだ」と思うもの、いくつでも ○ を付けてください。

方言の良さが感じられた	方言の良さは感じられなかった	昔話を方言で聞くとおもしろい
昔話は方言だとわかりにくい	全体的に方言はよくわかった	全体的に方言はまあわかった
いろいろな地域の方言昔話が聞けてよかった	もっと多くの方言で昔話が聞きたかった	
2 地域くらいの方言にしたほうがいい	茨城の方言の昔話に限定したほうがいい	
共通語(標準語)の昔話をもっとあったほうがいい	昔話の方言の説明があったほうがいい	
方言がわからないところがあっても楽しめた	方言がわからなくて昔話を楽しめなかった	
全体的に方言が難しかった	布絵の展示が良かった	
その他（		）

4. 昔話を聞いて、方言、特に茨城方言についてどのように感じましたか？それぞれについて、1 つ選んでください。

- (1) 方言の良さについて → a 方言(茨城方言)の良さを感じた b ある程度、方言の良さを感じた
c あまり方言の良さを感じなかった d 方言の良さを感じなかった
- (2) 方言の使用 → a 方言を使ってみたいと思った b 少し方言を使ってみたいと思った
c 方言を使ってみたいとは思わなかった
- (3) 方言を聴く機会 → a もっとあったほうがいい b あまりなくてもいい c どちらでもない

裏面の質問にも答えてください



文化庁委託事業「方言と方言の昔話による生活文化の保存・継承」
・茨城大学図書館土曜アカデミー

聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話3

日時：平成30年12月8日（土） 14:00～16:00（予定）

場所：茨城大学図書館3階ライブラリーホール

* 入場無料、事前申し込み不要、駐車場有

◆プログラム

(1) 聞き比べ、方言いろいろ
◎昔話「弁当が仕事」を方言と共通語の語りで
語りのことば…共通語、茨城方言、徳島方言、広島方言

(2) 茨城方言の昔話を楽しむ(その1)
「蛇女房」「後久保の狐」「堂坂の白蛇」他

(3) カーテンシアター「だいだらぼう」

(4) 東北方言で昔話を楽しむ
福島方言「笠地蔵」、山形方言「貧乏の神様」他

(5) 楽しく学ぶ！茨城方言ミニ講座

(6) 茨城方言の昔話を楽しむ(その2)
「蛙ぼたもち」「ぼた餅は長持の中」

(7) お正月のわらべ歌

《展 示》

布絵による昔話「カッパレ餅」「笠地蔵」「浦島太郎」他
『おあきさんの昔ばなし』『しみじみ楽しく茨城のことば』他

主催：文化庁平成30年度委託事業・被災地における方言の活性化支援事業
「方言と方言の昔話による生活文化の保存・継承」(茨城大学)
・茨城大学図書館

後援：茨城県教育委員会

「聞いてみっぺ・語ってみっぺ・方言昔話3」チラシ・ポスター

第三章 民話についての聞き書き： 庄司アイさんと民話、わらべ歌

本章は、やまもと民話の会代表の庄司アイさんにお話しいただいた一部を、つとめて聞いたとおりにまとめたものである。本章の聞き書きの中にも出てくるが、やまもと民話の会は、1997年に山元町で行われた「むかしむかしざっと昔」に協力者として参加した方々によって、翌年5月に発足した会である。発足以来、庄司さんは代表を務め、民話の語り、採訪、再話や、他の民話グループとの交流、メディア出演等、精力的に活動している。2018年3月24・25日には、やまもと民話の会発足20周年を記念して、山元町つばめの杜ひだまりホールにおいて記念行事を開催している。その庄司さんが代表を務めるやまもと民話の会では、東日本大震災の直後から、大震災を語り継ぐために立ち上がり、被災者の方々から聞き取りを行い、3冊の冊子（後に1冊の書籍として小学館から刊行。注1参照）に証言をまとめている。もちろん、庄司さんをはじめ、会のメンバーも被災に遭われており、証言者でもある。庄司さんは、第一集で津波体験「民話は残った」を書かれているが、その中で、民話の力について、次のように述べておられる。（『巨大津波』42～43ページ）

でも、命あってよかったと思ったのはつかの間。日に日に隣近所、友人知人、縁戚と、訃報のことばかり。全身の力も抜け、やり場がなく、自分はすべての物をなくした悲しみで数日がすぎました。

その時、みやぎ民話の会の島津信子さんが来てくれたのです。とてもよろこんでくださったのです。抱き合って、泣いて、泣いてよろこびました。

「みなさん、心配してくださっておられた」と。その時、

「あっ、私には民話が残っていた」。

喪失感から覚めたのです。

皆さんも被災者なのに、私一人が被災者のようにお励まし頂きました。皆さんのやさしさに感激しきりでした。

再起への力は、民話からもらいました。

民話はやさしい

民話は熱い

民話は強い

このように述べられている庄司さんに、2018年8月に山元町のふるさと・おもだか館にて、お話しを伺う機会を持つことができた。以下は、茨城の昔話の再話グループ・七絃の会の藤枝安子さん、川澄敬子さんといっしょに山元町に庄司さんを訪ねた時に伺ったお話の一部である。なお、以下の聞き書きでの話し手は、

S：庄司さん、Y：藤枝さん、K：川澄さん、T：杉本

と、アルファベットで示す。また、話の中に出てくる一部の人名もアルファベットにしたが、庄司さんのご承諾が得られたお名前については、実名を挙げさせていただいた。

聞き書きの示し方は、以下のとおり（前章の方言昔話に概ね同じ）である。

《聞き書きの表記の仕方》

- ・表記は、漢字仮名交じり文、1～数文節ごとの分かち書きとした。
- ・共通語と異なる発音は、ひらがな書き、または漢字にルビを付けて示した。
- ・聞き取りが不十分なところや発音が判別できないところには、波下線を付けた。
- ・わかりにくいと思われるところについては、適宜、[] 内にことばを補ったり、() 内に共通語の意味を加えたりした。
- ・上の項目のほか、適宜、脚注で説明を加えた。
- ・言い淀みやフィラーは、適宜、省略した。

やまもと民話の会ができるまで

T：「民話は命綱」だと おっしゃったことについて、語るということが どんなことなのかという お話を 伺いたいんです。聞くほうはもちろん、私たちもそうですけれども、被災された方にとっても 聞いて、やっぱり 心がほっとしたり、あたたかくなったりしますけれども、語る側にも、やっぱり すごく 語ることの 意味があるんじゃないのかなと。『巨大津波』¹の本などを 拝見しましても、皆さん、口にすることで 心が だんだんに落ち着いて 穏やかになるのかなと 思うんですね。

S：わたしもね、あのう、民話っていうものを 聞いたことを、ずっと 隠してきたんです。ってゆうのは、言う機会が なかったんです。大東亜戦争になってしまって、そして、あのう 学校のお勉強やなんかで、えー まず 小学校 1 年生のとき 大東亜戦争だから、そんな 昔話の話なんていうの 余裕はなかった。そして、終戦があって、たちまち 新しい文化、ねっ。もう 文明が すっかり変わってしまって、民話が あの語られたってゆうのは、わたしが 小学校の 1 年ぐらいまでです。あとは、誰も 語らないの。うん。わらべ歌だって、あの うんと 遊んだけど、それは 小学校 戦争終わるまで。わらべ歌も いっぱい遊んだのね、ただ。けども、それは 戦争が終わるまで。あと、もう 文化国家で、あのう とても あのう 昔話は できなかった。

¹ 『巨大津波』 『一語りつぐー小さな町を呑みこんだ 巨大津波』。東日本大震災の被災者の方々の証言集。やまもと民話の会編、2013 年、小学館発行。自らも被災者であるやまもと民話の会の方々が、大震災を事実として語り継ぐために、震災後、間もなくから聞き歩くなどしてまとめたもの。被災者の方々の文章とやまもと民話の会による聞き書きとから成る。小学館発行の『巨大津波』は、やまもと民話の会が発行した 3 冊の証言集『小さな町を呑みこんだ 巨大津波』第一集（2011 年 8 月）、第二集（2011 年 12 月）、第三集（2012 年 4 月）として発行したものを 1 冊にまとめたもの。なお、わずかだが、冊子のみの掲載文がある。

それから、わたしも あのう まあ 一応 その ほらね、女学校やなんかに 入って
から、あと それから 結婚して、あと 保育一の仕事を ずっと あの 定年まで す
るわけなんだけどもねっ。

(中略＝庄司さんは、女子高で学んだ後、女子高の校長に勧められて新設の大学に特
待生として進学することを考える。しかし、兄のことばに促されて、進学はあ
きらめて、代用教員になることを考えたり、女子高の司書補になることなどを
考えたりしたそうである。)

すぐに 今度 女子高では、図書館の おー [図書館] で 司書補が必要だから、
あの 割と大きな 整備された 図書館だったんだけど、[女子高の校長が]「その
司書補を しながら、一年 浪人、一年 浪人したつもりで」 その頃 あのう 予備
校なんつうの、ないもんだから、「ここで 勉強してればいいって。あと、必ず 開け 自
分の道が 開けてくるから。そうゆうふうにして 学校に行ったら いんでないかな」っ
て 言^ゆってるうちに、嫁^{よめ}んなっちゃったの。

K：ああ そうなんですか。

S：その年に、その末^{すい}にはね。で、それから わたし、あのう 勉強して、調理師の資格
取ったり、それから あのう いろいろ 資格 取ったの。そして、保育所の保母さん
の資格も すぐ 取ったの、だいたい。で、あのう ここに、山元町^{やまもとちょう}²に 保育所ができた
のが 昭和 40 年で、そんなとき、すぐ 保母さんの 調理師の資格もあつたし、保母の
資格もあつたがら そこに行^ゆって、わたしの人生 なんなんだべなあ^ゆって思^{おも}って。[保母
の] 学校も出ないでいい^ゆって言^いんで、うんと こう、なんてゆうんだろ、引け目は 感
じながら、あの やったんですね。で、あのう クラスの担任になつてくつと、誕生会
やなんかもあつて、そうゆうときに 人形劇^{にんぎょうげき}とかを やつたらいんでないかなあ^ゆって思^{おも}
って、そうして、その わたしが 民話で聞いた 昔のものを、こう やると。あと お
昼寝のとき、ちょっと ここ(耳元)で もしましやと 昔話を語ると、そうすると、
保専³ 出た 若い先生ね、10 歳 違^{ちが}あがんね。[若い] 先生が、「庄司先生は どうも 古
くさいことばかりを やって」[と言う。] 確かに、『ぐりとぐら』⁴やね、なんか そ
れこそ あのう あの 中川李枝子^{なかつかわえだこ}さんなんかが もう、絵本で ぱつと出た 時代だ
から、もっと新しいの してください^ゆって言う 先生もいたの。で、中には、「いや、語
って聞かせることも、引き続き 昔とおんなじように やって いがなきゃないし(い
かなきゃならないし)、その、昔の その まあ お話だね。お話も やっぱり 必要だ

² 山元町 宮城県亘理郡山元町。山元町は、西に宮城県伊具郡丸森町と、南に福島県相馬郡新地町と接している。この 3 地域には、それぞれに民話の会があり、合同で語りの会を開いたりもしている。

³ 保専 保母専門学校(今の保育専門学校)の略。

⁴ 『ぐりとぐら』 中川李絵子・作、大村百合子・絵の、幼児向けの人気絵本。初版は 1967 年。その後、シリーズ化されている。

って」。えー、福音館〔書店〕なんかが 発行する 本を 見でも、「桃太郎」もあったし、んー あーのー それこそ あー 「きづねの嫁入り」やなんかも あったしね。んー 「そうゆうふうな、 ねっ、[そういうふうな] の あるんだから、そうゆうのもことばで 語って聞かせるってゆうのは、いいんでないか」ってゆう 意見、職員会議のとぎね、えー やられたんです、わたしね。でー、まっ じゃあ、ああゆう人が いないときに 語ればいいなってゆうふうで、わたしは、あのう そんなとき、もう んーと 30 歳だったからね。30 歳で 保育所が できたんだから、はじめて。で、定年まで 30 年、ちょうど 30 年、勤めたんです。ん でも、ほの 今、わたしの仲間に、あのう やっぱり ほの おー わたしよりも 若い人なんだけども、おー 保專 出た 人がね、「いや、庄司先生の あの話は おもしろい」。で、なんだかんだって 言^ゆって、その 人形劇をしながら、民話をやって、民話の会に 籍を置いてんのが いるのね。で、しょっちゅう あの ふた^{ふた}んで (二人で?) そっちこっち 歩くけども、やっぱり 持つてる力、民話の力ってゆうものをね、やっぱり 感じる人と 感じない人が いたんです。今も 感じない人が いると思う。昔の 古臭いものとして 決めてこんで (決め込んで) しまうのが、いると思う。ただ、わたしは そのように ぐーっと胸に、もう 仕舞い込んできたのがね、退職した年に たまたま ここ (=山元町) の役場でやっている 資料館で、「ざっと昔⁵」、山元の、ねっ、「ざっと昔」の 企画展つのを やったの。で、ちょうど 退職したもんだから、わたしね。で、役場の人達、ねっ、「あれば (庄司さんを) 連れてきて やらせたらいいべ」ってゆんで、その企画展で えー そのうしたのが 一番先。そのときね、(K あ〜、はいはい) 企画展をやるにも、^{しょうが}小学 んと あの 小学校の先生した人たちも 何人もいたんです。あと、保育所の保母 わたし一人ね。そこで、まず 20 人ぐらいいる、協力したんだけど、やっぱり 関心を持たないでしまった人と、「いやっ これは」って思って、民話も大事だって 思ってる人が、今、民話の会⁶を作っているんですね。

T : これ (=『巨大津波』)、これに書いてありました。確か どこかに、今 伺った この企画展をやって、やまもと民話の会ができてって、とかっていう。

S : そして、「[ざっと昔]の企画展が」すごく好評だったの。それがね、ここ (=山元町)、宮城県でしょ。福島、ここのね 資料館は、割とね、誠実、あの あのう 何ていうの、誠実に この あの やってたのね。それが その 評判になったか、相馬のほうから 仙台のほうから 来て、わたしの知ってる分野 保母さんとか 相馬の同級生なんかもね、あのほら イヤホン、あの 何てゆうの、あの ジオラマで お話が あるでしょ。「あら こらっ アイちゃんの話だ」って言って。んー。それでね、相馬のほうでも 民話に対して ちょこちょこ あのう あれになったし。で、山元町は それか

⁵ ざっと昔 1997 年の山元町歴史民俗資料館企画展「むかしむかしざっと昔」のこと。

⁶ 民話の会 やまもと民話の会。企画展に参加した人たちで、企画展の翌年の 1998 年 5 月に発足。

ら ずっと 民話 やってるんです。

わたしは民話に育てられた

S：で、わたし なぜね、民話は この 命だかつて 言う^ゆとね、わたしが民話に育てられたんだもの。母の民話はね、あの 父親が公務員だったもんだがら、母一人で 蚕から 百姓やったでしょ。で、藁仕事とかも あるでしょ。あのう 蚕 するたって、縄もじり（縄をなうこと）から 始まるんだがらね。藁の仕事もあるし、いろんなものがそのう あるのね。あっ、例えば 縫い物も あるの。布団 縫い 縫ったりね。そういうとき、母一人で やるもんだからね、姉は ほの頃、もう そろそろ 嫁に行くつうんでね、いなかったし。兄貴は 兵隊に行ってるし、すぐ 上の兄は あの 馬^{うま}のね 飼^{かい}葉^{いば}かせ、ねっ。飼^{かい}葉^{いば}切りだの おー そういうなの 仕事 手伝わなきゃないし（手伝わなきゃならないし）。で、母とわたしが 女なのね。そうすると、すべて 母の手^て子^こ（手助け、助手）を やったわけ。縫い物するときは 針 通したり、真綿 ひぐときは そのとおり。あと そっち持ってて、ねっ。あと 百姓するたって。

で ねえ、あのう んーと 家の母はね、割と いい家に 生まれたんだけどもね、継母で育ったもんだから、あの 感情がね、うんーと こう こもってる人だったのね。それで その、うちの母が あんなに 昔ばなし 語ったのは 同じきょうだいでも姉さまが いるんだけど、この姉さんは そちこち 友だちと 遊んでばい歩くのね。うちの母は 家にいて、手間^{てま}取り（手間賃で働く人）に 来てる人たちと、いっしょに 一つも なんてゆうか、大人のそばに いたんだね。で、内気だったそうです。そして、ハナイ⁷ってゆう名前なもんだから、ハナエ⁸かつて、帰って来るときは、ちゃんと おやつも ねっ、 さつま芋なり じゃが芋なり、えー おにぎりなり かた餅⁸なりの、ねっ、ちゃんと 待っててくれたって。姉は 帰って来なかったって。で、その 働きに 来てる人たちが、わたし、今 思うのにね、^{ほうぼう}方々から 来てたんだね。手間取りで 来てる人もいるけども、うちの母の 新地城⁹の 大昔の お城、城址 城址ってゆうかね、ワタリ家の 出先の マツヅカ城¹⁰ってゆうところの 娘。ずーっと 元をただせばね。けども ほら、時代が 何年も 過ぎてるから、うちの母、育つとぎなんかは、ふつうに みんなで 育ったんだけども。んで ただ 土地がね、母の家で 今 新地城⁹ってゆうのは そこにあるんだけども、新地城の周りの あのう 土地の半分以上は、やっぱり 母の実家のものだし、あと そのう お城の あと 別なほうにも、さっき あ

⁷ ハナイ はなえ。庄司さんの母親の名前。

⁸ かた餅 『茨城方言民俗語辞典』には、「カダモジ」の見出しで、「餅を小さく刻んで乾燥したもの。ごまやのりをいれたりする。一年間のおやつになる。」とある。

⁹ 新地城 福島県相馬郡新地町にあった戦国時代の山城。相馬氏によって築かれた。この後の話に出てくる「ワタリ家」と「マツヅカ城」については未確認。

った マツヅカ屋敷という屋敷で、母の あのう あれが 家の 跡が 残ってる。で、でも 母は そうゆうこと 言^ゆわな^なが^がった。あとで Aさんだのの 本、わたし 出す^だだけ^けっとも、あと えーと そのときの その えーとー まあ 十五^{ろく}～六年前ね。教育長さんだった方たちが、わたしに その マツヅカの^{ろく}ことを 語^{かた}ってくれたんです。母は 語^{かた}んな^なかった。でも、やっぱり 母のお話を 聞くとね、あのう 新地の話だけじゃないんですね。相馬の話だけじゃないんですね。だから、あのう あれえ これねえ、わたしも みやぎ民話の会に 入ってからね、あのう 「猿の嫁^{よめ}ご」という お話を したときに、三番目の娘がね、うちの母は 「おふみ」^ゆって 言^いった^たんですね。三番目の娘だけ 名^な前^{まい}があ^あったの。ん。で、誰の話 聞いても、みやぎ民話の会でね、誰の話 聞いても、三番目の娘で 名^な前^{まい}は 言^いわ^わな^なが^がったの。でも、わたしが 語るときは 「三番目の娘は おフミという名前の 娘^{むすめ}だった^たそう^うだ」^ゆって。それが 猿の嫁^{よめ}ご^ごんなるわけね。で、わたしは あのう えーと 気付^きかな^なか^かった^たん^んだ^だけ^けん^んども、この あの 震災のあと、やっ わたしら 民話の会 みんなで、あの 遠野とも 関係^{かん}して^てた^たも^もん^んだ^だから、(K はいはい) 遠野に 行^いって 『聴^き耳^{みみ}草^{くさ}紙^し』^{ききみみぞうし}10を 買^かっ^って^てき^きた^たん^んです。(K はいはい) (Y はいはい) こんなね、『聴^き耳^{みみ}草^{くさ}紙^し』^{ききみみぞうし}ってゆうのね。あのう [佐々木]喜^き善^{ぜん}さんのね。そしたら、喜^き善^{ぜん}さんの その 「猿の嫁^{よめ}ご」の話の中に、「三番目の娘は おフミ^ゆこ^こと^と言^いった^た」、ある^ある^るん^んです^すね。んーだから そ^そん^んで、わたしは 母の話がね、岩手のほうから 聞^きいた話^わだ^だった^たん^んで^でない^いかな^なあ^あと 思^{おも}う^うん^んです^すね。で、いろいろと、ん あと ほら わらべ歌やなんかでね、あの「♪仙^{せん}台^{だい}の 仙^{せん}台^{だい}の」なんてゆう、あれが ある^ある^るん^んです。わたしなんか 半^{はん}分^{ぶん} 忘^われ^れて、94 歳になる 姉^{あね}にね、えー あの こ^こない^いだ^だ (この間) みやぎ民話の会の人たちと いっ^いっ^っし^しょ^ょに、姉^{あね}のほう^{ほう}が 上^う手^てだ^だが^がら^らっ^って 言^いっ^って。で、94 歳、ちゃんと 語^{かた}れる^るん^んです^すよ。姉^{あね}も 民話 聞^きいて^てる^るから^らね。姉^{あね}とわたし が う^うん^んと 聞^きいて^てる^るの^のね。でも、わたしが 一^{いち}番^{ばん} 聞^きいて^てる^るの^の。でも、わたしは そんな わらべ歌^{わらべうた}のよう^{よう}な^なのは、あの 時^{とき}々^々 抜^ぬけ^けて^てる^るの^のね。で、あの みやぎ民話の会の人たちと その 姉^{あね}の家^{いえ}を 訪^まね^ねて^て行^いった^たの、相馬^{さうま}なん^んです。そしたら、わたしより 上^う手^てに ちゃん^{ちゃん}と あの 最^{さい}後^ごま^まで えー 語^{かた}った^たし、そのう 意^い味^みも ちゃん^{ちゃん}と 語^{かた}る^るの^のね。で、だから、あのう なんてゆうの、この 民話^{みわ}っ^って^てゆう^うのは^はね、今^{いま}でも、「あ^あっ、これは一 母^{はは}の話^わが 今^{いま}、わたしに こうゆうふうな 行^い動^{どう}を^をさ^させて^てる^るんだ^だなあ」^ゆってゆうこと^{こと}なの^のね。で、わたしねえ 二^に年^{ねん}か三^{さん}年^{ねん}前^{ぜん}にねえ 仙^{せん}台^{だい}の メ^めデ^でィ^いア^あテ^てィ^いク^く11^きってゆうところ^{ところ}で、あの 民話^{みわ}を^を語^{かた}る^る人^{ひと}の話^わを 二^に日^{にち}間^{かん}く^くらい、こう 全^{ぜん}部^ぶ 画^え像^{ざう}に^にした^{した}ん^んです、こ^こゆ^ゆの 全^{ぜん}部^ぶ。そ^そし^して、わたしも 二^に日^{にち}間^{かん}、あのう おー 全^{ぜん}部^ぶ 昔^{むかし}ば^ばなし^{なし}から 何^{なに}から 雑^{ざつ}談^{たん}から 全^{ぜん}部^ぶ 入^いった^たの、二^に日^{にち}間^{かん} あのう そ^そこ^この メ^めデ^でィ^いア^あテ^てィ^いク^くにも 入^いっ^って^てつ^つと^とき、わたし その^{その}ね^え、「草^{くさ}む^むし^しり^り女^{にょ}」から、話^わした^{した}ん^んです。わたし

10 『聴^き耳^{みみ}草^{くさ}紙^し』 昔話集。岩手県遠野出身の学者・資料収集家の佐々木喜善著。

11 せんだいメディアテイク 仙台市青葉区にある複合文化施設。仙台市教育委員会の管轄。図書館、ギャラリー、イベントスペースなどのほか、スタジオも備えている。

の母はねえ、「おらは 草むしり^{おなご}女子だ」って^ゆ言ってね。例えば わたしが 嫁に来て、こっちの家が 草 ^{いい}生いてっと、「ほら 草むしり、女子なんだから」 シャディコ（舎弟子、弟）の家、庭 草が ^は生いてっと、姉の家で 草 生いてっとねえ、「おらあ 草むしり女子だ」って、子どもと^ゆぎから 言^{ひんぼうくさ}って、「貧乏草なんてゆうのは、庭さ ^は生やすんでねえど」って、貧乏草なんか、ねっ。あそこの屋根、かやぶき屋根の ぼっこれたの（壊れたの） 見てね、「あーあ あれもね、貧乏草、おつきくな^はったのだどー」って。ねっ、だからー あの 庭は きれーにしておかなくてないって（きれいにしておかなくてはならないって）。だから、畑も 草、むしたし。で、今 わたしが 草むしり女。だからねえ、やっぱり このう なんてゆうか、んーん わたし自身がね、こう母の そうゆうふうな あの セゴイ¹²に、セゴイでね、聞こえてく^はつから。やっぱり あっ こうゆ^はとぎは あーの なんてゆの、「我慢しなきゃない（我慢しなきゃならない）」とか、「こうゆうときは あの 手え 出して 助けなくてない（助けなくてはならない）」とか、ねっ。いろんな その 自分の人生を、ねっ、「ここは 我慢しなくてない（我慢しなくてはならない）」とか、夫婦の間だって 我慢しなきゃないことがあるとか、そうゆうふうなことの お蔭で、わたし 今 あるんだなあって 思うんですね。だから、やっぱり こう 子どものとき、絵本で 見た 話も いいかもしれないけども、じつくりと 親とかが 聞かせた 話ってゆうのは、あの 心に残って、それこそ あのうその都度、生かされてくるんでないかなあと 思う。

神様が見てなさる

S：や、学生時代のときだって 民話のことなんか、誰も しゃべったことないけども、やっぱり、自分は いつも こう、「あっ、あの場面だなあ」とか、ねっ、「この場面だなあ」とか、そうゆうふう^いに思いながら 暮して来たってゆうのは、あると思う。だから、何も あのう ^い偉くなるのだけが 立派ではない^{ひとこと}んだし、よく うちの母の口癖が、「神様が 見てなさるよ」って。その一言^{ひとこと}なの。エーンなんて 泣いてって、「だれだれちゃんが いじわるした」なんて^ゆ言ったら、「ああ そうか」って。「神様が 見てなさるんだ」って。だから、どんな 子どもたちの 喧嘩やなんかでも、わたしのほうが 立派だった^はつうことはない。相手が すっかけて¹³きたときだって、それに なんてゆうか、抵抗して、わたしなんか あることないこと、やっぱり こう ^{くちけんか}口喧嘩やなんかのとき

¹² セゴイ 背中^はにかけられる励まし、応援の声のことか。『相馬方言考』には、「セゴエカケル（小句）」の見出しで、「背声かける意。励ましの声をかける。激励する。バックアップする。」とある。『高平方言集』には、「セゴエカケル【加勢する】白組にセゴエカゲで応援した」とある。

¹³ すっかけて つっかかって、（喧嘩などを）ふっかけて、の意か。『福島方言辞典』には、「スッカケル」の見出しで、「からかふ、戯れる」とある。

なんかねえ、やっぱり こう 負けてらんないってゆうとき あって、あとで、ふーって 反省したってゆうかね。だから、やっぱり 人生の中で、あのう 母の 語ったこととか が、あー いつも こう 生きてきたんだなあと思うから、わたしは 民話ってゆうのは 命を育ててるもんだなあって、^{はぐく}育んだもんだなあってゆうふうになあ、あのう いつも 思うんですね。

民話やわらべ歌はその家のもの

S：と、わらべ歌とかなんかもね、全然 みんな、あのう、例えば、わたしが いっしょに育った 隣の友だちだって、こうゆう わらべ歌は 知らない。だから、昔話とか わらべ歌は この家のものなんだね。で、今度 嫁に行ったら、また その家のものなのね。ただ その 共通して 遊んだ わらべ歌は、「花一^{いちもんめ}匁」¹⁴とか、あのう、「今年の牡丹」¹⁵とか、「あぶくたった 煮え立った」¹⁶とか、「お茶を飲みに来てください」¹⁷とか、そうゆうのは、あと 縄跳びとか ゴムまりだ 遊びとかは、みんな 出し切るね。だから、「花一匁」知らない人は 誰もいない。「今年の牡丹」知らない人は、遊んだ仲間には 誰もいないはずですよ。お手玉やなんかも、あのう ねっ、縄跳びやなんかも、あの 子どもの 遊びの場面では、みんな 出し合ったのね。だから、わたしら の 知らないのをね、あのう 絵描き歌だのね、わたしら 母に 絵描き歌なんかね、教えらったこと ないのね。絵描き歌なんて 知らないの。ただ、友だちね、学校帰りの あの 道路っぱたで、「くーちゃん しーちゃん びつとるてるちゃん パーマネントの ぐーじゃぐじゃ¹⁸」と、ねっ。そうゆうふうな 遊びだの やるんですよ。そうすると、わたしも いっしょにやる。で、わたしも また 知ってるやつを こう やったりして、それが 多少 [わらべ歌の] 交流したのね。

まあ あのう 新潟とか あっちのほうは、その 福島辺りも、大人が こう 寄っ

¹⁴花一匁 子取り遊び歌。二組に分かれ、「勝ってうれしい花一匁」「負けてくやしい花一匁」などと歌いながら、両方から一人ずつ出てじゃんけんをし、勝った組が負けた組の子を取る遊び。(『大辞泉』)

¹⁵今年の牡丹 子どもの遊び歌。「今年の牡丹はよい牡丹 お耳をからげてスッポンポンもひとつおまけにスッポンポン」などと歌い、子どもと鬼の会話の形のやり取りをしたあとで鬼ごっこのような遊びになる。

¹⁶あぶくたった煮え立った 子どもの遊び歌。「あぶくたった 煮え立った 煮えたかどうだか 食べてみよう」などと歌い、煮えたかどうかのやり取りのあとで鬼ごっこのような遊びになる。

¹⁷お茶を飲みに来てください わらべ歌。「お茶を飲みに来てください はい、こんにちは いろいろお世話になりました はい、さようなら」と向かい合って二人で歌いながら、あいさつのやり取りをしながら遊ぶ。

¹⁸くーちゃん…ぐーじゃぐじゃ 絵描き歌。歌にしたがって絵を描いていくと、パーマネントをかけた女性の顔になる。

て、あの たばこのし¹⁹しながらとか、農作業しながら、それから わざわざ みんな 集まって、百物語をやったってゆう お話を、よく 聞くでしょ。そうゆうふうな あの 習慣でゆうのは、ゆとりのある人たちの あのう やり方で、相馬は ^{はだら}働 きっぱなしで みんな 貧乏だから、みんな 集まったときに そうゆうふうな わらべ歌とか、んー 百物語のようなお話で この 語りあうってゆう、もう 働きずくめが 相馬だったんでないかなあと 思うのね。まあ そう そうゆうふうに 思うと、だから、その 地域性ってのは わかるんでないかなあっと わたしは 思ってます。

まず、わらべ歌も そのう 昔ばなしも 家庭のものだったし、で、ちょっと 外に出て 集団の遊びのことになると、みんな 出し合ったってゆうふにね。手まり歌だって お手玉歌だって 限りなくあるんだから。こないだねえ、あの 新地の人に頼まれて、縄跳び歌。だ ^{じゅう}十くらい あったね。ん。縄跳び歌。たーだ 回して 縄跳びするんじゃないかって、全部 歌。

(中略)

お手玉歌だって いろいろ。でね、二日ばかり ^{まい}前に ここで あれやったんですね。でね、うちの娘が だいたい 企画してくれるんだよ、今ね。みんな こう 高齢だから、んー。そして、まず いろいろ 遊んだんだけど、んと わたしら年代の人もあるし、10代ぐらいまでの 差だっちゃ。そしたらね、おはじき、こんなことしてるんだよ。おはじき あんまり やったことない。

K：ないでしょう。今、んー 少ないと思います。

S：あのう そのう 民話の会の中でも [やったことがない人がいる]。ほして、お手玉だって、ねえ、あんまり やれない。わたしらは 四つ玉くらいまでは やったんです。(Y そうですか) あと 今、三つと 二つは やれっけども、あの こう くるくるっと 回すようなのは、もう やれない。でも、お手玉も みんなで やって、子どもも 大人も。まあ だから、民話の会の人たちね、遊んだんだね。お客さんも 少しきや (少ししか) 来ないがら、二~三人ぐらいだがらね。あとは あのう 子どもら ^も来て 遊んだけども、もう マリつきだって トントントントンってゆうんでなくて、ポーンポーンなんて こんなんで 遊んで。

あの、10代 違うと 遊びが 全く違ったし、その 地域性やなんかで あのう 遊んだ 遊ばないの差が あるんだね。で、お手玉だって おしてんおしてん (こうしてこうして?) やれないんだよ。10代 違う人は。

K：そうでしょうねえ。

T：2個でも ちゃんと できません。(以下、Tのここでの発話は省略)

K：学校に みんな 持ってって、休み時間に やったり しましたね。

S：そうですね。だから、何て言うの、わたしら時代は、もう すきなく、ちょっとの遊

¹⁹ たばこのし 『茨城方言民俗語辞典』には、「タバゴノシ」の見出しで、「【煙草伸し】タバコの葉をのばす作業。」とある。

びでも、あのう お手玉は 禁止ね、学校で。でも、みんな ランドセルの 底さ 二つつぐらい 持ってぐの（持って行くの）。そう、2時間目の休みは 10分だか 長いね。先生、職員室に 行くべ。ぱーっと こうゆうに 集まんだわ。そうして、みんな で そうした そうした、そしたらりって やって。「来たー」って、「先生 来たー」つうと、みんな 自分のお手玉 すらって（さあっと？、さらって？）。

おはじきでも なんでもね。おはじきはねえ、あの 学校に 持って行っては、あの う 女の子の それこそ 真剣勝負なんだよね。お金 かける[の]と おんなじ。男の子は メンコとか ビー玉。あれは ねっ、もう 負けたら なくなるのね。女の子の あのう お遊びで、そうゆうふうに まず 賭け事ってゆうのは、おはじきだけなの。だから、とー わたし 今 車にも あの あれしてっけど、こう 袋さ 持ってて、そして 誘われるど、「行くべかなあ」。あんまり 学校に 持ってがないんだがらね。「行くべかなあ、あの 人 上手だがらなあ。全部 取られちゃうもんなあ」って 思うのね。でも、 まず 行くのね。そして、十個だら十個、二十個だら二十個、みんな で 出して。で、負けたら 空っぽで 帰んなきゃないだから（帰んなきゃならないのだから）。でも、やったよお。

だがら、母の話も 聞かなきゃないしね（聞かなきゃならないしね）、あのう お炊事も 手伝わなきゃないしね（手伝わなきゃないしね）、遊ぶこともしなきゃないし（遊ぶこともしなきゃないし）、勉強もしなきゃないしね（勉強もしなきゃないしね）。よく それこそ ^{じゅうにぶん} 十二分の 動き、したんだと思うの、わたしら年代の子どもは。ただ、[じっとして] いらんないんだもの。お風呂焚きなんかね、裏一のほうに あるねえ、あの 木小屋がら 木一 たんがえて²⁰くんだよお。あのう 松っ葉だの ユーゴーだの ねえ。そうして 風呂 焚かなくちゃないの（焚かなくちゃならないの）。毎日の 飼葉^{かいば}か、あのね 馬に 飼葉^か 喰せなきゃないし（喰わせなきゃないし）。ねえ。

T：馬が いたんですね。

S：ええ、だからねえ、ただね あの、んーと わたしの姉はね、んーと 割と 財産家に 嫁に行ったのね。^{ななちようぶ} 七町歩²¹から あるって 言われて、早ーくに 学校 卒業すると 嫁に行ったんです、んー。でも、ほの [義理の] 兄貴ってゆう あの 旦那家は、あの 師範学校に 行ってたんだけど、あのう 戦争でやめだがら、戦争が 激しくなったから、あと 家のことも心配で、あのう 師範学校、途中で 帰ってきて、うちの姉と ほら 夫婦になるわけね。んー、そして、いろいろ しゃべると、うちの姉が 七回も 村長したってゆう 家だからね、いや まず いろいろ こう 建物 あったね。茅葺だよ、みんな。茅葺の ったの。でも 生活の面では、あのう ほの 兄貴

²⁰ たんがいて 持って。かかえて。『福島県方言辞典』には、「タンガク 【動】持つ。○たんがいて見ろ重いから」とある。

²¹ 七町歩 「町歩」は、田畑や山林などの面積の単位。1町は10段で、約100アール＝約1ヘクタール。「七町歩」なので、約7ヘクタールになる。

が 言うには、「貧乏した わたしらは、最高だ」って言うの。ってゆうのはね、例えば、わたしの母はね、「娘は、井戸の 遠いところには 嫁に行きたくない」って言うってたの。わたしのうちでは こう 山があって、この 中腹だったの。んだから、井戸が 深い。ものすごく 深い。で、下は ずーっと 畑や 家や 里や、あの ねっ、あるのね。だから、カラカラカラカラカラカラカラってゆう つるべ、あの なんてゆうの、あれで 水 汲むでしょ。と、うちの母 早起ぎだったから、「ハナイさん、早いね」って。もう 水 汲むの、昔の人は かたかったよ。朝 起きたら 必ず、火一 焚く前に、顔一 洗って、手一 洗って、神様 拜んでから、囲炉裏に来て 火一 焚いたんだから。んで、「ハナエさん、早いねえ」って、みんなに ほめられてたし。終戦のときは、あたし 旧姓 吉野つつんだけど。あのう、「アメリカ兵 はあ、太平洋から はあ 上がってくっから、そしたら 女子なんて はあ、もう ほれこそ 手籠めにされで、年寄りなんか 殺されるんだがら。さーて、吉野さんの 井戸さ、みんな ドボンドボンと入れば、間違いなく はあ、一思いに ねっ、死ぬがら。んだから、吉野さんの 井戸さ 入っぺ」って、部落の人は みんな 言ってくれた。で、うちの井戸は、あのう 遠いし、こっちのほうにあるし、でしょう。んで、下のほうの 家の井戸は、そんなに あのう 同じながら 深くなかったがら、母は 井戸の近いどこさ 嫁にくれたいつったの。

お正月のわらべ歌

S：お正月をね 待って 歌った歌だね。

♪お正月 どこまで 来た くりくり山の 陰まで 来た 銭こ あげたはんた

ってゆってね、そうすと、山のほう 眺めながら、ねっ。

♪お正月 どこまで来た くりくり山の 陰まで 来た 銭こ あげたはんた

K：「あげたはんた」って どういう？

S：はずだ。

K：あ、あー、あげたはずだってこと。

♪お正月 山から来い 山の裏白^{うらじろ}²² 持って来い

お正月 里から来い お餅をつきつき とんで来い

お正月 海から来い 宝のお船に 乗って来い

²² 裏白 シダの一種。表は濃い緑だが、裏は白い。縁起物の植物として、正月の鏡餅や松飾りに使う。

あと、お正月になって、歌った歌ね。

♪お正月は ^{しょうがつあ} いいもんだ
雪のような ^{きま} 飯 食って
あぶらのような 酒 飲んで
^こ 木っばのような 餅 食って
お正月は ^{しょうがつあ} いいもんだ

って、そんなふうですねえ。

K：これは、あの 聞いたこと あります。

S：あ、そうですか。

T：木っばのような、木っばのような 餅って、どんな餅ですか。

K：木っば、木の切れ端ってゆうか、木っば。木っば。

S：木の 端。

T：それは わかるんですけども、[餅なので] もっと こう どしっとするもの 食べるのかなと 思ったら。

S：んーん、昔の 切り餅だから。

Y：うす うすーい。

T：切り餅にした やつのこと。

K：だと思えますね、たぶん。

T：じゃ、それ 焼いて食べたってことですかね。

S：焼いたんですー。じゃ、あと 餅の数え歌²³ね。これは わたしの お得意なんだから。

♪ひとつ ^{ひぼし} 火鉢で 焼いた餅
ふたつ ふくれた ふくれ餅
みつつ 見だくね かすぼ餅
よつつ よごれた 小豆餅
いつつ 隠居の かぶれ餅
むつつ 婿殿 祝儀餅
ななつ 七草 雑煮餅

²³ 餅の数え歌 日本各地で歌われてきたわらべ歌で、地域によって歌詞が異なる。『わらべうた』（岩波文庫）には、福島県会津地方の歌が載っている。題目「一つ火鉢で」、歌詞「一つ火鉢で焼いた餅 二つふくふく福手餅 三つ見事な飾り餅 四つよごれた小豆餅 五つ隠居のかぶれ餅 六つむつまじ夫婦餅 七つななくさ雑煮餅 八つ野郎子に呉れる餅 九つ小僧にこぼし餅 十で殿様に上げる餅」とある。また、注記で兵庫県但馬地方や東京都八王子、新潟県新津市の類歌も示されている。

やっつ やさしい しんこ餅
ここのつ コンコン かせどり餅
とうで とうとう ごぜん餅

餅も こうして ごぜん餅というのは、お殿様が 食べる餅のことだどおって、言われだねえ。

あと お正月の替歌なんか こんなん 何番までも あったけどね。

♪年の初めの ためしとて 尾張名古屋は 大地震 松竹^{まつたけ} ひっくり返って 大騒ぎ
いよいよ今日こそ 建て直し

老人施設訪問での笑いの話

S：[老人施設に] 昔話に 行ぐんだけっとも、やっぱり 昔の歌 1曲くらいね、「人生の並木道」のようなのね、しとつとか、あとは 昔の そのう あのう わらべ歌 しとつとかね、やるでしょ。

で、こないだも、あのう おばあちゃんたちがら じいちゃん、みんなでね、カレーライス 作って 食べて帰っから、きょうはねえ、って。あのう あのう カレーライスの歌 作ったのね。で、「塩を 入れたら はい できあがり。はいっ、どうぞ 食べてください」つつたっけ、ひとりの ばんつあん、「なんだや、焦げつまったべ」{皆 笑}「水、入れねけ」って、言ったのね。いやあー、笑った 笑った。

Y：ほんとねえ。

S：んっ、ねっ。「♪ニンジン 玉ねぎ じゃが一芋、豚肉。鍋で 炒めて グッツグツ 煮ましよう。(Y そう、炒めて。そう、水 入れて) この次、コショウ カレールー それっから 味見して 塩を 入れたら はい できあがり。どうぞ」つつたっけ、「なんだ、焦げつまった。水 入れねけ」。

K：{笑} 確かに。

Y：ちゃんと 聞いているんですね。

S：ほーしたら、笑って、わたしも 笑ったしね、みんなも 大笑いなの。ほんで、どこさ 水 入れたらいいべと 思っよ。{皆 笑} だけどね、あの そうゆうふうな 民話だけじゃなくって、そうゆうふうな 笑いがね、すこぶる あの いいんでないかと。

K：んー、そうですねえ。

第四章 各地の方言談話

I 文字化の基準・記号の見方

方言談話の文字化の基準と使用する各種記号は、下記の二つの参考文献に基づく平成 24 年度文化庁委託事業「東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する調査研究事業（茨城県）」の文字化基準を若干修正したものである。

〈参考文献〉

- ・『伝える、励ます、学ぶ被災地方言会話集文字化の基準・記号の見方』（川越めぐみ氏、東北大学産学官連携研究員（作成時））
- ・『宮城県沿岸市町村談話資料作成マニュアル 東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する調査研究事業』

（１）文字化の概要

文字化は、上段に調査協力者（話し手）の方言の発話をカタカナで表記し、下段にその通語訳を漢字かなまじり表記で記した。発話は、基本的には下の例のように文節で分かち書きである。なお、調査員の発話については、概ね発音どおりとしたが、上下段に分けない漢字かなまじり表記を基本とし、漢字の発音が特定できない場合は漢字にルビを付した。方言形はカタカナ書きとした。

方言音声 → 上段、表音的カタカナ表記 共通語訳 → 下段、漢字かなまじり表記
--

例：ソー ソンデ ホーゲン デダノカシラ。 ← 上段 方言音声の文字化
そう それで 方言 [は] 出たのかしら。 ← 下段 上段に対する共通語訳

（２）発話者の表示

- ①発話の単位…原則として発話権が交替するまでを 1 発話とした。あいづち、発話権の交替のない短い発話は別に処理した。
- ②話者記号…話者、調査者などの話し手に A、B、C、D～のようにアルファベットで記号をつけ、発話の冒頭に示した。
- ③発話番号…一つの話者ごとに発話の通し番号を、1 発話の話者記号の前に入れた。

例：001A：～ 012B：～ 023C：～

（３）固有名詞

個人が特定できるような固有名詞、話者名及び一般の人名についてはアルファベットに置き換えた。

話者 → 「A」「B」などの話者記号を使用

会話中の個人名 → X＋数字を使用。 例：X 1 チャン、X 2 サント～

会話中の屋号 → Y＋数字を使用。

なお、歴史上の人物、有名人、話者の個人情報に関係しない会社名その他の固有名詞、地名についてはそのまま記載した。

(4) 文字表記の基準

【方言音声の文字化部分】（上段）

表音的カタカナ表記を用いた。音声の方言的特色（キの口蓋化、母音の無声化など）は、特に書き分けることはしていない。

長音：「ー」 例：ソーナンダ（×ソウナンダ）

助詞：「は」→「ワ」 例：アレワ ナンダガ

「を」→「オ」 例：コレオ モッテゲ

「へ」→「エ」 例：ガッコーエ イグ

鼻濁音：半濁点を使用 → ガ行鼻濁音…ガ、ギ、グ、ゲ、ゴ

入り渡り鼻音 → 上付き文字を使用…ンダ

中舌音：どちらかの音声の近いほうを採用した。

例：スに近いシ → 「シ」 / シに近いス → 「ス」

「ア」と「エ」の中間の音については「エァ」「アエ」という表記も許容した。

例：「ネァ（ない）」「ナエ（ない）」

四つ仮名：「ジ」「ズ」に統一した。（「ヂ」「ヅ」は使用していない）

例：ウジ（うち）、アイズ（あいつ）

【共通語訳部分】（下段）

意識はできるかぎり行わず、基本的に方言の直訳とし、漢字かなまじり表記を用いた。

ないと読みにくい助詞等は、適宜、[]でくくって補った。

ないと疑問文と判断しにくい場合のみ、適宜、「？」を補った。

感動詞や終助詞などにおいては、基本的に長音記号「ー」を使用した。

(5) 記号の見方

【方言文字化の部分】（上段）

。（句点）：ポーズがあり、意味的に1つのまとまりを持つ文の最後につけた。

、（読点）：基本的に息をついた箇所またはポーズのある箇所に付してある。

読みやすさを重視して付した部分もある。

（ ）：あいづち。発話権が移っていない時に話をさえぎったり、口を挟んだりした箇所。

例：ソーヤッテ ムガシワネー（B ンダネー） ヤッダンダー。

{ }：笑い声、咳払い、間などの非言語音。

例：{笑} {咳} {手を叩く音}

~~~~~：聞き取れない部分には波線を引いた。

例：オチャズケノ~~~~~

聞き取りが不十分な部分は、聞こえた音を記した箇所に波線を引いてある。

例：コエズカレデ

\_\_\_\_\_：発話が重なっている部分には、普通の下線を引いた。

あいづちは発話を（ ）に入れ、重なっている部分には下線を引いた。

例：モラッテクダサイ（A ソーダ）（B モラテー）

=====：発話が重なり、かつ聞き取れない部分には、二重下線を引いた。

例：アイズ=====（B ホンテ） オドゲデネーゴド

発話が重なって聞き取りが不十分な部分は該当箇所には二重下線を引いた。

例：アイズ キタナー (B ホンテ) オドゲデネーゴド

( ) : 注記。( )内の数字は注記番号。各談話の後に注記をまとめた。

地域特有の語や表現の意味用法を説明したり、談話に登場する主な人物、場所、屋号、船名などを説明した。その他、特に注意しておきたい音声の特徴などに使用したものもある。

例：ムガシワ サンザンサ<sup>(1)</sup> エッタゲンド

例：カーチャンノミセ<sup>(2)</sup>。

\*その他、1語であっても、音と音の間にポーズが入っている場合は、1字空けにした。

#### 【共通語訳部分】 (下段)

。(句点) /、(読点) / ? / ( ) / { } の記号の用い方は、上段に同じ。

×××× : 言い間違いや言いよどみなど、共通語訳ができない部分。

例：ム ム ムツカシー

× × 難しい

~~~~~ : 聞き取れず、共通語訳も不明な部分には波線を引いた。また、聞き取りが不十分な部分の共通語訳で、意味が特定できる部分は共通語訳を入れた。

例：ツナミ ~~~~~ ネクテ

津波 ~~~~~ なくて

_____ : 発話が重なっている部分には、方言の部分に準じて下線を引いた。

例 005 A : アー。

ああ。

006 B : ソレオ イレデ。

それを 入れて。

===== : 発話が重なっており、聞き取れない、または聞き取りが不十分である部分には、方言の部分に準じて二重下線を引いた。

例：ビョーギ ===== (B =====) シタンダ。

病気 ===== (B =====) したんだ。

[] : 方言音声には出てこないが、共通語訳の際に補った部分。

例 1 : ミカン ノセテ

みかん [を] 乗せて

例 2 : ヨメカ° ジッカニ カインノワ ジューコ° ンチダナンテ

嫁が 実家に 帰るのは [正月の] 15 日だなんて

Ⅱ 茨城県久慈郡大子町の方言談話

【1】お茶栽培の話

収録時間 3分41秒

話し手⁽¹⁾

| | | | |
|---|---|----------------|----------|
| A | 男 | 1938（昭和13）年生まれ | （収録時78歳） |
| B | 男 | 1936（昭和11）年生まれ | （収録時80歳） |
| C | 女 | （調査員） | |

001C：何を 作ってらっしゃるんですか。

002B：ソー タンボトー コンニャクトー オチャガ。 （C ヘえ）
んー 田んぼと 蒟蒻と お茶か。

003C：わたし あの お茶畑の上に こう プロペラが ついてんのは （B ソー） 暑い
ときに 風を やるんだと思ったら 寒いときなんです[ね。]

004B：ヤーヤー サ サ サムイ。 ボーソーファン テユー。 （C ええ）
ヤーヤー × × 寒い。 防霜ファン ていう。

005A：ソーソー ボーソーファンダネ。
そうそう 防霜ファンだね。

006B：カゼオー ウゴ ウゴガシテ シモガ オリナイヨーニスル
風を ×× 動かして 霜が 降りないようにする

007C：じゃ このところみたいに 寒いときは 夜のあいだ こう 動くんですか？

008B：ソー マッ
そう ××

009C：あれ 電気 電気 入れるん

010A：デンキデ アノー
電気で あのう

011B：デンキガ ハイッテッカラ。
電気が 入ってるから。

012A：センサーガ アッテー。
センサーが あって。

013C : あーあーあー。 ああ センサーで 温度が 下がると。 (B ソー)

014A : アノー オンドガ サガレバ ソノ オンドーデ (C ええ) マーリハジマルガラ。
あのう 温度が 下がれば その 温度で 回り始まるから。

015C : なるほど。

016B : ジブンデ セッ ンー ナンドッテ セッ ゴドニー アノー フツア ダイタイ
自分で ×× ンー 何度って ×× 5度に あのー ふつうは だいたい

ゴ オラワ ゴドニ シトツケッドモ。

× 俺は 5度に しておくけども。

017C : それは マイナスじゃない 5度に。

018B : ソーソー プラスゴド。

そうそう プラス5度。

019C : マイナスじゃない 5度だと 日中も 動いてるときって ある

020B : ヤー、 ンー ソーダネ。 タシカ ニツチュモ (C 寒いとき 5度ー 5度で)
いや、 ンー そうだね。 確かに 日中も

サムイ トキワ ンデモ アレワネー、 ダイタイ ス デンキ ガ イレンノガ
寒い 時は でも あれはねー、 だいたい × 電気 が 入れるのが

シガズーダガラ。 (C ああ。ええ) ソンダガラー ソンナニワー モ
4月だから。 そうだからー そんなには ×

ニツチューア ヒガ アタッ チョット アレスット (C ええ) モ
日中は 陽が ××× ちょっと あれすると もう

トマッチャーヨ。

止まっちゃうよ。

021C : 今の時期は やっぱり 夜ごとに ついてるんですか。

022B : イマワ キットク。

今は [スイッチを]切っておく。

023C : あ、今は いいんですか。

024B : ンー。

んー。

025C : あっ、 芽が出るころですね。

026B : メガ モー ン。 (C あーああ) メガ コー ノビダシタガラー (C えーえ)
芽が もう うん。 芽が こう 伸び出したから

スイッチオ イレンノ。
スイッチを 入れるの。

(中略)

027A : ゴガツノ アレダネー。 オ オレラワ イツダツケナー。 ゴガズ セック
5月の あれだねー。 × 俺らは いつだっけなあ。 5月 節句

オワッテガラダネ、 ココラデ イレンノネー。
終わってからだね、 この辺りで [スイッチを]入れるのねー。

028C : あ 節句 終わってからも。

029B : ンー？
んー？

030A : アノー デンゲン (C 霜) エレンノネー⁽²⁾。
あのう 電源 入れるのねー。

031C : 霜 降りるんですね。

032B : ンー。
うん。

033A : シ ン ゴガズダ⁽³⁾。 ハイヤ ジュー ジュ
× ん 5月だ。 ××× ××× ××

034B : ソンダガラ シガズノー ハツカゴロワ イレルヨ。
そうだから 四月の 二十日ごろは 入れるよ。

035A : イレッカナー。 (B ンー) ア オレワ マイトシ オセーendaゾ、
入れるかなー。 (B んー) × 俺は 毎年 遅いんだぞ、

イレンナ。
入れるのは。

036B : ンー。 シガズノー オジャカリガ、 ダイタイ シガツ、 オマツリ
んー。 四月の お茶刈りが、 だいたい 四月、 お祭り

アガッテ_____。(A ン一) ダカー シガツー トーカゼンゴニ オ オ
_____。(A ん一) だから 四月 十日前後に × ×

オジャッカジ ヤッカラ。 ダイタイ オジャオ カット スイッチ
お茶刈り やるから。 だいたい お茶を 刈ると スイッチ

イレルクレダガラー。
入れるくらいだから。

037C : お茶刈りってゆうのは

038B : _____オ イッペン ナラスノ。
_____を いっぺん 均すの。

039C : 新芽が きれえに あの一 出揃うように。

040B : ン ソロエル、 ン一 ソー。
ん 揃える、 うん そう。

041A : マー アダラシー メガ イッソニ デルヨーニ ヤンダッペ、 アレネ。
まあ 新しい 芽が いっしょに 出るように やるんだろう、 あれね。

042B : ン一。 ナー ヤッパリ イロイロー アッテーネ (A カブナラシダカンネ)
うん。 だから やっぱり いろいろ あってね (A 株均しだからね)

アノー、 ムガシワ ソ ソ アノ コー オーキク ノバシテテ フユ
あのう、 昔は × × あの こう 大きく 伸ばしてて 冬 [を]

コサシタンダケッド、 イマワ マ ダントーノセーモ アンダケッド、
越させただけけど、 今は まあ 暖冬のせいも あるんだけれど、

シズオカノ ホーニ ナラッチキテ アギノウジニ アルッテード スツ
静岡の ほうに 倣ってきて 秋のうちに ある程度 ××

(C えーえ) ン センター シッチャンダヨネ。 ソシテ ハルンナット
ん 剪定 しちゃうんだよね。 そして 春になると

ホントニ アノー フユノ ジキ カゼデ ユワレテ アノ ホ メガ アー ハガ
本当に あのう 冬の 時期 風で _____て あの × 芽が あー 葉が

フルイ ハガ コー モリアッガッタヨーナ オ {ペンを落とす音}(C ええ)
古い 葉が こう 盛り上がったような _____を

カルノニ、 カルーク アノー テキサイキッテ オジャ アノー ン一 オジャ
刈るのに、 軽く あのう 摘採機って お茶 あのう ン一 お茶 [を]

ツム ヤズネ。 ソレワ コー モ ン ヤッタラ ヤッパリ ハルワ ソイト
摘む やつね。 それは こう × ン やったら やっぱり 春は それと

オンナシヨーニ ソノー キッ~~~~ キカイ、 ムギガ アンダ、 キカイノ ハノ。
同じように そのう ××~~~~ 機械、 向きが あるんだ、 機械の 刃の。

(C えーえー) ソレー ガットガナイト (C ええ) アノー ギャグニ ナ
それを 刈っておかないと あのう 逆に ×

ヤットクト コンダー コッチガラ イッタゲ アノ ンデ ハガ タッテテ
やっておくと 今度は こっちから 行った~~~~ あの それで 刃が 立ってて

(C あーあ) カーツチャンダ。 ヤッパリ アキ カル ヤズト ギャグノ
変っちゃうんだ。 やっぱり 秋 [に] 刈る やつと 逆の

ハオ ツカッテ (C へえ) ソノー ホンチャオ トル ハド (C ええ)
刃を 使って そのう 本茶を 採る 刃と

オンナシ ムギノ ヤズデ アノー カッテンダイネ。 ソンジャガラ オジャ
同じ 向きの やつで あのう 刈ってるんだよね。 そうだから お茶

カル キカー ウエー ニ ニダイ。 ソイカラ テキサイキッテ マー ツム
刈る 機械 ~~~~~ × 2台。 それから 摘採機って まあ 摘む

ヤズノト サンダイワ ネット。
やつのと 3台は ないと。

043C : 3台も あるんですか？

044B : ンー、 サンダイ ツカーネット ダメナンダヨ。 {笑}
うん、 3台 使わないと だめなんだよ。 {笑}

045C : 摘採機。 「テキ」は これ

046B : テキサイキド ナラシキド アッテンダケッドネ、 ンー。
摘採機と 均し機と あるんだけどね、 うん。

《注》

- (1) 話し手のA・Bは、『平成 29(2017)年度 文化庁委託事業報告書 被災地方言で語る生活文化の再発見と継承 2 : 茨城と福島浜通りの方言を中心に』所収の天子町の方言談話の記号に合わせた。
- (2) エレンノネー エレンノネーのエは、イに近いエの音。
- (3) 奥のほうで、女性(D)が「五月、五月十日の頃じゃ…」という声が聞こえる。(省略)

【2】蒟蒻の話⁽¹⁾

収録時間 3分49秒

話し手

A 男 1938（昭和13）年生まれ （収録時78歳）
B 男 1936（昭和11）年生まれ （収録時80歳）
C 女 （調査員）

001A：ニシゴーリツツノナー。 （B ンー） ダカ ソコガ イチバン
西野内っていうのは。 （B うん） だから そこが 一番

サカンナンダ。 ムガシワー アスコモ ダイゴダッタンダヨネ。
[和紙が] 盛んなんだ。 昔は あそこも 太子だったんだよね。

002C：あっ そうなんですか。 今 常陸大宮

003A：アノ イマワ オーミヤ⁽²⁾ダゲド （C ええ） アノー （C [常陸] 大宮が
あの 今は [常陸] 大宮だけど あのう

広くなっちゃったん） カ カナサツツタッゲ アレネ。 （C そうそうそう）
× 金砂っていったたっけ あれね。

カナサ ノボリッカケノー アッコノ サワ、 ナンツンダッケ？ ムガシノ
金砂 上りかけの あそこの 沢、 何ていうんだっけ？ 昔の

ダイゴ。
太子。

004B：ン アノー ムロトノ
ん あのう 諸富野

005A：モロトノ⁽³⁾ カ、 モロトノダ モロ。
諸富野か 諸富野だ ××。

006B：モロトノムラツツーノガ ダイゴ ノ ンン ムラ。
諸富野村っていうのが 太子 の ×× 村。

007A：ホナイ⁽⁴⁾ ダイゴデワナイ、 ホナイゴーッテユッタカナ。
保内 [郷] 太子ではない、 保内郷っていったかな。

008B：ホナイゴ。
保内郷。

009A : ホナイゴーガ アノ ダイゴニ ナッタンダヨ。 ソノ モロトノ タケフガ
保内郷が あの 大子に なったんだよ。 その 諸富野 ~~~~~

010C : フナ？

011B : ホナイゴー。 (C ホナ?) 「ホ」 タモツ。
保内郷。 「ホ」 保つ。

012A : ニンベンニ タモツ、 ホーナイ。
人偏に 保つ、 保内。

013B : ホーナイ。 ウチ⁽⁵⁾ ホーナイ
保内。 「内」^{うち} 保内

014C : ホナイ？

015B : シー、 ウツ⁽⁶⁾、 シー ナイ ゴー
んー、 「内」^{うち}、 んー 「内」^{ない} 「郷」^{ごう}。

016A : シ ゴ ゴーワ、
ん ×

017C : 「ゴー」 は、

018B : サト。
サト (郷)。

019C : サト (郷) ですか？

020B : シ、 サト。
ん、 サト (郷)。

021C : コ こっち⁽⁷⁾ ですか。

022B : ダガラ
だから

023A : ホナイモーツノア イ イ イッチョーハチカソンケー？
保内郷っていうのは × × 一町八ヶ村かい？

024B : シ イチョーハチカソンガッペー。
ん 一町八ヶ村合併。

025 A : イッチョー キューカソンカナ？
一町 九ヶ村かな？

026 B : イッチョー ハチカソンガッペーダネ。
一町 八ヶ村合併だね。

027 A : チガー、 ホナ ホナイゴーツン ムカシワ。
違う、 ×× 保内郷っていう 昔は。

028 B : ア ムカシア ソーダネ。 モロトガ ハイッタカラ。
あ 昔は そうだね。 諸富野が 入ったから。

029 A : ムカシア ナンデモ ホナイゴータイカイダモンネ、 アノ ダイゴ デギル
昔は なんでも 保内郷大会だもんね、 あの 大子 [町が] できる
マエワ。 (C ヘえ)
前は。

030 B : ンダガラ イマデモ ダイゴニワ ホナイゴービョーインツナ アル。 (C ヘえ)
だから 今でも 大子には 保内郷病院というのが ある。

ホナイゴー メ メディカル クリニックツツノガー。
保内郷 × メディカル クリニックっていうのが。

031 A : アー アノ (C エー) コンナク⁽⁸⁾ ノ カミサマモ アノー
あー あの 菟蓐の 神様も あのう

ニシノウジ インダヨ、 アレネー、 ニシノウジノ。 (B ン)
西野内 [に] いるんだよ、 あれねー、 西野内の。 (B ン)

ナンツッタッケ、 アレー。
なんていったけ、 あれー。

032 B : ソノ ムロトンノ (A アノ トーエモンカ) ナカジマトーエモンテ
その 諸富野の (A あの 藤右衛門か) 中島藤右衛門で

シトガ ケツキョク コンニャクノ アラゴ (A カミサマダ) アラコツツッテ、
人が 結局 菟蓐の 荒粉 (A 神様だ) 荒粉っていつて、

ササキ ソノー、 コンニャクノ ナマダマデ ホゾンガ キカナイッシヨ。
そのー、 菟蓐の 生玉で 保存が きかないでしょ。

(C ええ) ソンデ ソレオ キッテ カワガス。 クジー サシテ カワガス
sonde それを 切って 乾かす。 串に 刺して 乾かす

コドー アミダシタノガ ナカジマトーエモンッテユ (C んーん) シトナンダヨ。
ことを 編み出したのが 中島藤右衛門っていう 人なんだよ。

ソンデ ソレデガ テユー アノー コンニャクノ カミサマダッテユー。
それで それでが という あのう 蒟蒻の 神様だっていう。

ダイゴアタリモ ソーユー ジンジャ⁽⁹⁾ ガ デキタリシテ。 ソレワ ソノシトガ
大子辺りも そういう 神社が 出来たりして。 それは その人が

ケッキョク コンニャクノ ソノー ンー ア アラゴッテンダケド。 アラ
結局 蒟蒻の そのう んー × 荒粉っていうんだけど。 ××

アライ コナッテ カクンダガネ。 (C んー) ソノ ウー ハク ン タマタマ
荒い 粉って 書くんだがね。 その ×× ×× ン たまたま

ソノシト マ ハナシデ キーデンダケッド、 ソノ ハダケ イッテ
その人 ま 話しで 聞いてるんだけど、 その 畑 [に] 行って

クワーデ コーヤッテ アノ ヤッタ トキニ、 コンニャク⁽¹⁰⁾ ノ タマオ
鍬で こうやって あの やった ときに、 蒟蒻の 玉を

キズ キザン (C んー ええ) ソレオー ナンニジガ キタラ
傷 刻ん [で] それを 何日か 来たら

カターク (C えーえ) カワイチャッタ。 ダ、 コ コレ コー
固く 乾いちやった。 だ [から]、 × これ こう

スレバ ホゾンガ キクノガナッテ。 (C んー) ソノ ヤツオ コンダ
すれば 保存が 効くのかなって。 その やつを 今度は

クダイテ ユナニシタラー (C ええ) コンナクコガ デキタト ュー。
砕いて 粉にしたら 蒟蒻粉が できたと いう。

(C ええ) ソレデー ヤッパリ アノ (C へえ) コンニャグ ノ
それで やっぱり あの 蒟蒻 の

ナマダマナクテ アノ ホゾンホーホーガ カクリツサレタッテユンデー、 イヤマー
生玉でなくて あの 保存方法が 確立されたっていうので、 いやまあ

カミサマンナッチャッタんだネ。 ンデ ナガジマトーエモン
神様になっちゃったんだね。 それで 中島藤右衛門

033A : ホゾンモ ホダッペシ、 ナ コナニ スンノモ ソ ソレカラナンダッペネッ。
保存も そうだろうし、 × 粉に するのも × それからなんだろうねッ。

034B : ソー ソーダネ タブン。
んー そうだね 多分。

035C : 今 ^{こうば}工場なんかで 作ってんの、 みんな 粉で 作ってるんですよ。

036B : ソー。 (A ソーダヨネ) ゼンブ コナ。 ナマダマデ アースンノワ
そう。 (A そうだよね) 全部 粉。 生玉で あれするのは

ノーガデ ドガ {笑} ナカニワ アノ ケックー ミ ミドアダリノ シトー
農家で とか {笑} 中には あの 結構 × 水戸辺りの 人

コネーダグチ イッピー ゴセン ナンツツテ {物の音} サンジッキロ
この間 一俵 なんていって {物の音} 30キロ

モッテッタケッドモ、 ナマダマ。
持って行ったけど、 生玉。

037C : 生で 作ると おいしいですよ。 {B 笑} 刺身蒟蒻だとかー、 煮ても
おいしいし。

038A : ナンカ アレワー クーキガ ウンマク ハイッカラネー。 アノー アジモー
なんか あれは 空気が うまく 入るからねー。 あのう 味もー

ウンマク シミコムンダーネ。 (C ええ) {B 笑} ウッテル ヤズワー
うまく 浸み込むんだわね。 {B 笑} 売ってる やつは

コナデ ソシタラ セッカイナンダッペヨネッ、 (B ソー) アノー
粉で そしたら 石灰なんだろうよね、 (B んー) あのう

ギョーコザイモネ。 (B ソー)
凝固剤もね。 (B んー)

039C : あんまり こう ギューって なっちやい過ぎて おいしくないですよ。
(A アー) 売ってるのはね、 ツルツル ツルツルばかりで。 (B ン)

040A : マ クーキガ ナカイ ハイッテ (C ええ) シッ シミコマネーガラナ。
ま 空気が 中に 入って ×× 浸み込まないからな。

(C ええ)

《注》

- (1) 蒟蒻の話 蒟蒻は、大子町では和紙の材料になる楮畑の中に植えられる。楮畑は傾斜地が多く、その畑の土止めを兼ねて蒟蒻が栽培されてきたようである。それについては、『平成 29(2017)年度 文化庁委託事業報告書 被災地方言で語る生活文化の再発見と

継承2：茨城と福島浜通りの方言を中心に』所収の方言談話「蒟蒻の自然薯と楮畑」
(pp. 35-38)で報告した。その談話に続くのが、本談話である。

- (2) オーミヤ 常陸大宮市。茨城県では、「常陸大宮」のことを「大宮」と略すことが多い。
同様に、「常陸太田（市）」は「太田」と省略して言う。
- (3) モロトノ モロトノのモは、モとムの中間の音。
- (4) ホナイ ホナイのホは、ホとフの中間の音。すぐ後のホナイゴーのホも同様。
- (5) ウチ ウチのチは、チとツの中間の音。
- (6) ウツ ウツ（内）のツは、ツとチの中間の音。
- (7) こっち 「サト」の字が「里」でなく「郷」かを確認している。
- (8) コンナク コンナクのナは、ナとニャの中間の音。
- (9) ジンジャ 蒟蒻神社。大子町大子にある。中島藤右衛門を祀っている。
- (10) コンニャク コンニャクのニャは、ニャとナの中間の音。

【3】節分の行事の話

収録時間 3分17秒

話し手

A 男 1938（昭和13）年生まれ （収録時78歳）
B 男 1936（昭和11）年生まれ （収録時80歳）
C 女 （調査員）

001A：セズブン セズブンニワ Bチャンガ ウチモ ヒーラギゲ？
節分 節分には Bちゃんの 家も 柊かい？

002B：ヒーラ ヒラ ヒーラギア ツカーナカタヨ。 コゴンナカ
××× ×× 柊は 使わなかったよ。 ~~~~~

003A：コゴネー シンブンダノ テレビダー シーラギドガ （C ええ） ソー
ここねえ 新聞だの テレビでは 柊とか そう

ナッチャッテンダヨ。 ホントーワ マメノー トッ アノー ジクダトモンダ。
なっちゃっているんだよ。 本当は 豆の ×× あのう 軸だと思うんだ。

004B：イヤ チガー。
いや 違う。

005C：大豆の 豆 取った あの 殻。

006B：_____ ソレワ シン ソレワー （A ウジデ） ソレワー アノー セズブンニ
_____ それは ん それは （A 家で） それは あのう 節分に

ソノー ユワシノ アダマオ サスノワネ。 （A シー ソー） ソー ソレ。
そのう 鰯の 頭を 刺すのはね。 （A うん そう） そう それ。

ヒーラギ⁽¹⁾。 ダナクッテ ソノ ダイズノ カラナンダ。
柊。 でなくて その 大豆の 殻なんだ。

007A：ダカ ス スルヨ、 ンダカラ。 （B シー） シーラギワ ベズノトキダヨ、
だから × するよ、 だから。 （B うん） 柊は 別のときだよ、

ツカーノワ。 （B マ ツ） オレ ウジノホーデワ。
使うのは。 （B まあ ×） 俺 家のほうでは。

008B：ニニクドーフツツノガ アンダケット。
にんにく豆腐っていうのが あるんだけど。

009A : ダカー ソーユナ ミナーナ
だから そういうのは みんな

010B : ゴッチャンナッチャッテンナ。
ごっちゃになっちゃってんるな。

011A : ゴッチャンナッテ。
ごっちゃになッテ。

012B : ワガンナグナッテクルモノ。 ンー。
わからなくなッてくるもの。 うん。

(中略)

013C : で、 こう 一番 こう 優勢ってゆうか (A ンー) それが ぜ 全国
みーんな そうゆうものに なっちゃてるんですもんねえ。 (B ンー)

014A : ソダネ。
そうだね。

015C : テレビだとか 新聞とか そうゆうのに。

016A : ダカラ ソノ カミバナレガ オークナッカラ ワレワレモ ジシンガ
だから その が おおくなるから 我われも

オーインダヨ。
多いんだよ。

017B : ナ ダカラ エマ アノー デッ エホーマキナンツナー (C ええ)
× だから 今 あのう ×× 恵方巻きなんてのは

コノゴロノ ハナシデショ、 アレ。
この頃の 話でしょ、 あれ。

018C : あれ 西日本のもので。 {B 笑} だって あの お店が あれを 作ると、
売れますから。 私たちも あの ご飯 作んなくって いいから。

019B : {笑} アーンナノ ホント コノゴロ ハジメテ キータグレダモノネー。
{笑} あんなの ほんと この頃 はじめて 聞いたぐらいだものねえ。

020C : あれ ほんとは 関西とかの ものなので。

021B : アー 。
ああ 。

022A : マ ウ ウジデワ アノ ナン ナンニンカ アッチノホーモ ユーベガ。
まあ × 家では あの ×× 何人か タベか。

キノーモ サーイダケド。 シー ダイズノ カラー トッテデ ダイズノ カラー
昨日も ただけど。 うん 大豆の 殻を 取ってて 大豆の 殻は

(C ええ) ホードシ⁽²⁾ ノ アダマオ サシテー (C ええ ええ)
ホードシ (鯛) の 頭を 刺して

アレ イリグチー
あれ 入り口に

023C : やっぱ ホードシって ゆんですね。

024B : シー。
うん。

025A : イワシノ アタマドモ ユーンダトモーケドモ。 (C ええ) ホ
イワシの 頭とも 言うんだと思うけども。 ×

ホードシダナク ゴロテツク コー ヘンナ カッコーン ナルン。 (C ええ)
ホードシではなく こう 変な 格好に なるの。

026B : {笑} アノー ダイズオー マメノ シ アノ イダガ、
{笑} あのう 大豆を 豆の ん あの 枝か、

(C ええ) ソレデ コー イン ウ ウジナンカデワ ヤンダケッド。
それで こう ×× × 家なんかでは やるんだけれど。

ムカシッカラ ソーユ アレデ ヤ ュ アノー カラカラー
昔から そうゆう あれで × × あのう 殻から

027C : そうですね。 (B シー) ここ 豆は 取って 出てるんだけれども (A ン)
(B シー) あの あの 莢が くっついてる、 (B シー) (A ン) こ
こうゆうのですね。 (B ン) (A シー) で これに ホードシの 頭を
こう くっつけるわけですね。

028B : デモー アノ ホ ホードシノ アタマ ヤンノニワ、 ケッキョク ソー ダイタイ
でも あの × ホードシの 頭 やるのには、 結局 そう だいたい

イ イダオ キレーニ キッチマッタホーガ (C んー) マメノ
× 枝を きれいに 切ってしまったほうが 豆の

クギダケデ サスホガ ナインダケット。
茎だけで 刺すほか ないんだけれど。

029C : ほおどしは いくつ 刺すんですか。

030B : ヒトツダヨ。 アダマ ヒトツツ。
一つだよ。 頭 ひとつ。

031A : アダマ ヒトツツ サシテー (C ええ) イロイロ イッコズツト (C 入り口)
頭 一つ 刺して いろいろ 一個ずつ

シー。
うん。

032B : シー ナンカショガ。 ウジデワ イズズ⁽³⁾ グレ アッタナー。 ソドノ
うん 何か所か。 家では 5つぐらい [飾る所が]あったなあ。 外の

ナヤドガ (A シー ソダネ) ソノ ゲンカンドカ アドワ ウ
納屋とか (A うん そうだね) その 玄関とか あとは ×

ウジガミサマ⁽⁴⁾ イ モッテッタナー。 シー。
氏神様へ 持っていったなあ。 うん。

033A : ムガシワー ウマゴヤトガ ソーユノ ベズニ アッタガラ、 ミンナネ。
昔は 馬小屋とか そうゆうの 別に あったから、 みんなね。

(B ソー シー) ソーユ トコイ ヤッタダネーガナ。
(B そう そう) そうゆう ところへ やったんじゃないかな。

034B : クラノ ノギノ シダドカ。 (C んー)
蔵の 軒の 下とか。

035A : インデモ コ キョーノ シンブン、 オレ シンブン トットケバ ツッタ
でも × きょうの 新聞、 俺 新聞 取っておけば ~~~~~

ドケ ヤッチャッタッペ。⁽⁵⁾
ところへ やっちゃっただろう。

036B : ソレガ キョーノ シンブンダッペヨ。
それが 今日の 新聞だろうよ。

037A : キョーノダ、 (C ~~~~~) キノーノ キノーノ シンブン デテタノガ。
今日のだ。 昨日の 昨日の 新聞[に] 出たのか。

オレ ソコイ ヤッチャッタ
俺 どこに やっちゃった

038D : アノ ナニ マメマキノコト? (A シー) ダネ。
あの 何 豆まきのこと? (A うん) だね。

039A : ダカラー (D ソコラ オイタンダヨ) テレビトガ ソーユ ヤズガ
だから (D そこら[に] 置いたんだよ) テレビとか そういう やつが

ワルインダヨネ。 (B {笑} ワルイッテカ、 シー) イマノ ワルイッツアーカ
悪いんだよね。 (B {笑} 悪いってゆうか、 うん) 今の 悪いっていうか

ソノー
そのう

040C : そう その 土地土地で 伝わってきたのが なくなっちゃうんですね。
テレビとかで。

041B : シー ソソソ シー。
うん そうそうそう うん。

042C : 一斉に みんな こうだってゆうのが。

043B : シー ソー。
うん そう。

044A : ンダカラ アーナクナッチャーモンネ。 {B 笑} ホトントー⁽⁶⁾
だから なくなっちゃうもんね。 {B 笑} ほとんど

キョーアタリモ ソーユ ハナシ シテ、 コッチデワ ナニ ヤッテンノ。
今日あたりも そういう 話し して、 こっちでは 何 やってるの。

マメノ カラッツー シトワ ズーニンノウジ シトリグレガナ。
豆の 殻っていう 人は 10人のうち 1人ぐらいかな。

045B : アー ソーケ。
あーあ そうかい。

046A : アー。 (C あ 節分祭) ソレモ ソ
ああ。 それも そう

047C : 全 スーパーで 売ってんです、 今。 柊と 豆の殻が いっしょになってて。⁽⁷⁾

048B : アッ マメノ カラモ ウッテンノ?
あっ 豆の 殻も 売ってんの?

049A : ア
あ

050C : ん それが セットンなってるんです。

051B : ヘーエ。

ヘーえ。

052A : コレニ カイテアルヨ、 チャント ソノー、 イマワ コーナンダッテ。
そこに 書いてあるよ、 ちゃんと そのう、 今は こうなんだって。

053B : {笑} ア ソー。 {笑}
{笑} あ そう。 {笑}

《注》

- (1) ヒーラギ ヒーラギのヒは、ヒとシの中間の音。次のAの会話の中のシーラギのシも、同様にシとヒの中間の音。これ以降も同様。
- (2) ホードシ ほおざし。めざし。丸干しした鰯の頬（エラ）に藁などを刺したものの。目を通したものをメザシと言って、鰯の大きさで区別する場合もある。
- (3) イズズ イズズのズは摩擦音（[izuzɯ]）。
- (4) ウジガマサマ ウジガミサマのジは摩擦音（[ɯʑigamisama]）。
- (5) D（＝Aの妻）の受け答えらしい小声が聞こえる。ここではDの会話内容は省略した。
- (6) ホトントー 「トントーのトは清音（無声子音の音）。茨城方言では、ミチカイ（短い）、ニチカン（二時間）、ザプトン（座布団）など、語中のタ行・バ行子音の無声化が観察される。
- (7) 新聞を見ながらの会話。また、この辺りから会話末まで、新聞をめくる音が続く。

Ⅲ 茨城県茨城県かすみがうら市（旧千代田村）の方言談話

【1】方言の話

収録時間 4分22秒

話し手

A 女 1942（昭和17）年 （収録時74歳）
B 女 （調査員）

001A：ソンデ ソノ トーリ⁽¹⁾ ニ オ チョット イクトー （B ええ）
それで その 通りに [通り] を ちょっと 行くと

プールガ アンデスヨ。 ダカ マイニチノヨーニ ソコワ カヨッテンノ。
プールが あるんですよ。 だから 毎日のように そこは 通ってんの。

002B：えーえ、 車で？ いいですね。

003A：クルマデ。 {笑} ダッテ ソノ プールモ タノシーケド ミナーナト
車で。 {笑} だって その プールも 楽しいけど みんなと

オハナシスルノガ
お話しするのが

004B：それが 何よりですよねえ。

005A：ナニヨリ。 ア、 ソーイデ センサーモ シッテルデショーケド、 コナイダワ
なにより。 あ、 それで 先生も 知ってるでしょうけど、 この間は

ンー コノシトワ チョーシ ウマレナンダッテ。 ソイデー ソノー ホーゲンワ
んー この人は 銚子 生まれなんだって。 それで そのう 方言は

シッテルデショーケド、 アノー Xサンツッタカナ。 「Aサン イマ ハジメテ
知ってるでしょうけど、 あのう Xさんて言ったかな。 「Aさん 今 初めて

アタシ キータンダケドネ、 アノ チクラッポ⁽²⁾ ユッタッペッテ
あたし 聞いたんだけどね、 あの チクラッポ 言っただろうって

ユワレタンダケド」ッテ ユーガラ、 （B ええ） ダカラ 「コノヘンデ
言われたんだけど」って 言うから、 だから 「この辺で

チクラッポワ アンタ、 ダレモ ソンナノ シンネケレ オメー、
チクラッポは あんた、 誰も そんなの 知らなければ お前、

カスミガウラノ シトダネード」ナンテ {笑} ユッテ、 ソノシト スゴク モ
かすみがうらの 人じゃないぞ」なんて {笑} 言って、 その人 すごく ×

ハチ ハツミミデ (B ええ) スゴク タノシカッタミタイ。 チクラッポダカ、
×× 初耳で すごく 楽しかったみたい。 チクラッポだから、

ネー。 ウソ ツクトカ ソーユトキ ツカウンダヨー ツタノ。 チク
ねえ。 嘘 つくとか そういう時 使うんだよ と言ったの。 チク

ヌグ⁽³⁾ ッテ、
ヌグって、

006 B : って 言いますよね。

007 A : シー。 チク ヌグッテ ユーデショーヨ ツ。 ハジメテ キータッテ、 シ
うん。 チク ヌグって 言うでしょうよ という。 初めて 聞いたって、 ん

ヤッパリ トー アスコワー アノー シタチ⁽⁴⁾、 (B えーええ)
やっぱり ×× あそこは あのう 日立、

カンダツ⁽⁵⁾ ッテ シタチーガ (B あっ) アルカラ。
神立って 日立〔製作所〕が あるから。

008 B : 神立は いろんなところから 人 来てるみたいですねえ。

009 A : ソー ダガラ シ シタチノ シトガ ホトンドダガラ、 トーキョートガ イロンナ
そう だから × 日立の 人が ほとんどだから、 東京とか いろんな

シトガ イルノヨネ。 (B んー) ダガラ ソノ プールナンカモ シタ
人が いるのよね。 だから その プールなんかも ××

シタチライフ⁽⁶⁾ デ ヤッテルンダ。 (B んー) ダカ シタチカンケーノ
日立ライフで やってるんだ。 だから 日立関係の

シトワ、 ホラ カイヒモ ゴヒャクエン ヤスイトカネー、 (B ~~~~~)
人は、 ほら 会費も 500円 安いとかねえ、

シー。 チクヌクツツノガ スゴク (B ええ) ウレシカッタミタイ。
うん。 チクヌクっていうのが すごく うれしかったみたい。

{笑} ハジメテ キータンデ。 {笑} アト センセ (B はい) アノー
初めて 聞いたので。 {笑} あと 先生 あのう

ホラ、 ヨクー ドロドロノ ミゾエ クルマガ ハイッチャッターナンツーノ
ほら、 よく ドロドロの 溝へ 車が 入っちゃったなんていうの

(B ええ) オンノマル⁽⁷⁾ ナンテ ユーデショ。
オンノマルなんて 言うでしょう。

010B : あっ、 オンノマルは ハ わたしも 知らなかったです。

011A : ノマツチャッタ⁽⁸⁾ ナンテ、 ノマルネ。
ノマツチャッタなんて、 ノマルね。

012B : あっ、 ノマツチャウは わかります。

013A : ソンダケド ココラヘンデワ オンノマルッテ ユーノヨ。
そうだけど ここら辺では オンノマルって 言うのよ。

014B : へーえ ノマルじゃなくって。

015A : オンノマル。 オワ ツヨメノ チョーシダカナンダカ シラナイケド。
オンノマル。 オは 強めの 調子だかなんだか 知らないけど。

オンノマルッテ ユーノ。
オンノマルって 言うの。

016B : あっ、 群馬だったら ツッコマツチャッタとか。

017A : ア、 ツッコマツチャッタ、 アーア。
あ、 ツッコマツチャッタ、 あーあ。

018B : ^め言うかもしれないですねえ。

019A : アーソー。 コノヘンワ オンノマル。 (B へえ) 「オメー
ああそう。 この辺は オンノマル。 「お前

オンノマツチャッテヨー アソゴサ」 ナンテネー。 ユギノヒノ アシタ⁽⁹⁾
オンノマツチャッテヨー あそこに」 なんてねえ。 雪の日の 翌日

アスコサ、 (B ああ そうですね) ネット。 ヨーグヨグ⁽¹⁰⁾
あそこに、 ねっ。 ひどく

オンノマツチャッテ ヒドイメ ツイチャッタ⁽¹¹⁾ ヨトガ ネ。 (B んー)
埋まっちゃって ひどい思いをしたよとか ね。

ソーユ フーニ {笑}
そういう ふうに {笑}

020 B : 「ヒドイメ ツイチャッタ」ですか。

021 A : アー ソー。 ヒードイメ、 ヒードイメ ツイチャッタヨグライデダラ イーケド、
あー そう。 ヒドイメ、 ヒドイメ ツイチャッタヨぐらいでなら いいけど、

センセ、 ヒデーメ ツイチャッタヨッテ ユーネ。 「ヒデーメ」。
先生、 ヒデーメ ツイチャッタヨって 言うね。 「ヒデーメ」。

022 B : んーん。 あっ、 ヒデーメとは ちょっと 直接 関係ないんですけど、この辺りは
(A ソー) あの 動物のうしろに メ⁽¹²⁾を つけますか？

023 A : ア ツケマス。 シン カンメガ イテトカ、
あ つけます。 うん カンメ (蚊) が いてとか、

024 B : あっ やっぱ カンメですか。

025 A : シン カンメガ イタトガ、 ハエメガ イテトガネ。 (B ハエメ)
うん カンメが いたとか、 ハエメ (蠅) が いてとかね。

ヘビメトガネ。
ヘビメ (蛇) とかね。

026 B : あ、 ヘビメ。 (A ソー) ヘビメですか。

027 A : ヘビメモ ユー。
ヘビメも 言う。

028 B : ヘビメのことを ヘンメとは ゆわない。

029 A : ヘンメッテ ユー シトモ イル。 ソー。
ヘンメって 言う 人も いる。 うん。

030 B : ハエメのことを ヘーメとかは。

031 A : ヘーメモ ユー。 ソー。
ヘーメも 言う。 うん。

032 B : トンボとかも 言いますか。

033 A : トンボメワ ユワネーネ。 トンボワ、 アトワ メー ツカナクテモ。 メー
トンボメは 言わないね。 トンボは、 あとは メ [が] つかなくても。 メ

ツケルネ、 ナンデーモ メー ツケルノ。
つけるね、 なんでも メ [を] つけるの。

034 B : あの 蛙は どうですか。

035 A : アッ ケールメッテ ユー。 (B ケールメ) {笑} ソー。
あっ ケールメって 言う。 {笑} そう。

036 B : サカナメとかって 言いますか。

037 A : アア、 イーマス。
ああ、 言います。

038 B : その 魚を 種類ごとに、 あのう イワシメとか。

039 A : ン、 ソレモ イーマスヨ。
うん、 それも 言いますよ。

040 B : 言いますか。

041 A : ンー。
うん。

042 B : どのへんまで ^ゆ言うでしょうねえ。

043 A : ンー。 ケッコ イーマスヨ。
うん。 結構 言いますよ。

044 B : 鰯は どうですか。

045 A : アジメトワ ユワナイネ。 ンー。
アジメとは 言わないね。 うん。

046 B : 鯖は どうですか。

047 A : サバモ ユワナイ。 カツオナンカモ ユ オーキーモノワ ユワナイネ、 ソー
鯖も 言わない。 鰹なんかも × 大きいものは 言わないね、 そう

ユエバ。 ヤマ アッ ヤマメワ ヤマメダガンネ、 ンー。
言えば。 ×× あっ ヤマメは ヤマメだからね、 うん。

フナメナンカモ ユーネ。
フナメ (鮒) なんかも 言うね。

048 B : あっ、 フナメ。

049A：シー。
うん。

050B：鮎は どうですか。

051A：アユワ アット ココラヘンニ ヤッパリ (B いない) トッテナイモノワ
鮎は ××× ここら辺に やっぱり 獲ってないものは

イナイネ。 ホラ、 カスミガウラアタリデ、 (B ええ) ソーユ フナナンカ
いないね。 ほら、 霞ヶ浦辺りで、 そういう 鮎なんか

モラウト、 (B ええ) 「フナメ モラッテキタモンデ」ナンテー (B ああ)
貰うと、 「フナメ 貰ってきたもんで」なんて

ユーヨネ。
言うよね。

052B：どじょうは どうですか。

053A：ドジョーメワ ユー、 シー。 アタシラ トリ トッテタカラ。 {笑}
ドジョーメは 言う、 うん。 わたし等 ×× 獲ってたから。 {笑}

《注》

- (1) トーリ Aの自宅からかすみがうら市新治方面に通じる道路。
- (2) チクラッポ うそ。『茨城方言民俗語辞典』には、「うそ」を表す語として、チクラッポのほかにチク、チグ、チクヌギ、チクマンパチ、チクラグ、チクラッペの項目が見られる。
- (3) チク ヌグ うそをつく。
- (4) シタチ 日立製作所。
- (5) カンダツ 茨城県土浦市神立町。神立はかすみがうら市の南部に隣接する。JR 常磐線神立駅や日立製作所・日立建機がある。
- (6) シタチライフ 日立ライフ。日立グループの企業名。
- (7) オンノマル 埋まる。溝やぬかるみにはまる。『茨城方言民俗語辞典』には、オンノマルの見出しで「(1) 埋まる。「泥の中さ——」 (2) おぼれる」とある。同書には、自動詞のオンノマルに対して、他動詞のオンノメル、オンノメスが載っている。
- (8) ノマツチャッタ 埋まっちゃった。埋まってしまった。自動詞のノマルに対して、他動詞のノメルがある。
- (9) アシタ 翌日。談話中の「雪の日のアシタ」や「そのアシタ」のように使う。
- (10) ヨーグヨグ ヨグヨグ。ひどく。とても。例：あそこの おじんつあま よーぐよぐ オッコマッテ 寝てんだど。(あそこのおじいさん、とてもひどく具合がわるくて寝てるんだって)
- (11) ヒドイメ ツイチャッタ ひどいめに遭ってしまった。
- (12) メ 生き物名のあとにつく接尾辞。「生き物名＋メ」の使用範囲は地域によって異なる。

参考文献

- 赤城毅彦（1991）『茨城方言民俗語辞典』東京堂出版
兒玉卯一郎（1935）『福島県方言辞典』西澤書店
小林初夫編（2005）『高平方言集』高平方言教室
新妻三男（1973）『相馬方言考 改訂版』相馬郷土研究会
森下喜一（2010）『改訂増補 栃木県方言辞典』随想舎
山形巍・黒澤利康編著（2003）『方言事典—大津あたりの言葉と
民俗—』北茨城民俗学会

＊昔話の参考文献については、第二章に記したので省略した。

執筆者

杉本 妙子（茨城大学）

平成 30(2018)年度 文化庁委託事業報告書
方言と方言の昔話による生活文化の保存・継承

平成 31(2019)年 3 月 8 日発行

編者 杉本妙子（茨城大学）

〒310-8512 茨城県水戸市文京 2-1-1
茨城大学人文社会科学部 TEL 029(228)8104(代)
